野殿深作東遺跡

平成８年３月

茨城県

下館市教育委員会

野殿深作東遺跡

平成８年３月

茨城県

下館市教育委員会

（第５号住居跡出土の高坏）

序

野殿台地は、東方遥か筑波の紫峰から足尾・加波山へと連なる雄大な山並みが眺望できる景勝の地であります。そして眼下には、小貝川をはじめ勤行川や大谷川などの流域に形成される低地帯に肥沃な美田が限りなく広がっております。とくに、収穫の秋を迎えますと、これらの水田は黄金色に輝き、そして、みごとに実る稲穂を見るにつけ、自然の偉大な素晴らしさを実感できるのであります。

野殿深作東遺跡からは、１９軒の古代住居跡に伴って多くの土器類や炭化米が出土しております。この米も他の地区から運ばれたものとは思われません。おそらく、眼下に造成された水田から収穫されたものでありましょう。最近の発見例として、野殿台地の周辺域に所在する鎌田遺跡や明野町の吉田金井遺跡などの低地帯に営まれた集落跡に居住していた人々は、生活を潤す身近な耕作田として丹精込めて維持管理に努めたことでありましょうし、またその反面、たびたびの氾濫・洪水などで、想像以上の難渋を余儀なくしたことでもありましょう。ともあれ今回の調査は、これまであまり考えてもみなかった古代の人々の生活の有様を、いろいろ偲ぶ機会を与えてくれたと言っても過言ではありません。

このたび、野殿深作東遺跡の発掘調査報告書が上梓の運びとなりました。遺跡は５世紀前半の頃に営まれた集落跡でしたが、その存続期間が短かったとしましても、検出された住居跡や豊富な遺物などの整理・研究によりまして、下館地方の古代文化の多くの謎を解く手がかりを与えてくれた、注目すべき遺跡として評価されております。

発掘調査は、日々例年にない酷暑の連続でした。調査に従事していただいた多くの市民の方々や、ご協力をいただいた関係機関・関係各位に心からお礼を申し上げるとともに、発掘調査の全般から報告書の執筆・編集に至るまで、ご尽力を賜りました西宮一男先生に、あらためて深甚な感謝の意を表したいと存じます。

この報告書によって文化財に対する関心が一層深まり、文化財の保護や新しい文化の創造に寄与することができれば大変ありがたいと思います。

平成８年３月

下館市教育委員会教育長　大　山　　睦

例　　言

1　本報告は、茨城県下館市野殿字深作1,318番地外に所在する野殿深作東遺跡の発掘調査報告書である。
　遺跡名を「野殿深作東遺跡」としたのは、平成５年夏、当該地の西側に隣接して建設された茨城県立県西生涯学習センター敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を、茨城県教育財団調査課が実施しており、その東に当遺跡が所在するために付した名称である。

2　本調査は、下館市において市の教育文化施設を当該地に建設する計画があり、その記録保存を目的にして実施した事前の発掘調査である。

3　本調査は、下館市開発公社の要請で下館市教育委員会が主体となって実施された。

4　調査期間と実施面積は次の通りである。
　　調査期間　平成６年５月24日～７月16日（整理期間　７月18日～10月31日）
　　面　　積　3,000㎡

5　本調査は、下館市教育委員会の依頼により西宮一男が総括調査員として指導に当たり、藤田　実氏には調査補助員として協力を得た。

6　実測図の整理並びに出土遺物の復元作業と図面の作成などは、西宮と藤田が主体となり、五十嵐　隆、糸井昭子、山口美知子の各氏に協力を得てまとめた。

7　本書の執筆と編集は西宮が担当した。

8　調査に当たり、下館市教育委員会をはじめ、下記の関係諸機関の協力を得た。
　下館市開発公社、下館市嘉田生崎公民館、茨城県教育庁文化課、茨城県教育庁生涯学習課、東鉄工業株式会社水戸支店。

9　調査事務局は、下館市教育委員会生涯学習課文化係におき、整理会場として嘉田生崎公民館を使用させていただくとともに、下記の諸氏のご協力を得ることにより、円滑な調査と整理作業を実施することができた。記して感謝申し上げたい。
開　発　公　社　清野英教、杉山守男、鈴木徳一、野村隆子、秋山　実
生　涯　学　習　課　小里　治、岩崎良一、小林　均、北條洋子、小山法子
嘉田生崎公民館　生井　一、安達次男、仁平智子
東鉄工業株式会社　鶴岡信之
県西教育事務所　青木武文

10　発掘調査期間中は、例年にない記録的な猛暑に加え、予想をはるかに超える集中豪雨にも数回見舞われるなど、苦渋の日々を体験した。ここに、発掘作業にご協力くださった方々の氏名を記して感謝の意を表したい。
阿部美代子、飯泉和子、飯泉みよ子、稲葉　恵、色川昌訓、上野よね子、大吉　実、押坂なお、小畑且子、川田次雄、坂入二三男、鴫原昭二、杉山淳一、杉山ハナ、杉山ミキ、瀬畑しな、外池早苗、羽田スミ、広瀬もと、永盛竹三郎、村上トミ子、山崎クニ、吉崎睦子

11　調査に関わる遺物・図面・写真等資料のすべては下館市教育委員会で保管している。

目　　次

序　　下館市教育委員会教育長　大山　　睦
例　言
1　下館市の位置と沿革 …… 1
2　遺 跡 の 分 布 …… 2
3　検出された遺構と遺物 …… 6
（1）　第1号住居跡 …… 7
（2）　第2号住居跡 …… 10
（3）　第3号住居跡 …… 12
（4）　第4号住居跡 …… 15
（5）　第5号住居跡 …… 18
（6）　第6号住居跡 …… 20
（7）　第7号住居跡 …… 24
（8）　第8号住居跡 …… 27
（9）　第9号住居跡 …… 30
(10)　第10号住居跡 …… 32
(11)　第11号住居跡 …… 37
(12)　第12号住居跡 …… 40
(13)　第13号住居跡 …… 41
(14)　第14号住居跡 …… 43
(15)　第15号住居跡 …… 47
(16)　第16号住居跡 …… 48
(17)　第17号住居跡 …… 52
(18)　第18号住居跡 …… 53
(19)　第19号住居跡 …… 54
(20)　第1号土　坑 …… 56
(21)　第2号土　坑 …… 57
(22)　第3号土　坑 …… 58
(23)　第4号土　坑 …… 59
(24)　第5号土　坑 …… 60
(25)　第6号土　坑 …… 60
(26)　第7号土　坑 …… 61
(27)　第8号土　坑 …… 62
(28)　そ　の　他 …… 63
4　お　わ　り　に …… 65

挿 図 ・ 図 版 目 次

挿　図

第１図　遺跡周辺地形図 …… 5
第２図　野殿深作東遺跡遺構配置図 …… 6
第３図　第１号住居跡実測図 …… 8
第４図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 10
第５図　第２号住居跡実測図 …… 11
第６図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 12
第７図　第３号住居跡実測図 …… 14
第８図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 14
第９図　第４号住居跡実測図 …… 16
第10図　第４号住居跡出土遺物実測図 …… 17
第11図　第５号住居跡実測図 …… 19
第12図　第５号住居跡出土遺物実測図 …… 20
第13図　第６号住居跡実測図 …… 22
第14図　第６号住居跡出土遺物実測図 …… 23
第15図　第７号住居跡実測図 …… 25
第16図　第７号住居跡出土遺物実測図 …… 26
第17図　第８号住居跡実測図 …… 28
第18図　第８号住居跡出土遺物実測図 …… 29
第19図　第９号住居跡実測図 …… 31
第20図　第９号住居跡出土遺物実測図 …… 32
第21図　第10号住居跡実測図 …… 33
第22図　第10号住居跡出土遺物実測図 …… 37
第23図　第11号住居跡実測図 …… 38
第24図　第11号住居跡出土遺物実測図 …… 39
第25図　第12号住居跡実測図 …… 40
第26図　第13号住居跡実測図 …… 42
第27図　第13号住居跡出土遺物実測図 …… 43
第28図　第14号住居跡実測図 …… 44
第29図　第14号住居跡出土遺物実測図 …… 47
第30図　第15号住居跡実測図 …… 48
第31図　第15号住居跡出土遺物実測図 …… 48
第32図　第16号住居跡実測図 …… 49
第33図　第16号住居跡出土遺物実測図 …… 51
第34図　第17号住居跡実測図 …… 52
第35図　第17号住居跡出土遺物実測図 …… 53
第36図　第18号住居跡実測図 …… 54
第37図　第19号住居跡実測図 …… 55
第38図　第19号住居跡出土遺物実測図 …… 55
第39図　第１号土坑実測図 …… 56
第40図　第２号土坑実測図 …… 57
第41図　第３号土坑実測図 …… 58
第42図　第３号土坑出土遺物実測図 …… 59
第43図　第４号土坑実測図 …… 59
第44図　第５号土坑実測図 …… 60
第45図　第６号土坑実測図 …… 60
第46図　第７号土坑実測図 …… 61
第47図　第７号土坑出土遺物実測図 …… 61
第48図　第８号土坑実測図 …… 62
第49図　表採及び土捨場から得た遺物実測図 …… 64

図　版

図版１　遺跡から筑波・足尾・加波の山並みを望む。遺跡全景。現場テントの下で団欒のひととき。
図版２　第１号住居跡・第２号住居跡・第３号住居跡
図版３　第４号住居跡・第５号住居跡・第６号住居跡
図版４　第７号住居跡・第８号住居跡・第９号住居跡
図版５　第10号住居跡・第11号住居跡・第12号住居跡
図版６　第13号住居跡・第14号住居跡・第15号住居跡
図版７　第16号住居跡・第17号住居跡・第18号住居跡
図版８　第19号住居跡・第１号土坑・第２号土坑
図版９　第３号土坑・第８号土坑
図版10　第３号住、砥石・坏出土状況。第４号住、小型壷・有孔円板出土状況
図版11　第５号住、高坏出土状況。第７号住、土器出土状況
図版12　第７号住、鍬先出土状況。第８号住、砥石出土状況。第９号住、土器出土状況
図版13　第10号住、須恵器・土器・小型壷出土状況
図版14　第10号住、臼玉・坏出土状況。第12号住、床面状況
図版15　第13号住、管玉出土状況。第15号住、鎌先出土状況。第16号住、坏出土状況
図版16　第16号住、勾玉出土状況。第１号住居跡出土遺物
図版17　第２・３・４号住居跡出土遺物
図版18　第５号住居跡出土遺物
図版19　第６・７(１)号住居跡出土遺物
図版20　第７号住居跡出土遺物(２)
図版21　第７(３)・８(１)号住居出土遺物
図版22　第８号住居跡出土遺物(２)
図版23　第９・10(１)号住居跡出土遺物
図版24　第10号住居跡出土遺物(２)
図版25　第10(３)・11・13号住居跡出土遺物
図版26　第14・15・16(１)号住居跡出土遺物
図版27　第16号住居跡出土遺物(２)
図版28　第３号土坑出土遺物

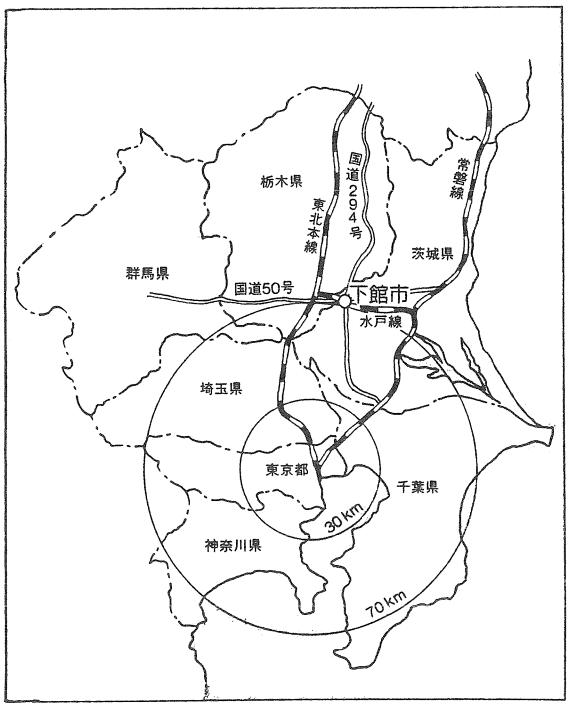
抄　　録

1　調査は下館市の文化施設建設計画に伴い、記録保存のため、事前に実施した発掘調査である。調査面積は約3,000㎡。現場作業は平成６年５月24日～７月16日に亘り実施し、７月18日～10月31日まで整理作業を行った。

2　野殿深作東遺跡は、大谷川右岸台地上の東端に位置し、下館市大字野殿字深作1318番地外に所在する。
当該地は、小貝川流域に展開する広大な沖積地を視野におき、東方遥か筑波の峰から足尾・加波の山塊が望める風光明媚な環境に立地する。調査により古墳時代中期前葉の和泉期に比定される集落跡を検出する。

遺　跡　名	実施面積	時代	遺構種別	遺構数	遺　　物
野殿深作東	3,000㎡	古墳	住居跡	１９	**土師器**
			土　坑	8	甕・壷・埦・坏・高坏・甑・鉢・深鉢
					須恵器 破片数点
					土製品 土玉
					滑石製模造品
					勾玉・管玉・有孔円板・剣形品・臼玉円板
					石製品 砥石・すり石
					鉄製品 鎌先・鍬先・刀子
					その他 鉄滓

1　下館市の位置と沿革



下館市は、東京から約70kmの首都圏の周辺にあり、関東平野の北部にあたる茨城県の西部に位置し、東経139度58分、北緯36度18分。地質は洪積層と沖積層からなっており、東は紫にけぶる筑波・加波の山塊が連なり、北には遠く日光・那須の連山が聳え、南に富士の霊峰を望まれるなど、極めて良好な自然環境のもとで市域は形成されている。

市域の東西を小貝川と鬼怒川が南流し、北は栃木県二宮町に、東は真壁郡協和町、南は同明野町及び関城町、西は鬼怒川を隔てて結城市に接している。市街地のほぼ中央を南方に舌状台地が延び、その南寄りに市街地が形成されている。台地の東を勤行川、西を大谷川が南流し、市の南部で小貝川に流入する。市街地の中央を東西に国道50号が貫き、国道とほぼ並行してＪＲ水戸線が走る。また、市域を南北に国道294号が縦断し、国道に沿って下館駅を起点とする真岡鉄道・関東鉄道常総線が通る。

下館市の総面積は86.25km²。周囲約61kmで、東西約13km、南北16kmを測り、標高は最高で56ｍ、最低で20ｍとなっている。また、平成８年３月１日現在の人口は、65,997人（男33,067人、女32,930人）である。

下館地方は、河川の流域に展開する沖積地帯と台地の交錯する地域で、古くから開け、常陸国（茨城県）と下野国（栃木県）を結ぶ要衝の地であるとともに、政治、経済、教育、文化の中心地でもあった。

鬼怒川の左岸台地をはじめ、小貝・勤行・大谷の各河川沿いの台地からは、縄文・弥生・古墳各時代の遺跡をはじめ、数多くの遺物が出土している。とくに、女方（おざかた）地区から出土した「人面土器」や「白毫のある人物埴輪」などは全国的にも有名であり、古代の新治地方を支配した比奈良珠命の墳墓と伝える徳持古墳（葦間山古墳）や、下館の繁栄を招来した由緒ある久下田城跡などの周知の遺跡が存在する。

「しもだて」の名称が歴史上に登場してくるのは中世になってからである。

弘治２年（1556）、結城氏新法度に「山川・下たて・下妻、惣別此方成敗」とあり、永禄10年（1567）鋳造の定林寺鐘銘にも「常州伊佐群奥崎郷下館村玉叟山定林禅寺之樓鐘也」とある。因に、下館の地名の由来は、勇武の誉れ高い藤原秀郷が天慶の乱（935－941）にあたり、平将門を討つため、当地に下館・中館・上館の３館を築いたことによるともいわれるが異説もある。

下館市域に属する「和名抄」記載の郷は、常陸国新治郡の竹島・沼田・伊讃・博多の各郷とされる。新治郡は平安末期までに東郡・中郡・西郡・小栗御厨に四分されたが、市域はそのうちの西郡・小栗御厨が該当する。西郡はさらに南条・北条に分れ、南条は関郡、北条は伊佐郡と称した。なお、「永享記」の嘉吉元年（1441）４月16日に伊佐庄の名が見えるが、この地が庄園として機能を有したかは明らかでない。

南北朝動乱期には、奥州伊達氏の祖とされる伊佐氏が南朝方に呼応し、中館・伊佐城に拠って北朝勢と激しい戦闘を繰りひろげたが、興国４年（1343）に伊佐城は陥落している。

伊佐氏の滅亡後、文明10年（1478）、結城氏広の家臣水谷勝氏が下館に館を築き、天文・永禄期の頃（1532～1569）、豪勇の将として武名をとどろかせた水谷正村（蟠竜斎）が下野国境の要地、樋口に久下田城を築い

て宇都宮氏に備えるとともに、結城氏の支援を得て下野国内まで勢力を伸ばしている。

水谷氏８代の勝隆は、大阪夏・冬の陣で武功をたて、寛永16年（1639）備中・成羽（岡山県成羽町）に移封。その後へ水戸徳川氏初代頼房の嫡男松平頼重が５万石をもって入城しているが、同19年に讃岐・高松に転封となり、下館藩は一時廃藩となり城番が置かれている。

その後、寛文３年（1663）に増山氏、元禄16年（1703）に黒田氏を経て享保17年（1732）、石川氏２万石の支配となり、明治維新に及んでいる。

下館が商業都市として機能し、繁栄の礎を築いたのは、寛永16年に入封した松平頼重による町並み整備に努めたことに始まる。その後、財政維持に苦難の時期があったとしても、流通機能をはじめ商都として著しい発展を遂げている。その背景には、恵まれた地理的条件と相俟って、有力商人層を中心にしての目覚しい商業活動が展開でき得たからであり、それを支えてきたのが石川氏の藩政運営であったことは言うまでもない。

『下館市史』によると、下館藩領と城下町の人口・職業構成を次のように記している。

寛保元年（1741）の領内の武士を除いた人口は12,933（男7,303・女5,630）で、戸数2,918。城下町の人口は、石川氏が入封した享保17年（1732）に1,600、安永７年（1778）に1,634。城下町の職業構成（軒数）は、寛永10年（1633）には、綿屋９、木綿屋４、穀屋９、油屋２、酒造屋４、八百屋４、菜種屋２、古着屋１、酒小売屋６、質屋２、小間物屋５、鍋屋１、紺屋１、荒物屋２となっている。

明治４年（1871）７月の廃藩置県（全国を３府302県）の施行で下館藩は下館県となり、同年11月茨城県に統合。同15年に田中・西郷谷両村が合併して下館町が誕生し、同22年（1889）の町村制施行に伴い、市域に真壁郡下館町、中村（樋口・口戸・柴山・折本・林・筑瀬・谷部・石塔・泉・中館の各村が合併）、河間村（奥田・下高田・落合・八田・羽方・蒔田・国府田・大関・上中山・野の各村が合併）、竹島村（川澄・高島・小林・横島・直井・金丸・稲野辺・市野辺の各村が合併）、養蚕村（成田・茂田・塚原・島・深見・下中山・蕨・徳持・大塚・上川中子・川連の各村が合併）、嘉田生崎村（下岡崎、東榎生・西榎生・野田・西石田・飯田・嘉家佐和の各村が合併）、大田村（二木成・玉戸・西芳町・西方・野殿・下野殿・布川の各村が合併）、伊讃村（谷中・飯島・栗島・石原田・西大島・下平塚・西谷貝・岡芹・菅谷・外塚・神分・笹塚・小川・伊佐山・九蔵新田・下川島・女方の各村が合併）、五所村（子思儀・森添島・西山田・下江連・五所宮・大谷・小塙・灰塚・棹ケ島・上平塚・山崎の各村が合併）が成立。昭和26年（1951）伊讃村が下館町と合併、同29年に竹島・養蚕両村が下館町と合併、同年３月に五所・中・河間・大田・嘉田生崎の五村が下館町と合併して、新たに下館市が発足した。

２　遺跡の分布

下館市は、前述したように鬼怒・小貝・勤行・大谷の４本の河川によって浸食された台地上に立地しており、遺跡もまた、それらの河川や樹枝状に入り組む谷を望む台地上に数多く分布し、縄文時代の早期の頃に溯って人々の営みを知ることができる。

縄文時代では、これまでに周知されている遺跡としては、まず、鬼怒川左岸台地上の女方本田前遺跡があげられる。この遺跡は複合遺跡であるとしても、早期に比定される土器を伴っていることから、市域で最古の遺跡のひとつにあげられている。次いで、十二天遺跡・下川島弁天遺跡・玉戸新田遺跡などが前期の遺跡と確認されているが、弁天並びに玉戸新田の両遺跡は中期から晩期の遺物が伴出しており、複合遺跡の様相を示して

いる。この他、左岸台地上には前原遺跡・元坪遺跡などが知られているが、いずれも中期から後・晩期に比定される遺跡である。

大谷川右岸台地上には、本遺跡に近接して不動坂遺跡があり、晩期の資料が得られている。また、清水不動遺跡は、後期末葉から晩期初頭の頃の資料が表採できる。昭和56年８月には外塚遺跡で都市計画事業に伴う事前の発掘調査が行われ、縄文時代の生活を復原するうえで貴重な数々の資料が得られている。遺跡は、大谷川東岸から東へ約350ｍ隔てる神明神社跡付近の標高約30ｍを測る微高地上に所在し、前・中・後・晩期と長期間に亘って営まれた遺跡であることが、土器、石器、土製品、動・植物の遺存体等の豊富な出土品により立証されるとともに、東日本における数少ない低地遺跡のひとつとして注目されている（昭和60年３月『外塚遺跡』、そのダイジェスト版が61年３月、ともに下館市教育委員会から刊行されている）。

勤行川左岸台地上では、中期の土器片が散布する大関遺跡が知られているにすぎない。したがって、計画的な分布調査を行い、実態把握の必要性が望まれている。

小貝川流域に目を転じると、所在の明らかな遺跡のすべてが左岸台地上に位置する。これまでに、宮脇遺跡・南台遺跡・深見新田遺跡・権現山遺跡などが周知されているが、いずれも中期後葉から晩期前葉にかけての資料が得られる遺跡である。

市域における弥生時代の遺跡の数は極めて少ない。本遺跡からも数点の土器片が表採され、問題提起されているように、他にも市域の範囲で、遺跡の存在を立証し得る根拠に乏しく、その判断に苦慮した実例のいくつかを地元の研究者から寄せられている。してみると、現在のところ、弥生時代に位置付けできる遺跡は、僅かに女方遺跡が知られているにすぎないということになる。

女方遺跡は、昭和14年（1939）田中国男が３か年に亘り発掘調査を行った「再葬墓」の遺跡である。調査面積約400㎡の範囲から41基のピット群が検出され、市民周知の人面土器なども発見されており、祭祀遺跡と考えられている。

古墳時代における古墳の分布は、大谷川右岸台地の縁部一体で、本遺跡に近接して円墳数基からなる野殿古墳群（内１基の主体部は礫小口積石棺）が認められるほかは、鬼怒川左岸台地上の女方古墳群（円墳10余基）と弁天古墳群（円墳２基）。小貝川左岸では、その沖積地に立地している徳持古墳（芦間山古墳・全長約90ｍの前方後円墳）をはじめ、台地上に確認される南台古墳群（円墳２基）・北台古墳群（円墳）・宮脇古墳群（円墳）・北茂田古墳群（円墳３基）などがあり、勤行川右岸台地上に富士東古墳群（円墳３基）が所在する。分布上の特徴については、おおむね市域の東と西に偏在する点があげられる。これらの古墳群の性格などは、昭和27・28年に女方古墳群の円墳３基（主体部は横穴式石室・礫小口積石棺など）の学術調査を除いて、ほとんど本格的な調査が行われておらず不明の点も多いが、徳持古墳について専門家は、築造年代を６世紀前葉と比定している。

古墳時代の集落跡の存在を予測可能とする遺物散布地（包蔵地）を概観するとき、市域のそれは縄文時代の遺跡と重複している例が極めて多いことに気がつく。昭和45年度の『茨城県遺跡地名表』に登載される遺跡のうち、鬼怒川左岸台地上に所在する女方本田前遺跡をはじめとして、十二天遺跡・下川島弁天遺跡・玉戸新田遺跡・前原遺跡・鷹の巣遺跡・元坪遺跡などは、いずれも土師器・須恵器を伴っている。

大谷川右岸台地上に在る本遺跡を加えて、不動坂遺跡・清水不動遺跡にも土師器・須恵器の散布が認められ、勤行川左岸の大関遺跡にしても同様である。

小貝川左岸台地上に所在する宮脇遺跡・南台遺跡・深見新田遺跡・権現山遺跡に加えて北大久保遺跡でも、それぞれ土師器・須恵器の散布が観察されている。

このように、古墳時代の所産と想定される土器を伴っている遺跡を、地名表に拠って列挙してみたが、これらのすべては地表観察の結果でまとめられたものだけに、現時点においては、遺跡の性格などを求めることはほとんど不可能に近い。遺跡のなかには、或いは、歴史時代の範疇に含まれる遺跡が存在する可能性があるかも知れないので、このことに十分留意しながら検討していく必要があろう。

下館市域において、これまでに実施された古墳時代の集落遺構の調査は、平成５年度の野殿遺跡に次いで本遺跡が２例目となるが、ここで、開発行為に伴って発見された「鎌田遺跡」の概略について触れておきたい。

鎌田遺跡は、勤行川と大谷川に挟まれた標高約28ｍとを測る沖積地に立地し、これまでまったく知られていない遺跡だったが、昭和55年２月、鎌田地区で実施された圃場整備事業に伴って、多量の土器が出土したことによって発見された。位置は下館市立南中学校の東約200ｍの平坦地で、現在は水田となっている。その時点で速やかな対応がなかったために、正確な出土地点や遺構・遺物など出土状況の詳細については明らかでない。しかし、幸いなことに、工事関係者の好意によって保存が図られた一部の土器片を下館市教育委員会で保管していたが、それを筑波大学歴史・人類学系考古学研究室が主体となって整理・復原を行い、研究成果を平成３年の『古墳測量調査報告書１〈茨城南部古代地域史研究〉』に発表されている。

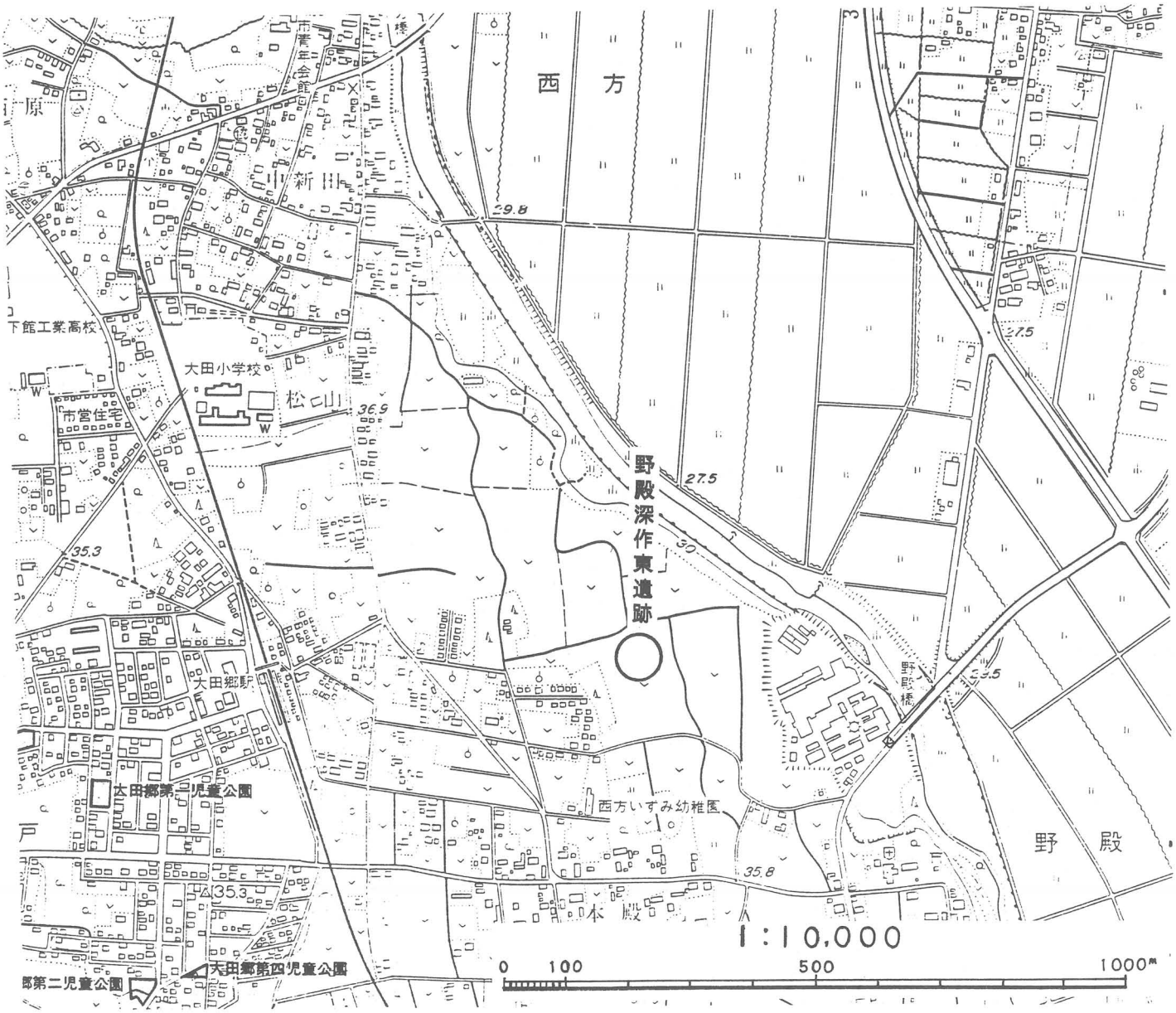
それによると、出土した土器は壺・坩・甕・高坏・器台などの器種が主体で、土器の組合せから集落跡の存在を特定し、年代的な位置付けを４世紀から５世紀前葉の五領期の範疇に入る遺跡としている。そして、Ｓ字状口縁台付甕など、いわゆる東海系の土器が流入している点にとくに注目され、その背景には人々が低地への進出になんらかの形で関わっていたと指摘している。

このように、低地に成立を果たした五領期の鎌田遺跡の発見は、これまで当該期の諸様相について不明確の面が多かっただけに、今後の調査研究に少なからず示唆を与えるものと期待されている。

歴史時代に入り、県西地方で学術的に高く評価される遺跡として、まず、協和町の新治郡衙跡・新治廃寺跡と結城市の結城廃寺跡などをあげることができるが、下館市域にはこれまでのところ該期に比定される遺跡は未発見である。

下館地方は、西に下総、北に下野と境する要衝の地を占めていた関係で、律令体制下の施策をすすめるにあたり、行政に関わる施設の構築が不可欠とされた時期があったようにも考えられることをふまえ、やや飛躍するが、もともと下館の地には比較的平坦地が少ないことに加え、河川・沼沢・低地といった不適な空間があまりにも広範に及ぶとする地理的な制約が要因となり、施設の構築を見送られた経緯があったのかも知れない。としても、平安後期には、協和町から市域の北部にかけて成立をみた小栗御厨とに関わる遺跡の顕彰も今後の課題といえるし、国府田周辺に常陸国府の神撰田が置かれたとする史実の立証についても、考古学的領域からの検討が求められるかも知れない。

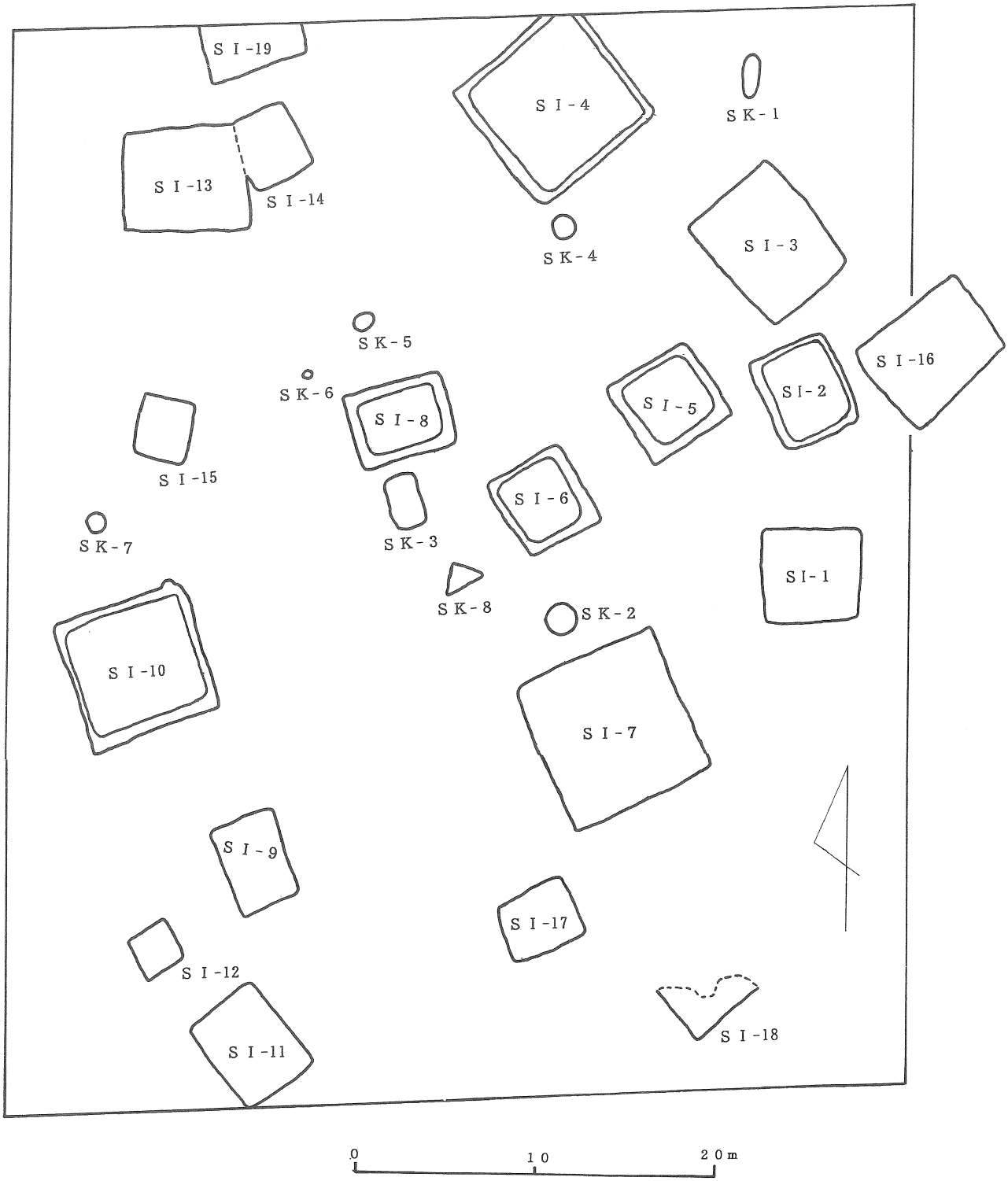
いずれにしても、下館地方には古代の後半から中世にかけて、興味ある幾多の課題を投げかけられているのである。たとえば、名も知られていない在地有力者の中には、館を構え、土塁を築いて防御的な備えに徹した人物もいたであろうし、また、隷属的な立場に置かれていた人々は竪穴式住居などで苦渋な生活を余儀なくしていたことも想像できる。ともあれ、これらの人々の生活の匂いを留める遺構が、どこかに埋存していて然るべきと考えられる。市域内において、当該期の遺跡が発見されることを、挙げて、期待するものである。


西方
新田
下館工業高校
大田小学校
松山
市営住宅
野殿深作東遺跡
大田郷駅
大田郷第二児童公園
西方いずみ幼稚園
野殿
本殿
大田郷第四児童公園
郷第二児童公園
1:10,000
0 100 500 1000m

第１図　遺跡周辺地形図

3　検出された遺構と遺物

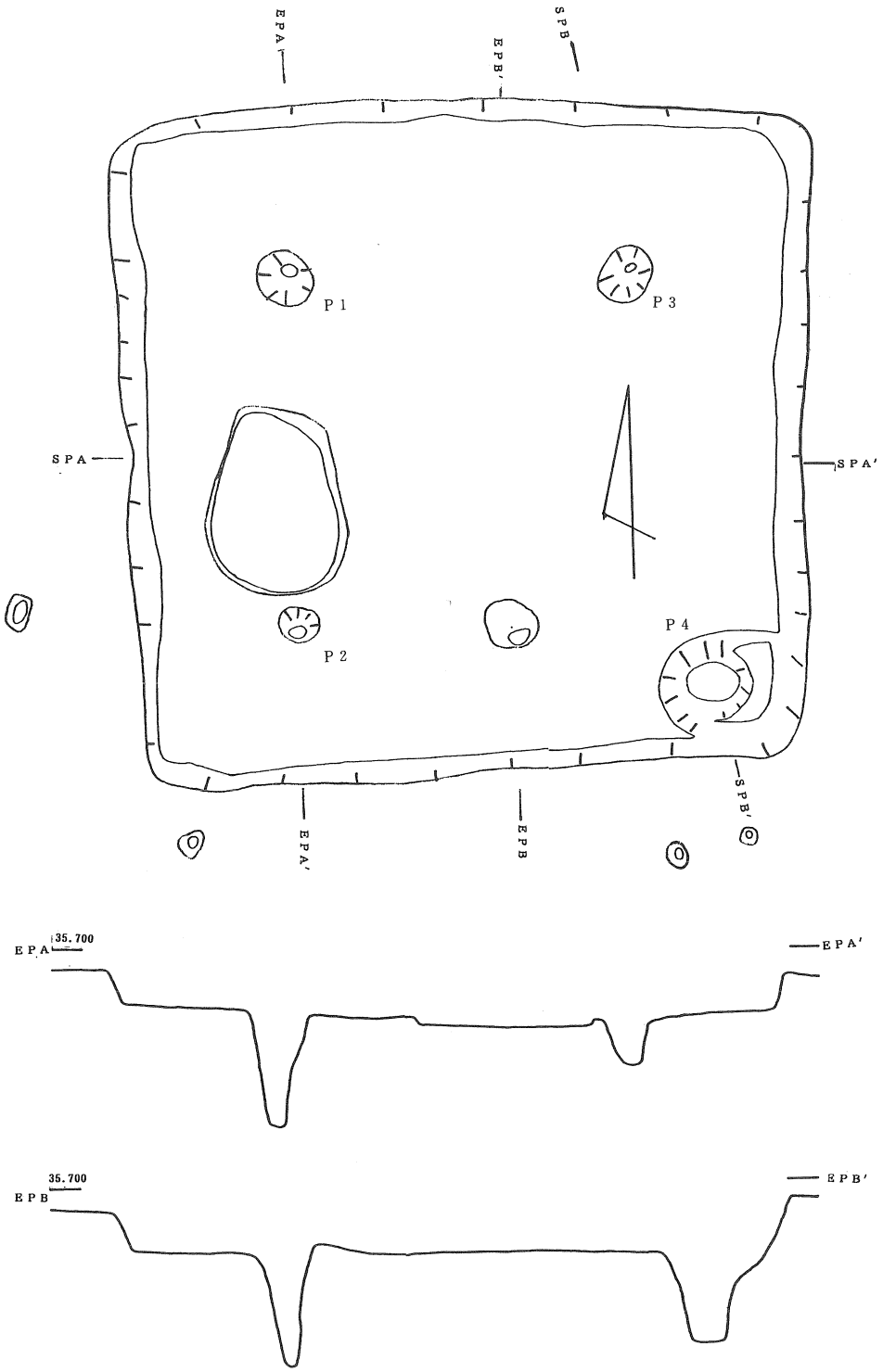
東西50ｍ×南北60ｍの3,000㎡の調査区において、竪穴住居跡19棟と土坑跡８基が確認されているが、これらの遺構は特定の場所に偏ることなく平均的に分布する。

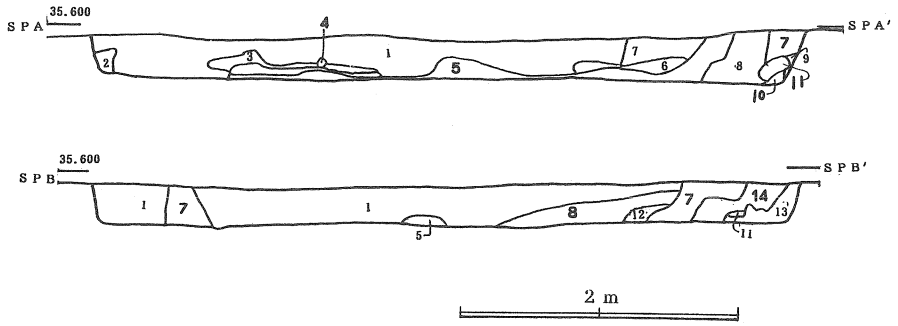


第２図　野殿深作東遺跡遺構配置図

（1）第1号住居跡（第3・4図）

形　態　方形を呈する。**主軸方位**　N－4°－W。**規　模**　中軸線上南北5.35m、東西5.15mを測る。**柱　穴**　P1～4の4本が相当する。P1径0.45m、深さ0.90m、P2径0.30m、深さ0.30m、P3径0.40m、深さ0.90m、P4径0.50m、深さ0.70mを測る。**壁　溝**　遺存部より検出されていない。**床　面**　貼り床で、とくに中央部がしまっている。中央から西壁にかけて焼土充満、炭化材が遺存。**貯蔵穴**　北東部コーナーに掘り込まれている。ほぼ円形を呈し、東西径0.70m、南北径0.75m、深さ0.19mを測る。**遺　物**　土師器　坏・埦・高坏・甕、滑石製品　臼玉、石製品　砥石・敲石（すり石）、土製品　土玉などが検出されている。





土層凡例

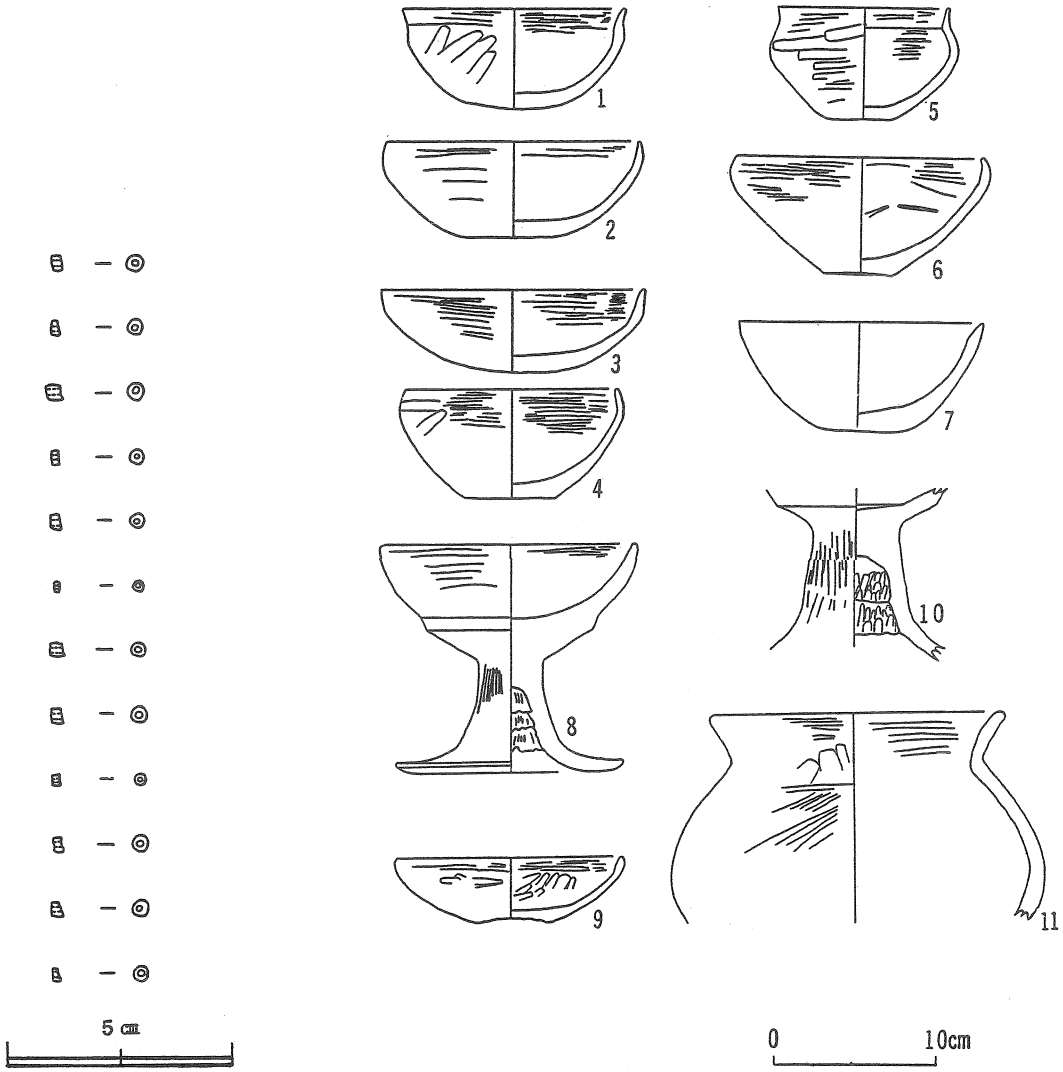
1 黒褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含む。焼土粒子・炭粒も若干含み、しまりは普通。）
2 明褐色（ローム粒子を多く含む。）
3 赤褐色（焼土粒子を多く含む。しまりはやや柔らかい。）
4 黒　色（ローム粒・焼土粒を若干含む。しまりは柔らかい。）
5 黒褐色（ローム粒子を若干含む。しまりは非常に良い。）
6 暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒子を多く含み、しまりは非常に良い。）
7 暗褐色（ローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりはやや柔らかい。）
8 暗褐色（ローム粒子を多く含み、炭粒と焼土粒子も若干含む。しまりはやや柔らかい。）
9 黄褐色（ロームに似る。しまりは普通。）
10黒褐色（焼土粒を若干含み、しまりはやや柔らかい。）
11焼　土（しまりは良い。）
12暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
13褐　色（ローム粒子を多く含み、焼土粒子も少量含む。しまりは普通。）
14暗褐色（ローム粒子を多く含み、焼土粒子も少量含む。しまりは普通。）

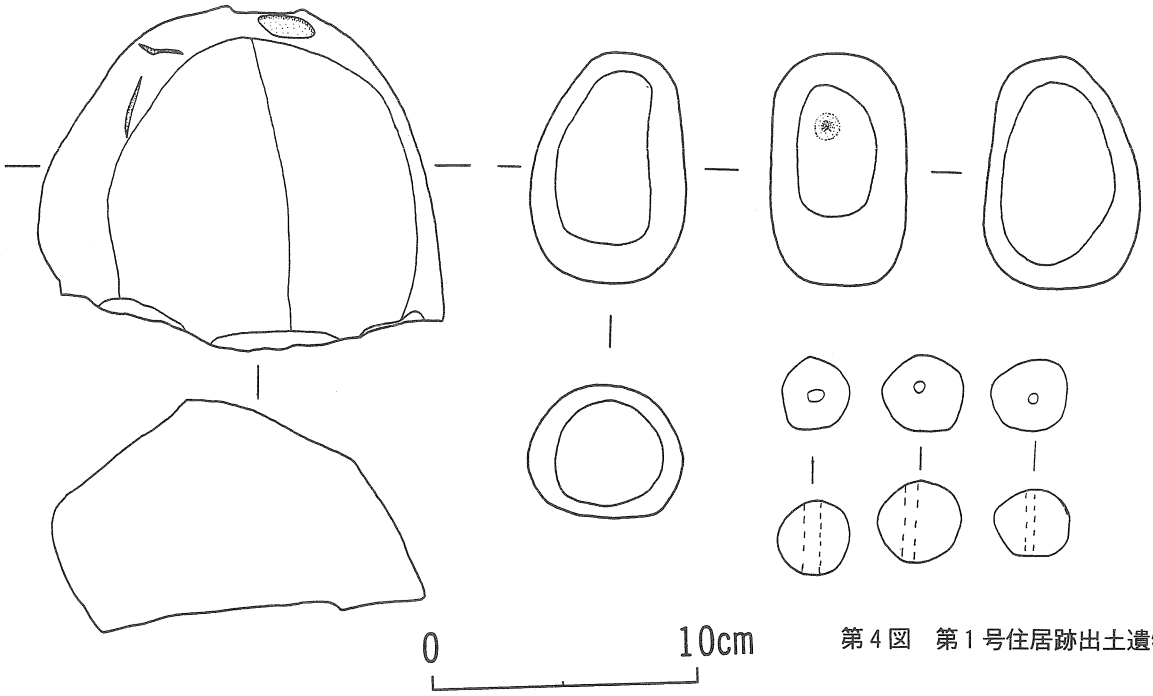
第３図　第１号住居跡実測図

第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 6.0 口径 13.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は外傾する。体部内・外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	体部外面に煤付着 北西部床面
2	土師坏	器高 5.9 口径 16.1	口縁部の一部欠損。丸底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はゆるやかに外傾する。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	北西部覆土下層
3	土師坏	器高 5.0 口径 16.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部はゆるやかに外傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。	黄褐色	砂粒	普通	中央部床面
4	土師甕	器高 6.7 口径 13.3 底径 5.4	口縁部の一部欠損。上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎する。口縁部外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	灰褐色	砂粒	普通	南東貯蔵穴内覆土中層
5	土師甕	器高 6.7 口径 10.8 底径 4.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。底部から体部にかけてヘラ削り。口縁部内・外面及び体部内面ナデ。	赤褐色	砂粒	良好	北壁付近床面
6	土師甕	器高 7.2 口径 15.3 底径 4.3	上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内彎する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部ヘラナデ。内・外面赤彩。	赤褐色	砂粒 雲母	良好	北壁付近覆土下層
7	土師甕	器高 6.7 口径 15.4	丸底気味。体部は内彎して立ち上がる。体部内面と口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り。	褐色	砂粒	粗雑	南東コーナー付近床面
8	土師高坏	器高 13.9 口径 16.1 底径 14.3	脚部は円筒状で、裾部で大きく開く。坏部は外面下方に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。坏部内・外面ヘラ磨き。脚部内・外面ヘラ削り。	黄褐色	砂粒	普通	東壁付近床面
9	土師高坏	口径 14.0	脚部欠損。坏部は内彎気味に開き、内・外面ともヘラ磨き。	黄褐色	砂粒	良好	中央部床面
10	土師高坏		脚部のみの破片。脚部は円筒状で、裾部で大きく開く。脚部内・外面縦方向ヘラ磨き。	暗褐色	砂粒	普通	北西コーナー付近覆土下層
11	土師甕	底径 17.8	胴部上位から口縁部にかけての破片。頸部はくびれ、口縁部は外反する。口唇部を外上方にわずかにつまみ上げる。口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ヘラ削リ。	暗褐色	砂粒	普通	北西コーナー付近床面

番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
12	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	南壁付近覆土下層	滑石
13	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
14	臼玉	0.6	0.5	0.5	2.0	0.1	100	〃	〃
15	臼玉	0.5	0.5	0.2	1.5	0.1	100	〃	〃
16	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
17	臼玉	0.3	0.3	0.2	1.5	0.1	100	〃	〃
18	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	南壁付近覆土	〃
19	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
20	臼玉	0.3	0.4	0.2	1.5	0.1	100	〃	〃
21	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
22	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
23	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
24	敲石（すり石）	8.7	5.9	5.0	…	393.0	100	中央部床着	
25	砥石	12.8	15.2	8.0	…	2250.0	100	西壁付近覆土下層	2面使用
26	土玉	3.1	3.1	…	5.0	14.1	100	南壁際覆土下層	
27	土玉	2.8	2.7	…	6.0	13.8	100	東壁際覆土中層	
28	土玉	2.8	2.9	…	2.0	13.6	100	中央部床着	

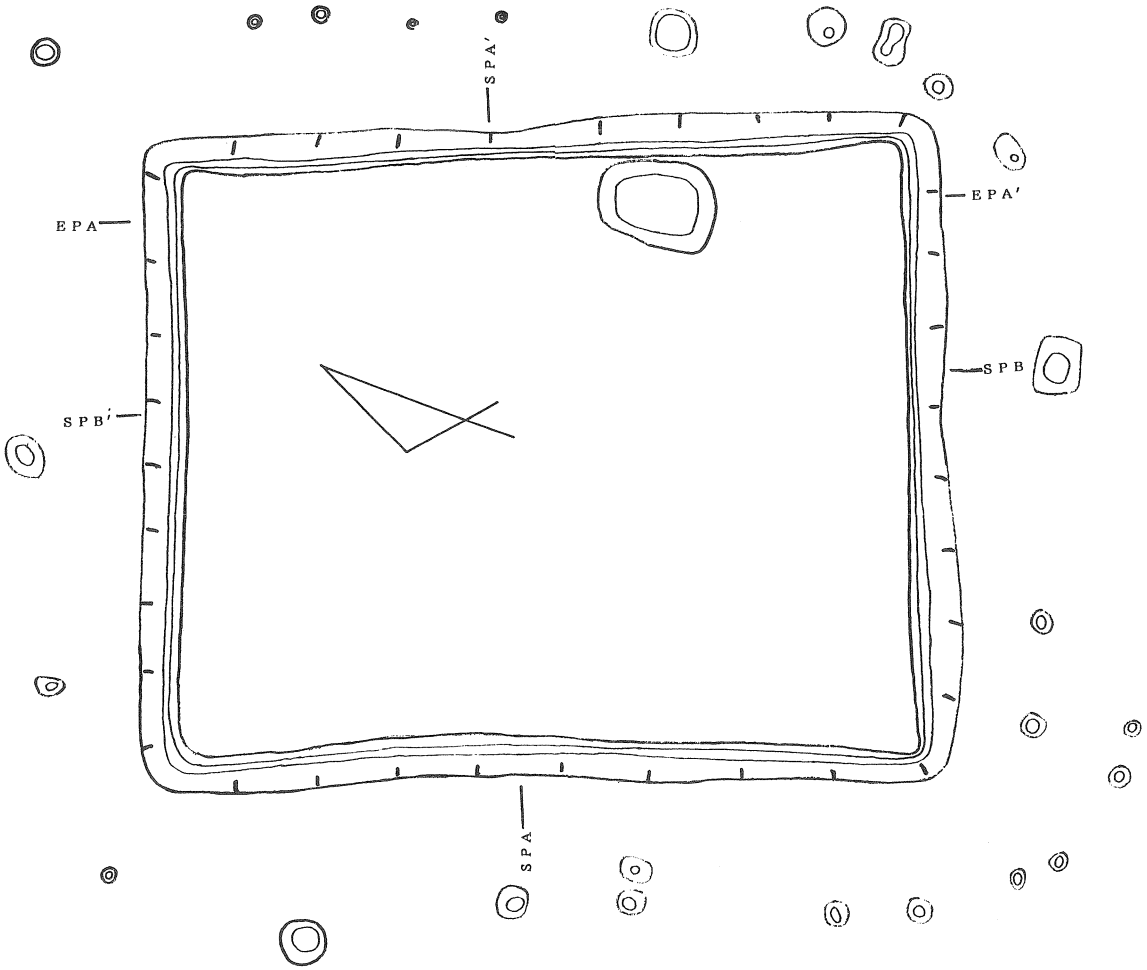


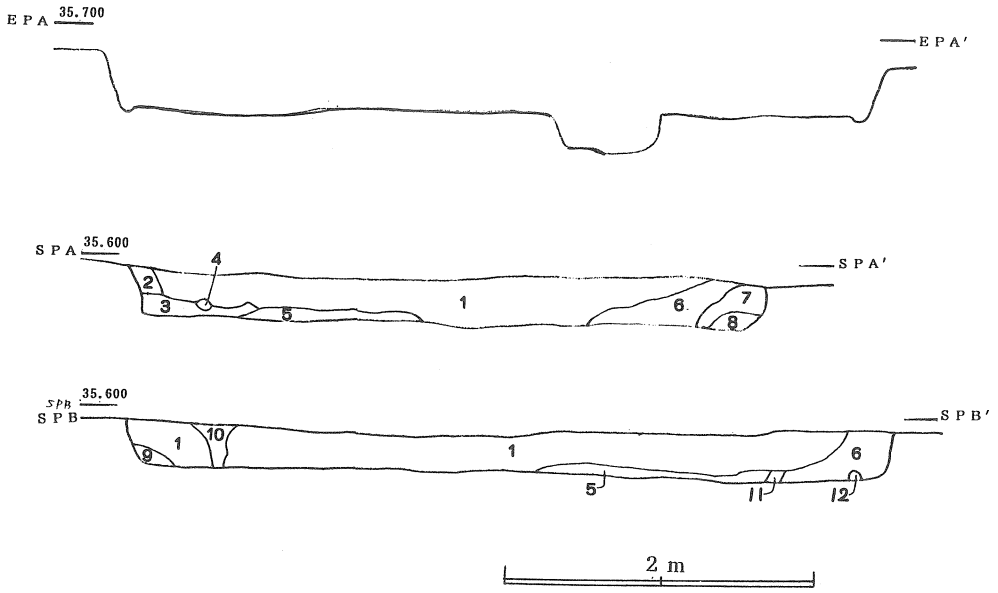


第４図　第１号住居跡出土遺物実測図

（２）第２号住居跡（第５・６図）

形　態　やや長方形を呈する。**主軸方位**　N－23°－W。**規　模**　中軸線上南北5.25m、東西4.35mを測る。**柱　穴**　無し。**壁　溝**　全壁に巡り、幅0.10～0.15m、深さ0.05mを測る。**床　面**　貼り床で堅くしまり、とくに西側が顕著。**貯蔵穴**　東壁に添って東南部コーナー寄りに掘り込まれている。楕円形を呈し、長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.28mを測る。**遺　物**　土師器　埦・甕・小型甕、石製品　敲石（すり石）などが検出されている。





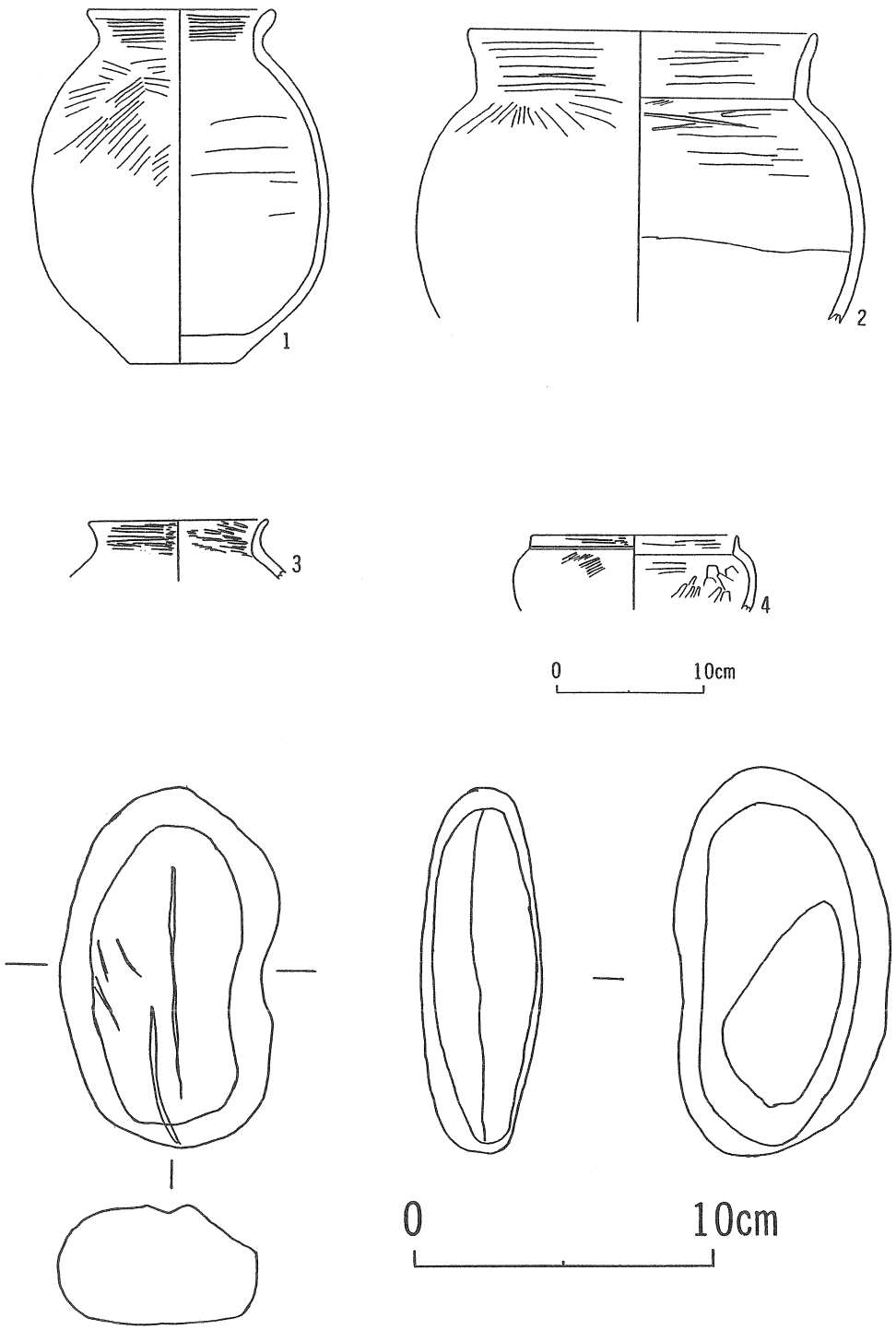
土層凡例
1暗褐色（ローム粒子・黒色粒・炭粒を若干含む。しまりは普通。）
2黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。）
3暗褐色（ローム小ブロック、ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
4黄褐色（ローム大ブロック。しまりは非常に良い。）
5暗褐色（ローム粒子を少量含み。しまりは普通。）
6明褐色（ローム粒・ローム粒子を多く含む。）
7明褐色（ローム粒子を多く含む。しまりは普通。）
8黒　色（ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
9黒　色（ローム小ブロックを若干含む。）
10黒　色（ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。）
11褐　色（ローム粒子を少量含み、しまりは非常に良い。）
12黄褐色（ローム粒子のみ。しまりは柔らかい。）

第5図　第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師甕	器高 24.5 口径 12.8 底径 7.0	平底。体部中位に最大径を持つ。体部縦ハケ目調整の後上半部斜位の磨き。口縁部内・外面横ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	体部に煤付着（二次燃成）北東部覆土中層
2	土師甕	口径 体部最大径 (30.6)	体下半部欠損。体部中位に最大径を持つ。口縁部内・外面横ナデ。体内の器壁面のあれが著しい。	灰褐色	砂粒 雲母	粗雑	北西部床面
3	土師小型甕	口径(12.0)	口縁部破片。頸部は「く」の字状にくびれ、口縁部は外反する。口縁部内・外面横ハケ目調整。	黄褐色	砂粒	普通	煤付着 覆土
4	土師坩	口径(14.2)	口縁部破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に弱い綾を持つ。体部ヘラ削リ。	赤褐色	砂粒	普通	覆土

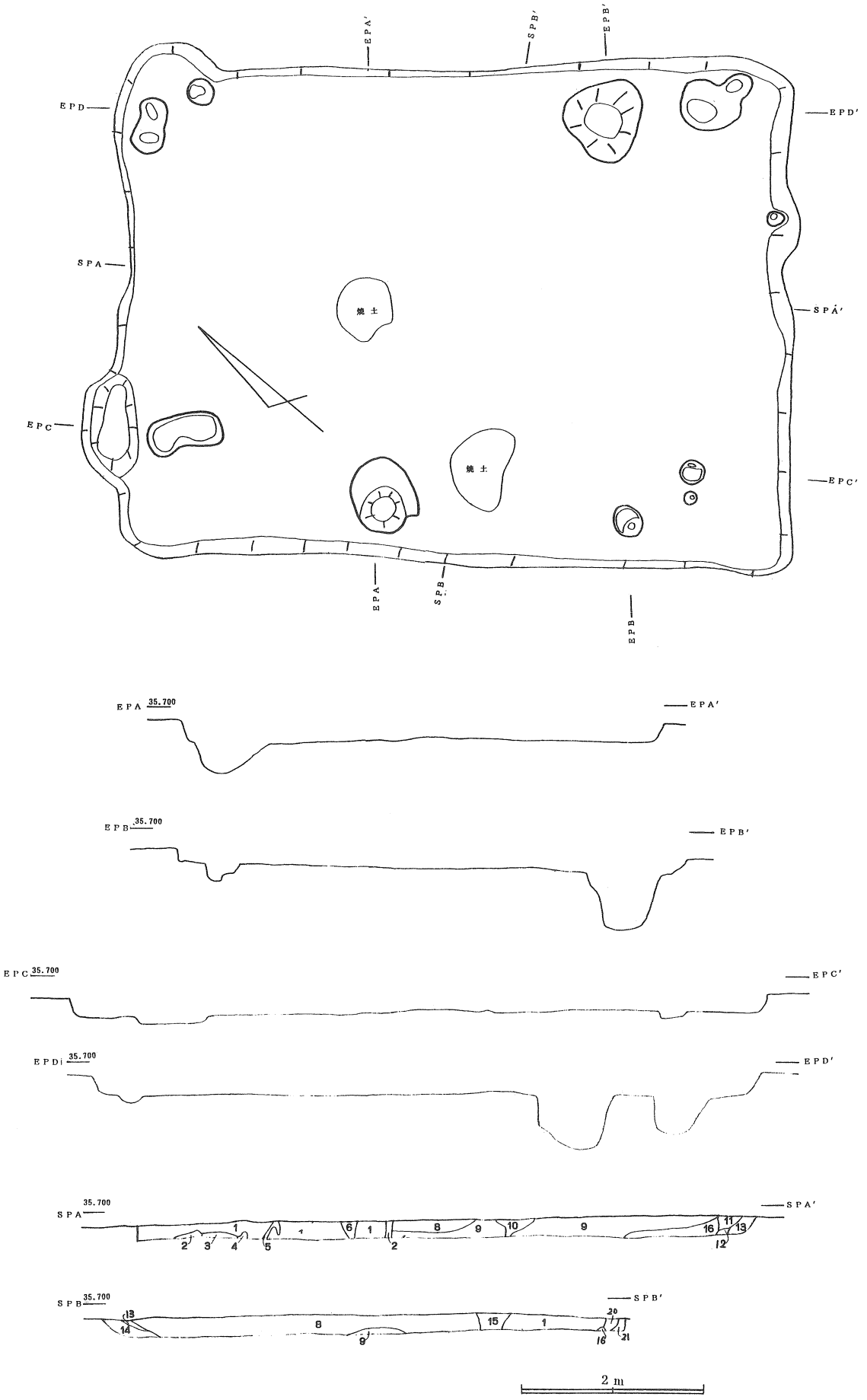
番号	器種	法量 (cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
5	敲石（すり石）	12.3	6.8	4.1	…	385.0	100	南東部床着	



第６図　第２号住居跡出土遺物実測図

（３）第３号住居跡（第７・８図）

形　態　やや長方形を呈する。**主軸方位**　N－43°－W。**規　模**　中軸線上南北7.30m、東西5.45mを測る。**柱　穴**　不明瞭。**壁　溝**　全周しており、幅0.08m～0.13m、深さ0.06m程度を計測。**床　面**　全体的にしっかりした貼り床である。西壁の中央寄りに焼土の堆積が認められ、その東側に接して床面に円形状の窪みがあり、よく焼けていることから炉跡とみられる。**貯蔵穴**　東南部コーナーに近く位置し、南北径0.85m、深さ0.55mを計測し、隅丸三角形状をなしている。**遺　物**　土師器　埦・甕・坏、土製品　土玉、石製品　砥石、滑石製品　有孔円板などが検出されている。


EPA'
SPB'
EPB'
EPD
EPD'
SPA
SPA'
焼土
焼土
EPC
EPC'
EPA
SPB
EPB
EPA 35.700
EPA'
EPB 35.700
EPB'
EPC 35.700
EPC'
EPDi 35.700
EPD'
SPA 35.700
SPA'
SPB 35.700
SPB'
2 m

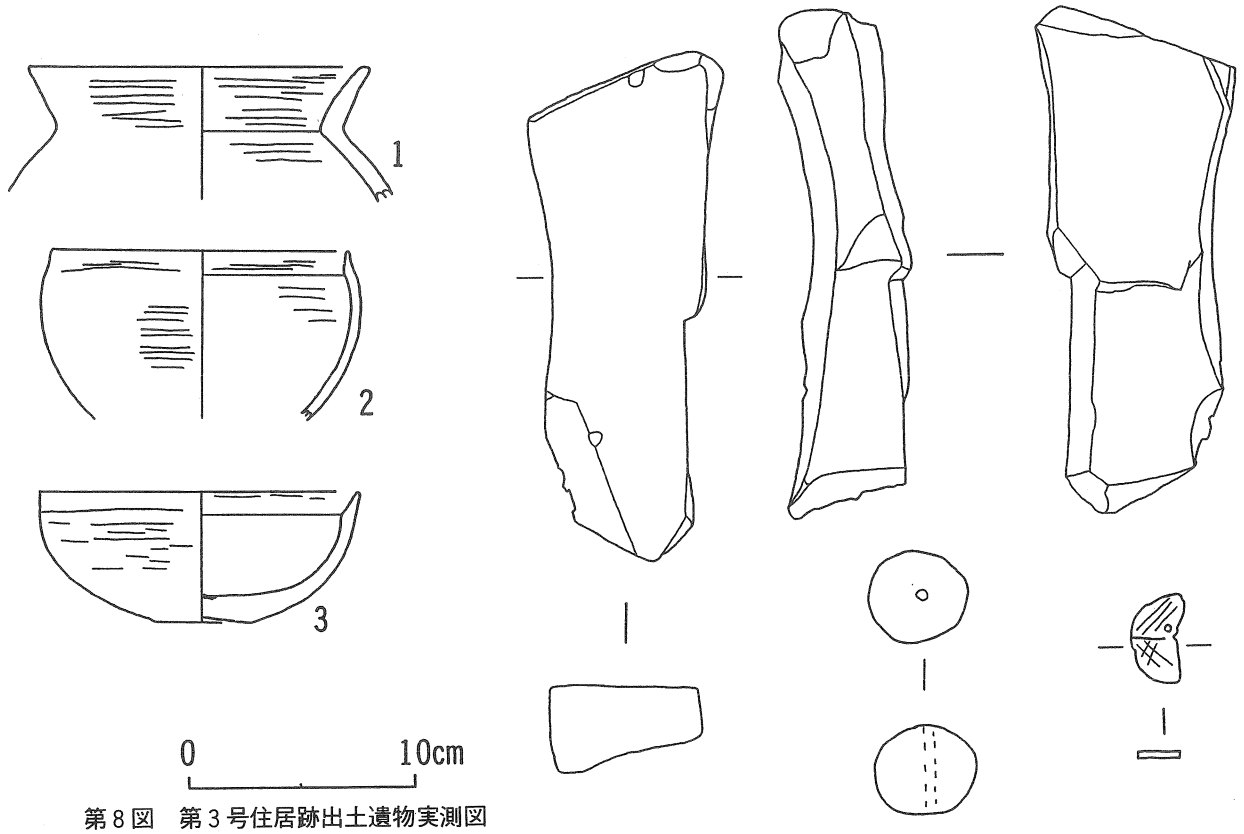
土層凡例
1 黒褐色（ローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
2 黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
3 暗褐色（ローム小ブロックを若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
4 黄褐色（ローム大ブロックのみ。しまりは非常に良い。）
5 黄褐色（ローム粒を若干含み、ローム粒子も多く含む。しまりは普通。）
6 暗褐色（ローム粒を少量含み、焼土粒も若干含む。しまりはやや柔らかい。）
7 黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
8 黒褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
9 暗褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
10黒褐色（ローム粒子を若干含み、炭粒も多く含む。しまりは普通。）
11黄褐色（ローム粒子の中に黒色粒子を若干含む。しまりは非常に良い。）
12明褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
13黄褐色（ローム粒子を非常に多く含み、炭粒子も若干含む。しまりは普通。）
14褐　色（黒色粒子を若干含み、しまりは普通。）
15黒　色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
16褐　色（黒色粒子を少量含み、しまりは普通。）
17暗褐色（ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
18黒　色（黒色粒・黒色粒子を多く含む。しまりは普通。）

第７図　第３号住居跡実測図

第３号住居跡出土遺物観察表

番号	品種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師甕	口径（15.0）	体下半部欠損。頸部は「く」の字状に外反する。口縁部内・外面ハケ目調整。	明褐色	砂粒	普通	南西部履土下層
2	土師椀	口径（13.2）	口縁部破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部内・外面横ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	南西壁際床面
3	土師坏	品高 6.3 口径 14.0 底径 4.1	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。体部内・外面横ナデ。底部の摩耗が著しい。	赤褐色	砂粒	普通	（二次焼成） 北東壁際履土下層

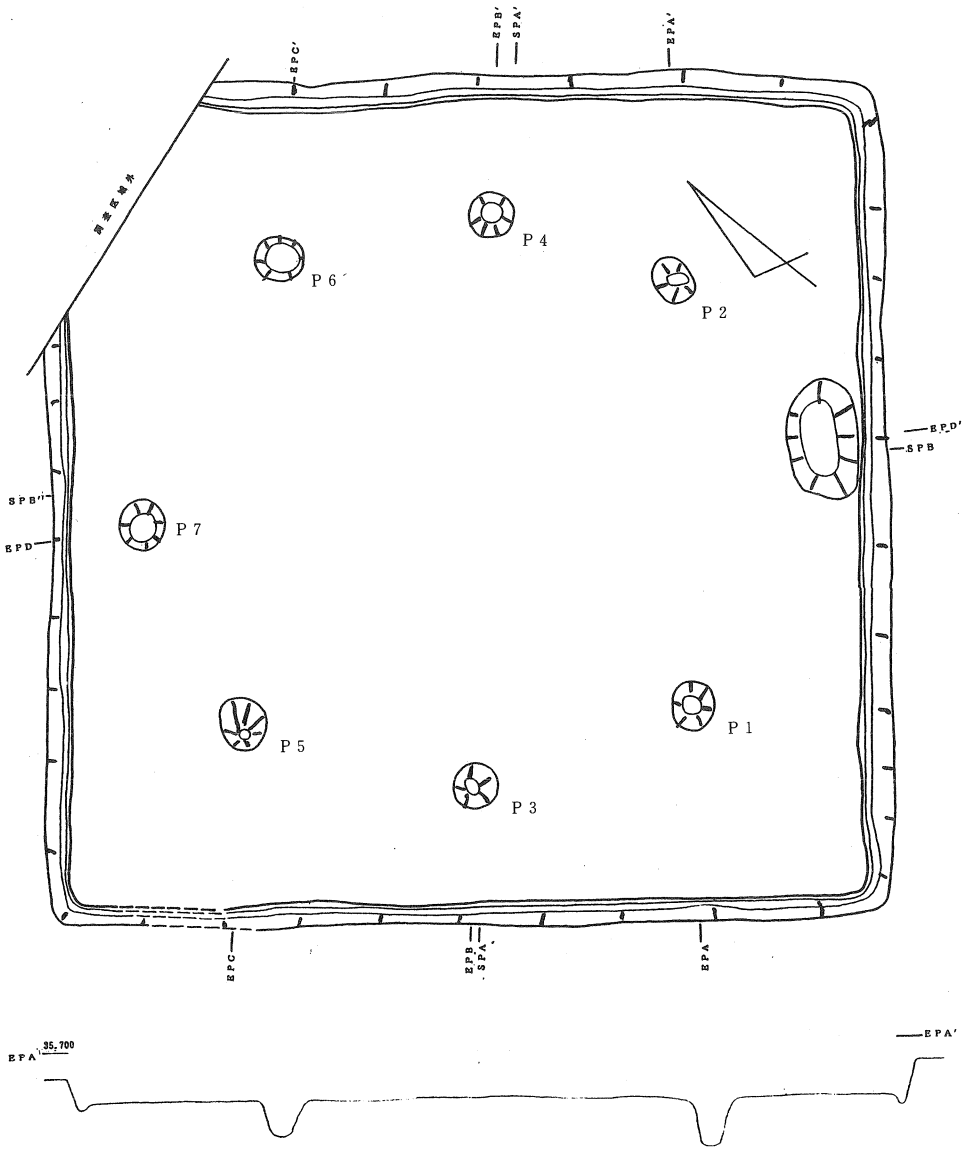
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
4	有孔円板	2.6	(1.4)	0.2	2.0	2.0	50	南西部床着	滑石
5	砥石	22.2	8.2	5.2	…	995.0	100	北東壁際覆土上層	4面最大限使用
6	土玉	2.8	3.1	…	4.0	0.2	100	南西壁際床着	

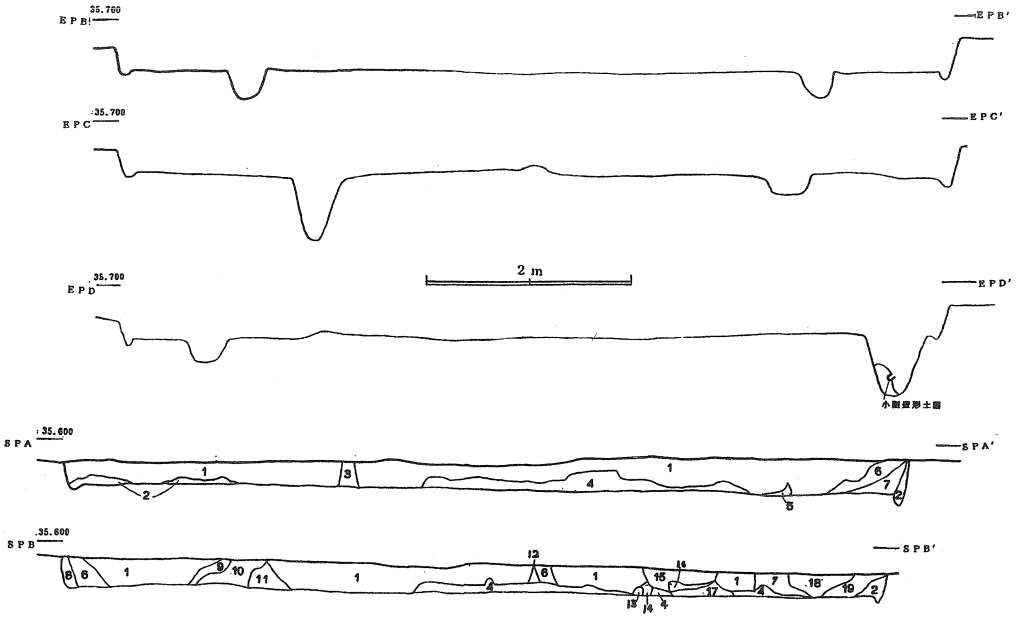


第８図　第３号住居跡出土遺物実測図

（4）第4号住居跡（第9・10図）

形　態　正方形に近い形状を呈する。**主軸方位**　N－39°－W。**規　模**　中軸線上東西8.20m、南北8.35mを測る。**柱　穴**　7か所を確認。P1とP6、P2とP5は対角線上に位置し、P3とP4は、その位置関係から棟持柱と推定される。P7は、P5とP6を結ぶ線上中央の北側で確認。P1東西径0.48m、南北径0.44m、深さ0.35m、P2東西径0.37m、南北径0.45m、深さ0.46m、P3東西径0.44m、南北0.43m、深さ0.30m、P4東西径0.44m、南北径0.44m、深さ0.26m、P5東西径0.46m、南北径0.47m、深さ0.62m、P6東西径0.46m、南北径0.46m、深さ0.17m、P7東西径0.48m、南北径0.46m、深さ0.22m程度を計測。**壁　溝**　全周しており、幅0.08m、深さ0.08mを測る。**床　面**　全体的に堅くしまる貼り床。中央部からやや北寄りに薄い焼土の堆積を認める。**貯蔵穴**　南壁に沿ってほぼ中央に楕円形に掘り込まれ、底部に置かれた白色粘土塊の下に小型壷（ミニチュア）を埋め込む。大きさは長軸1.46m、短軸0.69m、深さ0.60mを測る。**遺　物**　土師器　小型壷・坏・高坏・鉢、須恵器　破片数点、滑石製品　有孔円板・円板・剣形品・臼玉、石製品　すり石・砥石、土製品　土玉などが検出されている。**その他**　北東部コーナーの直上は公道（農道）が敷設されており、調査区域外に所在するために詳細は不明である。





土層凡例

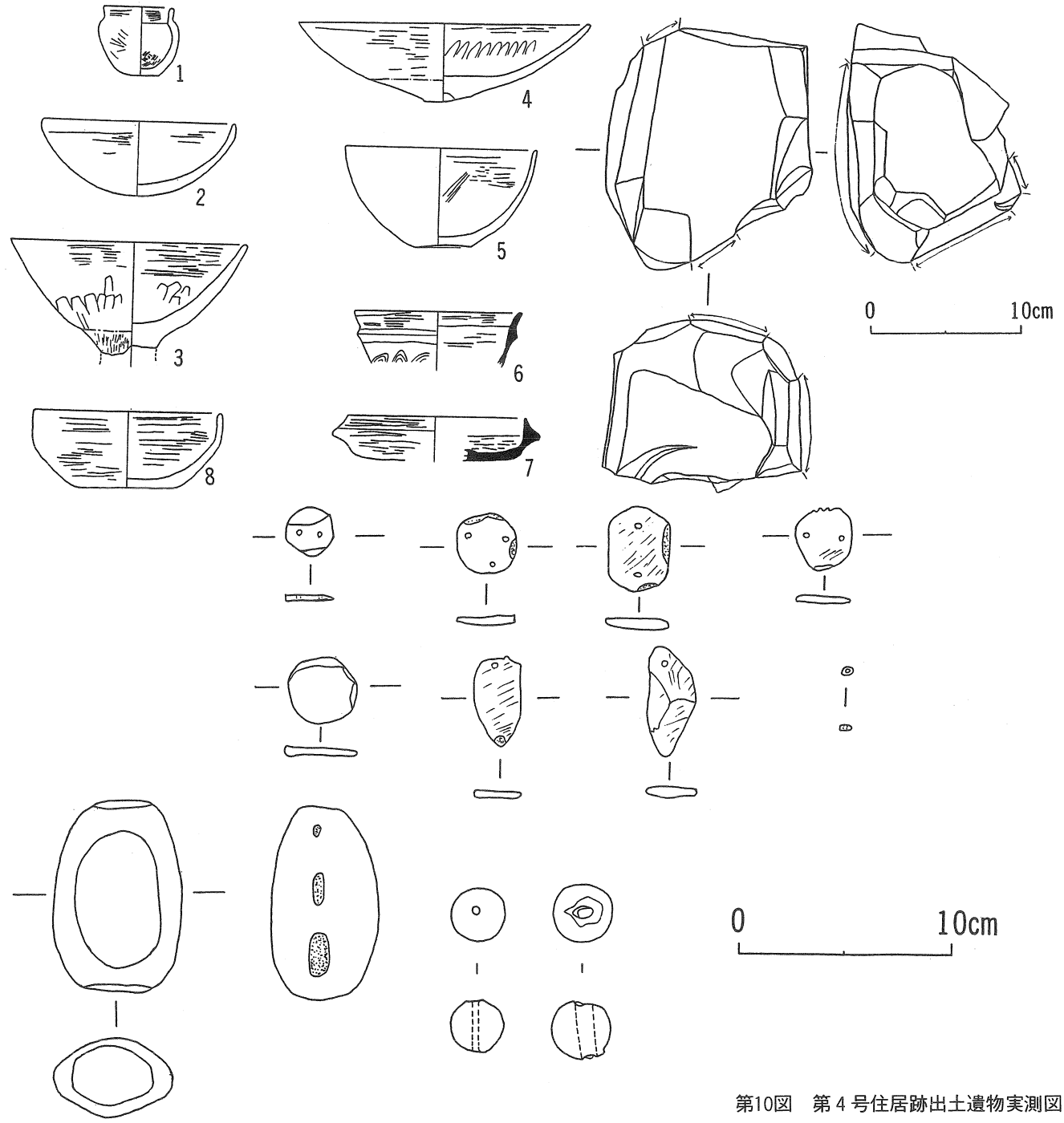
1 黒褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
2 暗褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
3 暗褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは良い。）
4 暗褐色（ローム粒・焼土粒子を若干含み、しまりは普通。）
5 明褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
6 黒褐色（焼土粒を少量含み、しまりは普通。）
7 黒褐色（ローム小ブロック・ローム粒を若干含み、しまりは普通。）
8 暗褐色（ローム粒・黒色粒子を若干含み、しまりは普通。）
9 暗褐色（ローム粒子を若干含み、黒色粒子も少量含む。しまりは普通。）
10暗褐色（ローム粒・黒色粒子・鹿沼土小粒を少量含む。しまりはやや柔らかい。）
11黒褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
12明褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
13黄褐色（ローム粒の中に黒色粒子を若干含む。しまりは普通。）
14黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
15黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。）
16暗褐色（ローム粒を少量含み、しまりはやや柔らかい。）
17明褐色（ローム粒を多く含み、黒色粒を少量含む。しまりは普通。）
18黒褐色（ローム小ブロックを若干含み、ローム粒も少量含む。しまりは普通。）
19黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）

第９図　第４号住居跡実測図

第４号住居出土跡遺物観察表

番号	品種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師 小型壷	器高（4.6） 口径（4.7） 底径（2.0）	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して開く。体部内・外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	ミニチュア 南東貯蔵穴内 覆土中層
2	土師 坏	器高（4.9） 口径（12.9）	丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。体内部・外面ヘラ削り。	渇色	砂粒	普通	覆土
3	土師 高坏	口径（15.9）	坏部破片。坏部は内彎気味に立ち上がる。坏部内・外面ハケ目調整。	暗褐色	砂粒	普通	北コーナー付近 床面
4	土師 高坏	口径（19.5）	坏部破片。坏部はゆるやかに開く。坏部内・外面ヘラ調整。	赤褐色	砂粒	良好	北東壁付近 床面
5	土師 鉢	器高（6.6） 口径（12.8） 底径（3.7）	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。体部外面ヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	普通	北コーナー付近 覆土下層
6	須恵 口辺部	口径（11.2）	口辺部片。口辺部は外傾して立ち上がり、中位に稜を持つ。口辺部内・外面横ナデ。	灰色	砂粒	良好	覆土
7	須恵 坏身	器高（2.9） 口径（11.7）	底部から口縁部にかけての破片。底部は内彎して立ち上がり、受部は水平に伸びて端部は尖る。底部外面ヘラ削り、内面ナデ。	灰白色	砂粒	普通	覆土
8	土師 坏	器高（5.0） 口径（12.5） 底径（6.6）	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外面ハケ。体部内・外面ヘラナデ。	淡褐色	砂粒	普通	体部内面の底部一帯にベニガラ付着 中央部床面

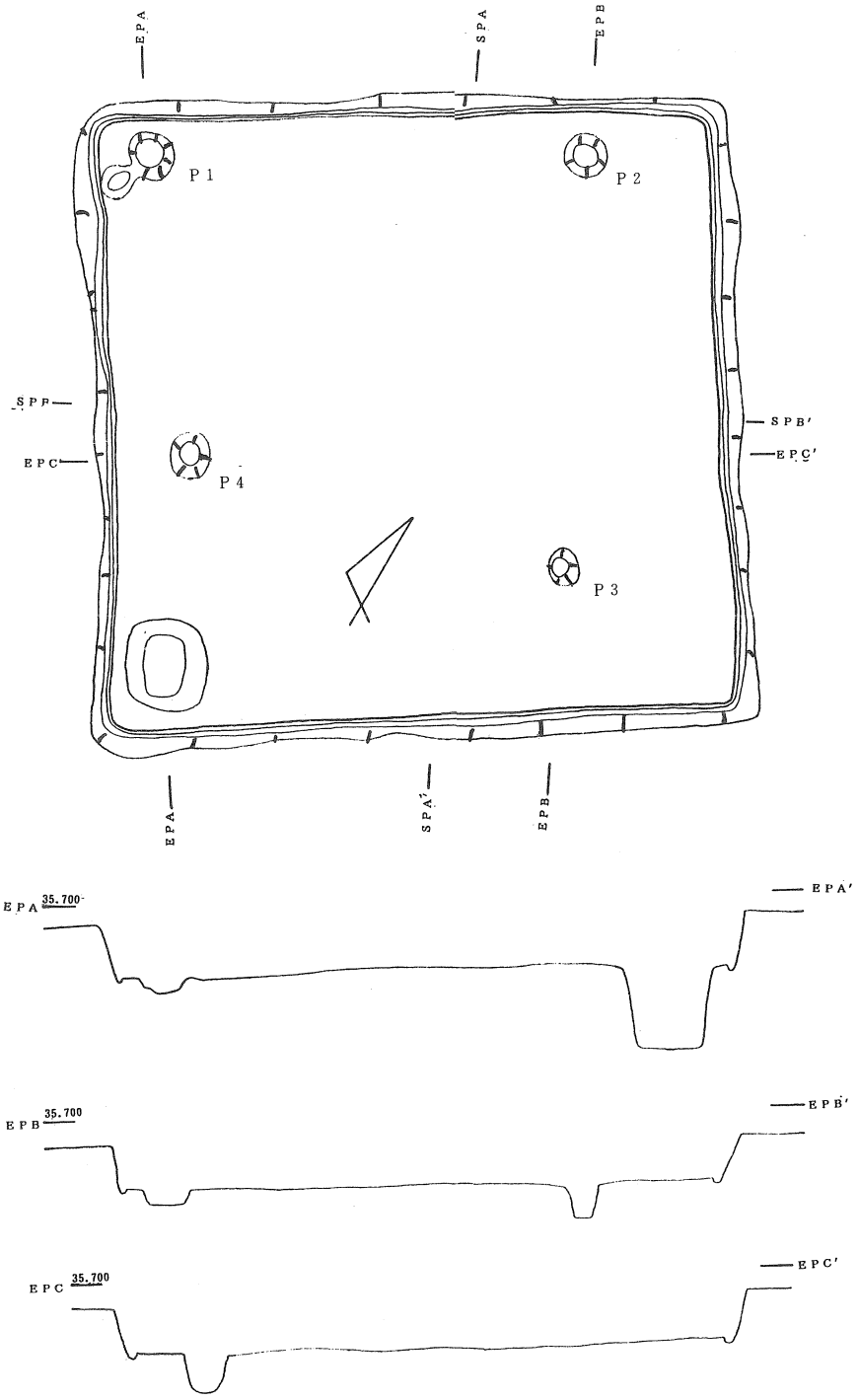
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
9	有孔円板	2.9	2.3	0.3	3.0	3.0	100	西コーナー付近覆土中層	滑石
10	有孔円板	2.8	2.8	0.4	2.0	6.0	100	南西部覆土下層	〃
11	有孔円板	3.9	2.9	0.5	2.0	12.0	100	中央部覆土下層	〃
12	有孔円板	2.9	2.6	0.4	1.5	4.0	100	覆土	〃
13	円板	3.1	3.4	0.4	…	7.0	100	南西部床着	〃
14	剣形品	4.3	2.3	0.3	2.0	6.0	100	北東部覆土下層	〃
15	剣形品	5.1	2.3	0.5	2.5	9.0	100	南東部覆土下層	〃
16	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	中央部床着	〃
17	すり石	9.0	5.8	3.8	…	406.0	100	南東壁際床着	
18	砥石	16.1	13.9	11.5	…	3000.0	100	南東貯蔵穴内覆土中層	砂岩 3面使用
19	土玉	2.4	2.5	…	0.4	13.8	100	中央部覆土下層	
20	土玉	2.7	2.8	…	0.8	14.0	100	中央部床着	

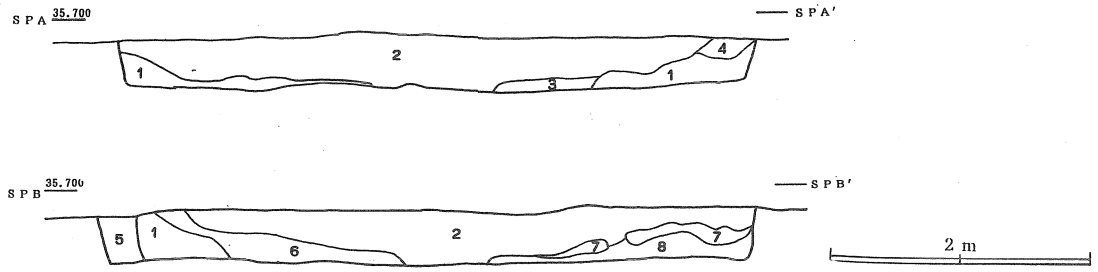


第10図　第4号住居跡出土遺物実測図

（5）第5号住居跡（第11・12図）

形　態　ほぼ正方形を呈する。**主軸方位**　N－34°－W。**規　模**　中軸線上東西5.00m。南北5.00mを測る。**柱　穴**　P1～4の4本が相当するが、P4はかなりP1に寄っており、変則な配列である。P1東西径0.37m、南北径0.36m、深さ0.12m、P2東西径0.36m、南北径0.42m、深さ0.12m、P3東西径0.28m、南北径0.26m、深さ0.25m、P4東西径0.33m、南北径0.38m、深さ0.65mを計測。**壁　溝**　全周しており、幅0.08m、深さ0.06m程度を測る。**床　面**　全体的にしっかりした貼り床であるが、貯蔵穴の北側がとくに堅い。**貯蔵穴**　東南部コーナーに位置し、東西径0.75m、南北0.75m、深さ0.65mを計測し、隅丸形状をなしている。**遺　物**　土師器　小型壷・坩・坏・高坏・埦・甕、滑石製品　有孔円板・剣形品などが検出されている。





土層凡例

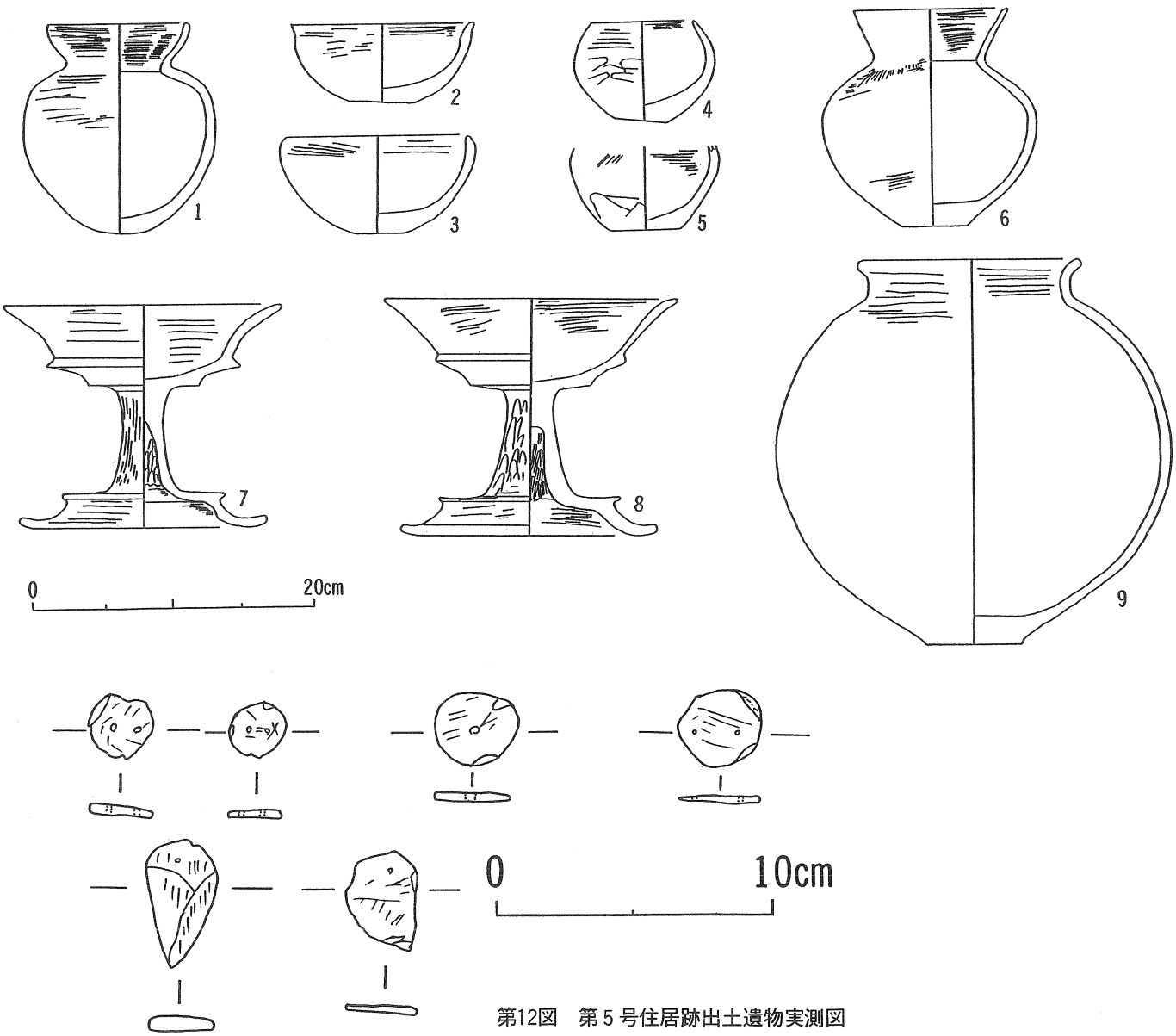
1暗褐色（黒色小ブロック・ローム粒を若干含み、ローム粒子も多く含む。しまりは普通。）
2黒褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
3暗褐色（ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
4明褐色（ローム粒を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
5暗褐色（ローム小ブロック・黒色小ブロックを若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
6黒褐色（ローム粒を少量含み、しまりは普通。）
7黄褐色（ローム小ブロックを非常に多く含み、黒色小ブロックも少量含む。しまりは良い。）
8暗褐色（ローム粒・焼土粒・黒色粒を若干含み、黒色粒子を多く含む。しまりは普通。）

第11図　第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	品種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坩	口径 10.0	底部及び口縁部の一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。胴部の最大径は肩部にある。口縁部内・外面横ハケ。胴部外面ヘラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	良好	（二次焼成）北西壁際床面
2	土師坏	器高 7.0 口径 13.0 底径 2.5	口縁部の一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、上位でややくびれる。口縁部との境に綾を持ち、口縁部は外傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り	灰褐色	砂粒 雲母	普通	南コーナー付近床面
3	土師椀	器高 7.0 口径 13.1 底径 3.7	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	赤褐色	砂粒	普通	北コーナー付近覆土下層
4	土師椀	器高 6.9 口径 7.4 底径 3.6	平底。体部は内彎して立ち上がり、口唇部に至る。体部内・外面ヘラ磨き。	黄褐色	砂粒 雲母	良好	北コーナー付近覆土下層
5	土師椀	底径 4.9	口縁部欠損。平底。体部はゆるく内彎して立ち上がる。体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	北西部表土下層
6	土師小型壷	器高 15.0 口径 11.0 底径 4.7	体部は内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はわずかに外反する。口縁部内・外面横ナデ胴部外面ヘラナデ。	明褐色	砂粒	良好	（二次焼成）南東部床面
7	土師高坏	器高 15.8 口径 20.0 底径 17.8	脚部はやや斜めに下がり、つけ根で段を整え、その下部が裾部となって開く。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。坏部の外面中位下に2条の綾を持つ。全体的にヘラ磨きの端整なつくりである。	褐色	砂粒	良好	西コーナー付近床面
8	土師高坏	器高 16.8 口径 21.1 底径 18.4	坏部口縁部の一部欠損。脚部はやや斜めに下がり、つけ根で段を整え、その下部が裾部となって開く。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。坏部外面中位下に2条の綾を持つ。全体的にヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	良好	西コーナー付近床面
9	土師甕	器高 26.9 口径 15.5 底径 7.1	平底。胴部は球形状を呈し、内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直して口唇部で外反する。胴部最大径は中位にある。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	（二次焼成）胴部外面に煤付着北東壁際床面

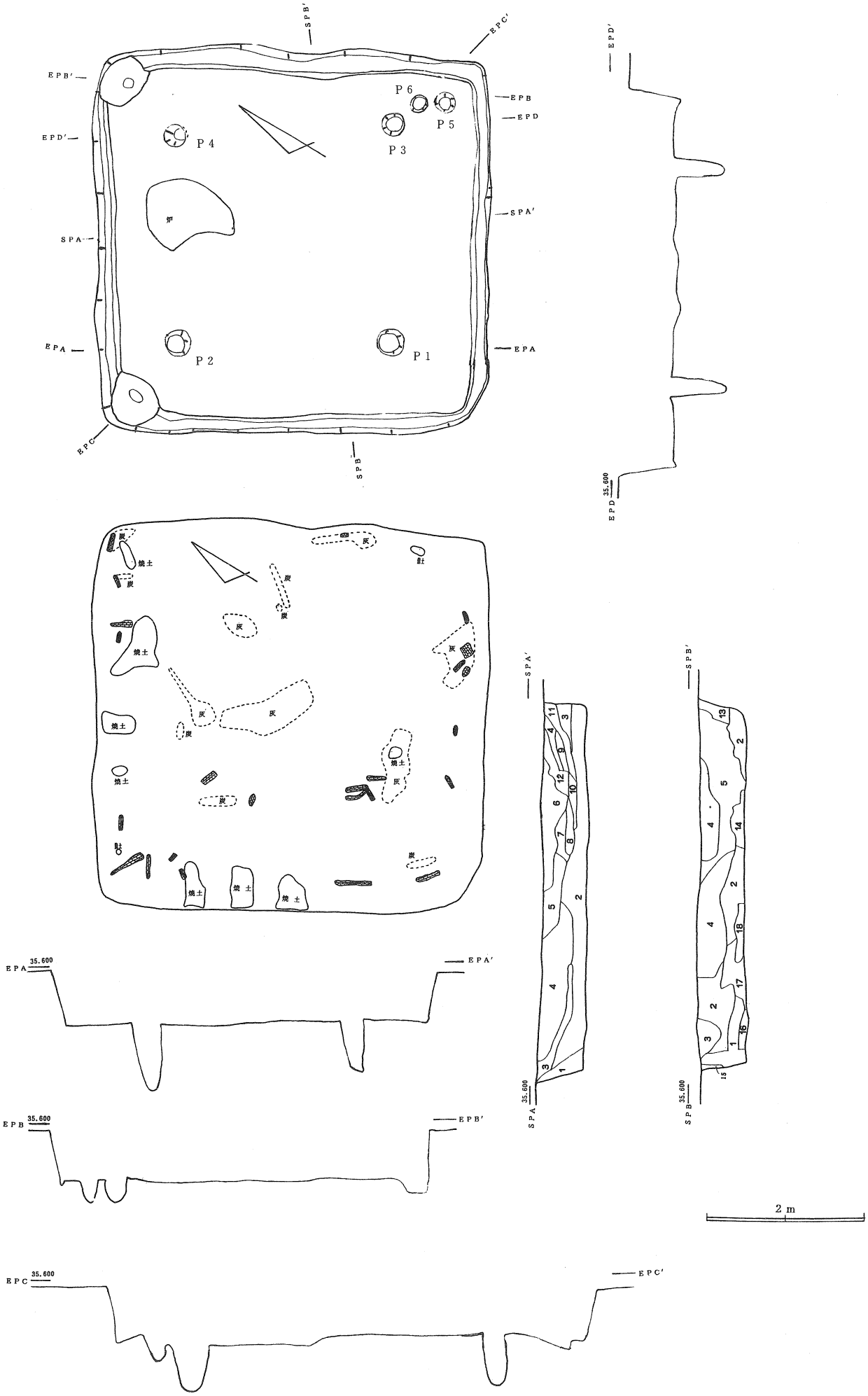
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	（mm）	（g）	（%）		
10	有孔円板	2.3	2.4	0.4	2.0	2.0	100	南ｺｰﾅｰ付近覆土下層	滑石
11	有孔円板	1.9	2.1	0.3	2.0	1.5	100	南西部覆土	〃
12	有孔円板	2.7	2.8	0.4	2.0	5.5	100	北東部覆土下層	〃
13	有孔円板	3.0	2.9	0.3	1.5	2.5	100	北西部覆土下層	〃
14	剣形品	4.2	2.1	0.6	2.5	8.0	100	南西部覆土	〃
15	剣形品	3.6	2.5	0.3	2.5	4.0	100	中央部覆土	〃



第12図　第５号住居跡出土遺物実測図

（６）第６号住居跡（第13・14図）

形　態　ほぼ正方形を呈する。**主軸方位**　N－33°－W。**規　模**　中軸線上東西4.90m、南北4.95m。**柱　穴**　対角線上の４本（Ｐ１～４）が主柱で、他に南東部コーナーに近く２本の柱穴（Ｐ５～６）が掘られているが、主柱よりも小規模である。Ｐ１東西径0.34m、南北径0.36m、深さ0.80m、Ｐ２東西径0.34m、南北径0.35m、深さ0.62m、Ｐ３東西径0.32m、南北径0.32m、深さ0.70m、Ｐ４東西径0.29m、南北径0.27m、深さ0.65m、Ｐ５東西径0.25m、南北径0.27m、深さ0.24m、Ｐ６東西径0.25m、南北径0.23m、深さ0.26mを測る。**壁　溝**　全周しており、幅0.10m、深さ0.05m程度で比較的浅い。**床　面**　全体的に堅くしまる貼り床。中央部から北壁に寄って楕円形状に焼土の堆積が観察され、床のほぼ全面に炭及び炭化材が認められる。**貯蔵穴**　無し。**遺　物**　土師器　壷・坏・埦・小型鉢、滑石製品　有孔円板・剣形品、石製品　砥石、土製品　土玉、鉄製品　刀子などが検出されている。**その他**　今回調査した住居跡のうち、床面までの掘り込み平均値が0.70mと最も深い遺構である。


SPB'
EPC'
EPB'
EPB
EPD
EPD'
P 6
P 5
P 4
P 3
SPA'
SPA
EPA
EPA
P 2
P 1
EPC
SPB
EPD'
EPD
35.600
炭
焼土
灰
炭
炭
灰
焼土
灰
灰
炭
焼土
焼土
焼土
炭
焼土
焼土
焼土
炭
SPA'
SPA
35.600
SPB'
SPB
35.600
EPA
35.600
EPA'
EPB
35.600
EPB'
2 m
EPC
35.600
EPC'

土層凡例

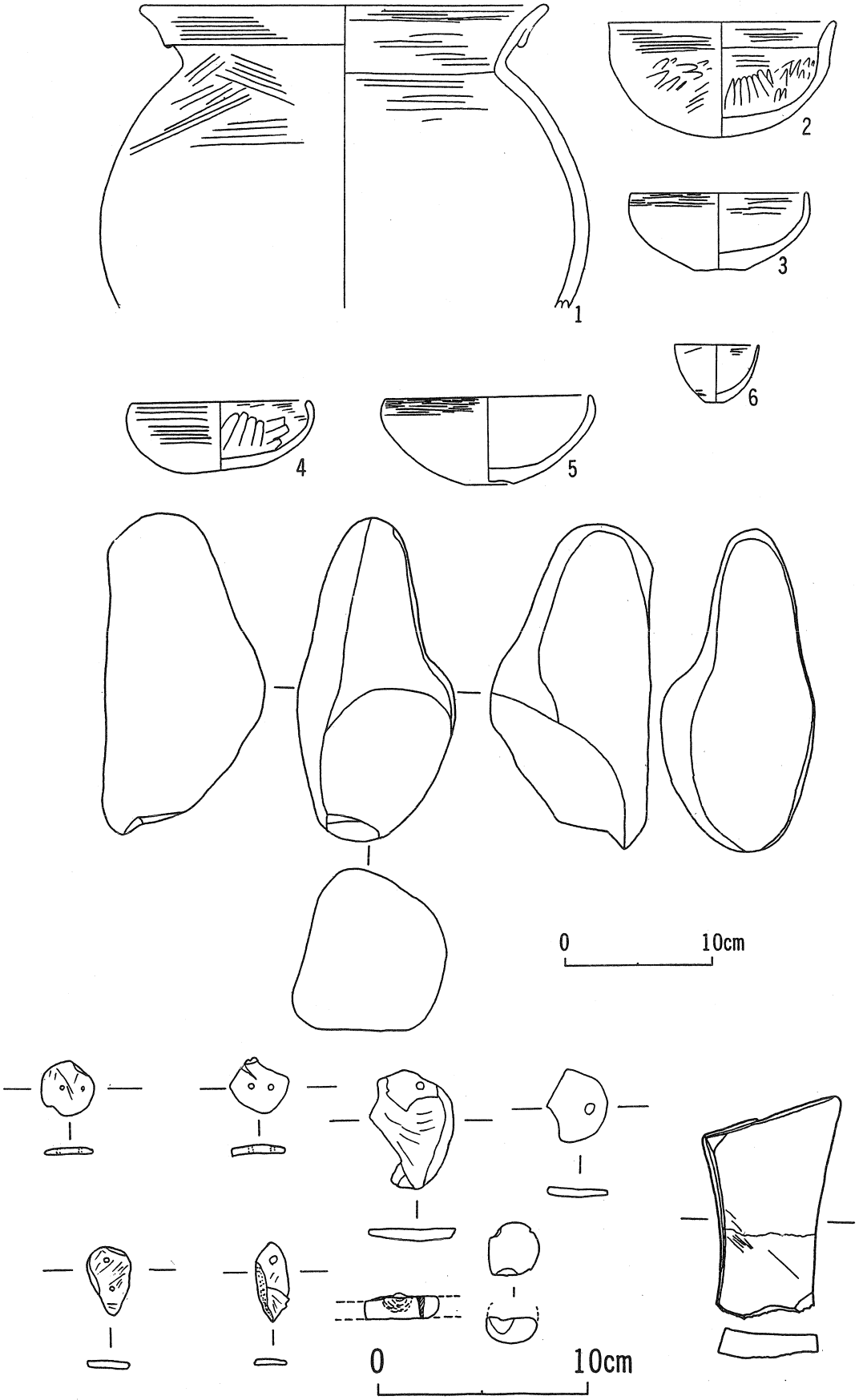
1 黒褐色（ローム粒・焼土粒を若干含み、炭粒・ローム粒・焼土粒子も少量含む。しまりはやや柔らかい。）
2 暗褐色（ローム粒・炭粒を少量、ローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
3 黒褐色（ローム粒をやや多く含み、しまりは普通。）
4 明褐色（ローム小ブロックを少量、ローム粒・ローム粒子を多く含み、炭小ブロック・炭粒・焼土粒も若干含む。しまりは普通。）
5 黒褐色（ローム中ブロック・焼土粒・炭小ブロックを若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
6 黄褐色（ローム中ブロックを多く、ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒子を若干含む。しまりは良い。）
7 暗褐色（ローム小ブロック・炭粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
8 暗褐色（ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。しまりは普通。）
9 黒褐色（ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
10 黒　色（ローム粒・焼土粒を若干、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
11 黒褐色（ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
12 暗褐色（ローム小ブロック・焼土粒・炭粒を若干、ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
13 暗褐色（ローム粒子を若干、ローム粒を少量含む。しまりは普通。）
14 暗褐色（黒色中ブロック・ローム粒を若干、ローム粒子を多く含む。しまりは良い。）
15 褐　色（ローム粒子を多く、黒色粒を少量含む。しまりは良い。）
16 暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
17 黒褐色（ローム粒子を若干含み、炭中小ブロックを多く含む。しまりは普通。）
18 黒褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）

第13図　第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師壺	口径 27.0	複合口縁で胴部下半欠損。口縁部は外反し、内・外面横ナデ。胴部内面はヘラナデ。器形はおおむね球形を呈する。	黄褐色	砂粒 雲母	普通	胴部中央の外面に煤付着、北コーナー付近床面
2	土師碗	器高 7.5 口径 15.2	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部内・外面は横ナデ。体部内・外面は横ナデ。内・外面とも赤彩。	赤褐色	砂粒	良好	覆土
3	土師碗	器高 5.0 口径(12.0) 底径	上げ底。底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部へラナデ。	褐色	砂粒	普通	中央部覆土下層
4	土師坏	器高 4.5 口径 11.9	平底。胴部及び口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。内・外面とも横ナデ。内面ナデ、赤彩。	赤褐色	砂粒	普通	覆土
5	土師坏	器高 5.8 口径 14.0 底径 3.2	上げ底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	明黄褐色	砂粒	普通	北コーナー付近床面
6	土師小型鉢	器高 3.8 口径 (4.7) 底径 1.2	平底。胴部から口縁部にかけて4分の3程欠損。体部は内彎して立ち上がり、内・外面とも雑なナデ。	灰褐色	砂粒	普通	覆土

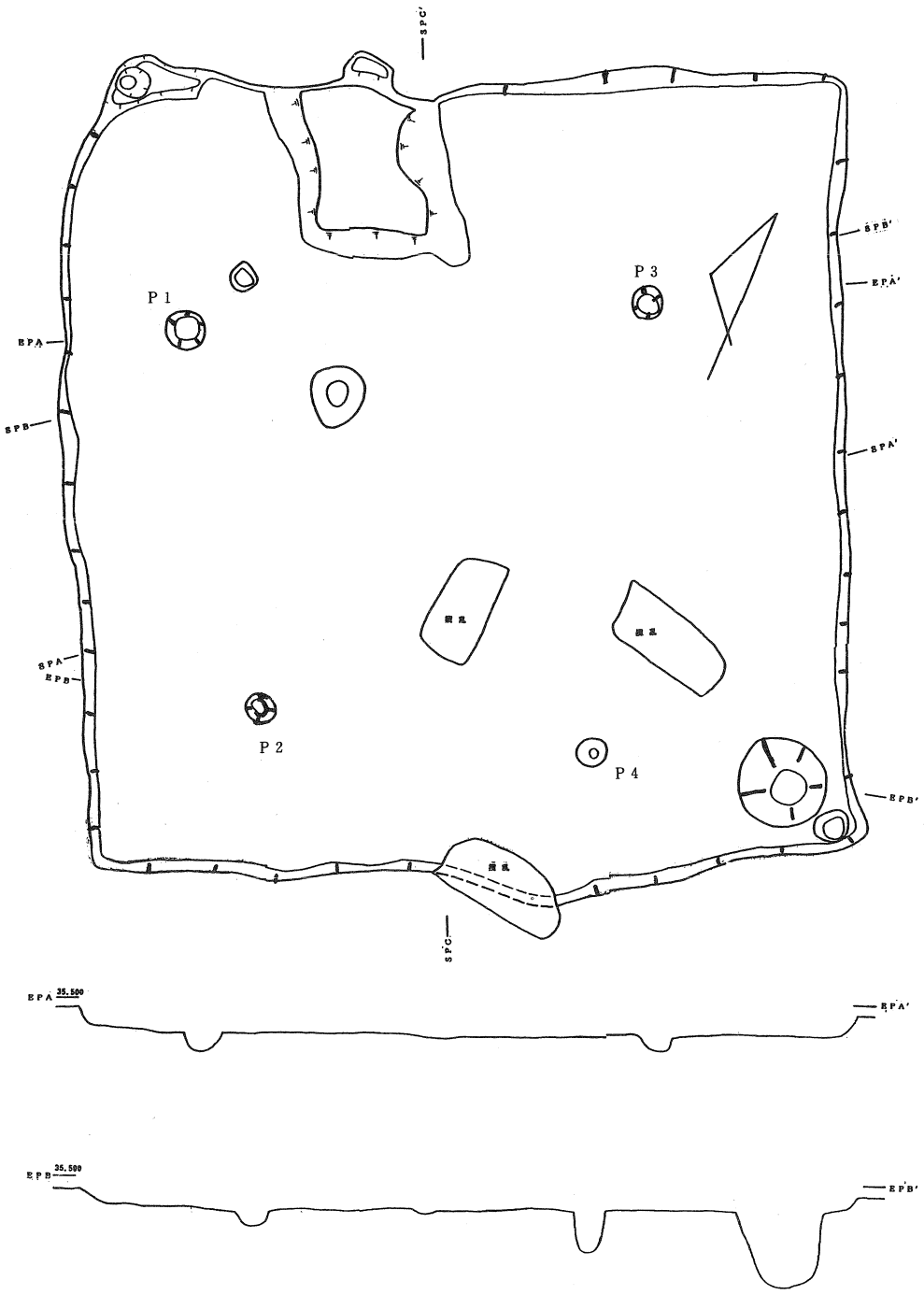
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
7	有孔円板	2.6	2.4	0.3	2.0	4.0	100	南東部覆土上層	滑石
8	有孔円板	2.5	2.3	0.4	2.0	6.0	100	北東部覆土上層	〃
9	有孔円板	5.4	4.1	0.6	3.5	15.0	80	北東部覆土中層	〃
10	有孔円板	3.5	3.0	0.4	3.5	3.0	60	〃	〃
11	剣形品	3.3	2.1	0.3	2.5	2.5	100	〃	〃
12	剣形品	3.8	1.5	0.4	2.0	1.5	95	南コーナー覆土中層	〃
13	砥石	10.6	6.3	1.7	…	109.5	…	覆土	4面使用
14	砥石	21.8	10.6	10.8	…	2650.0	100	北西部覆土下層	5面使用
15	土玉	2.5	2.5	…	…	3.5	40	南西部覆土中層	
16	刀子	3.5	1.1	0.3	…	2.0	…	南東部覆土中層	

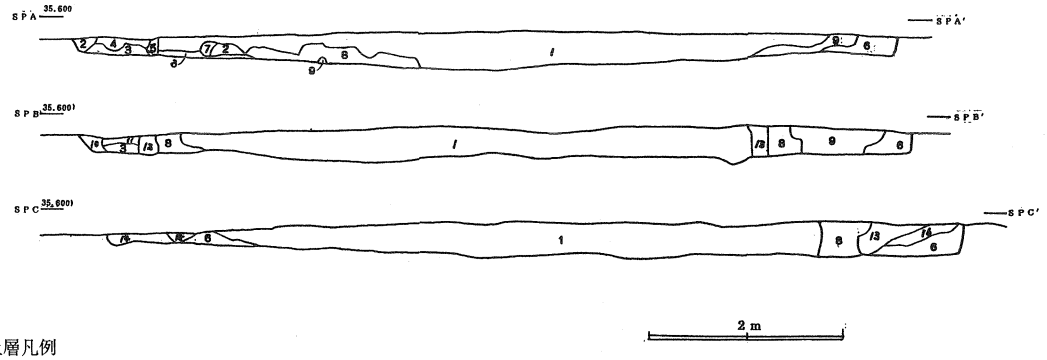


第14図　第６号住居跡出土遺物実測図

（7）**第７号住居跡**（第15・16図）

形　態　ほぼ正方形を呈する。**主軸方位**　N－26°－W。**規　模**　中軸線上東西8.36m、南北8.77mを測る。**柱　穴**　対角線上に４本掘り込まれている。Ｐ１東西径0.45m、南北径0.44m、深さ0.22m、Ｐ２東西径0.34m、南北径0.38m、深さ0.16m、Ｐ３東西径0.32m、南北径0.33m、深さ0.14m、Ｐ４東西径0.32m、南北径0.33m、深さ0.49mを計測。**壁　溝**　無し。**床　面**　貼り床であるが、凹凸が著しく、概して柔らかい。北壁中央からやや西寄りで壁頂から床面にかけて傾斜状の幅1.75m、長さ2.00m程の堅い盛土が遺存する。おそらく出入口として機能した屋内施設と推定される。**貯蔵穴**　東南部コーナーに位置し、ほぼ円形を呈する。東西径0.97m、南北径0.98m、深さ0.84mを測る。**遺　物**　土師器　坏・高坏・壷・甕、滑石製品　有孔円板・臼玉、石製品　すり石、土製品　土玉、鉄製品　鍬先などが検出されている。**その他**　今回調査した住居跡のなかで、平面積が最大規模（73.92㎡）の遺構である。





土層凡例

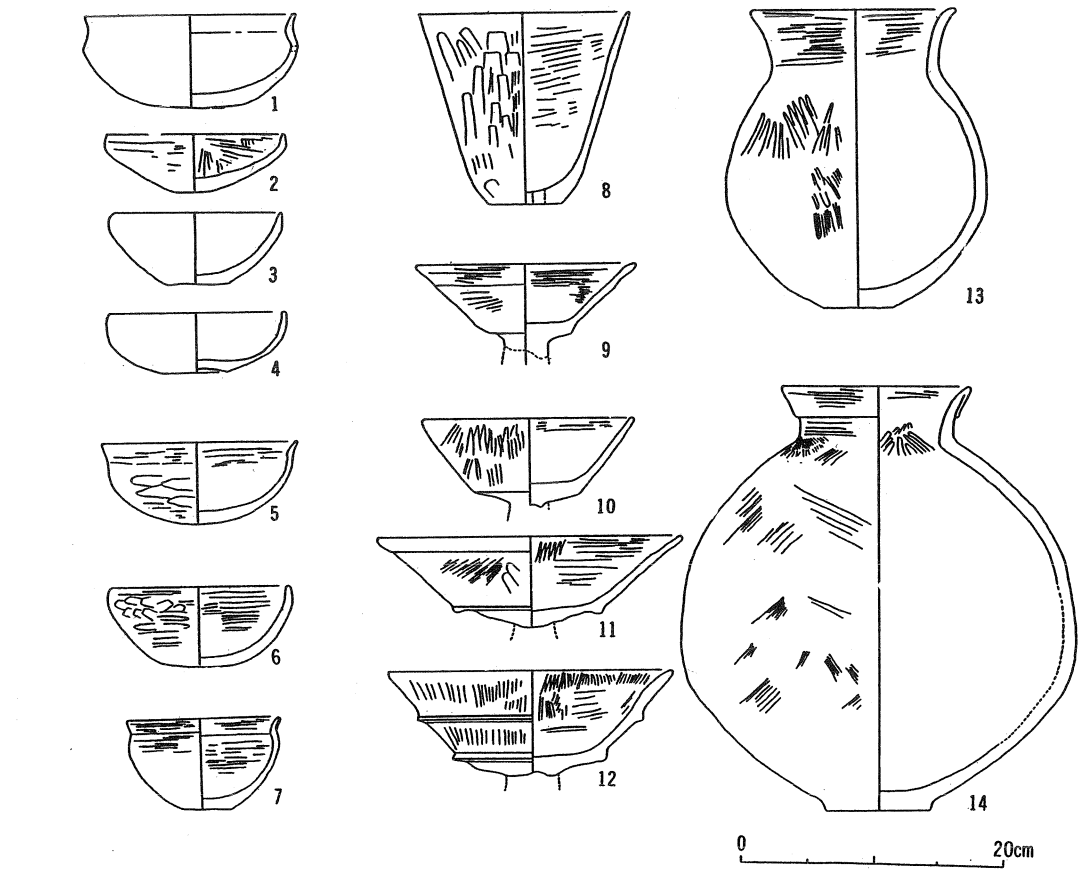
1黒　色（ローム粒・ローム粒子・焼土粒・炭粒を若干含む。しまりは普通。）
2黒褐色（ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
3明褐色（ローム中ブロックを若干、ローム粒・黒色粒を少量含む。しまりは普通。）
4暗褐色（ローム粒・炭粒を少量含む。しまりは普通。）
5黒　色（ローム粒を若干含み、しまりは普通。）
6明褐色（ローム粒を多く、黒色粒を少量含む。しまりは良い。）
7黄褐色（黒色粒子・炭粒を若干含む。しまりはやや柔らかい。）
8暗褐色（焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
9褐　色（黒色粒・ローム粒を多く含む。しまりはやや柔らかい。）
10暗褐色（炭粒子を若干、ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
11黒褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
12黒褐色（ローム粒を少量含み、しまりは普通。）
13暗褐色（焼土粒・炭粒を若干、ローム粒を少量含む。しまりは普通。）
14暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
15暗褐色（ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
16暗褐色（黒色粒・焼土粒を若干、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）

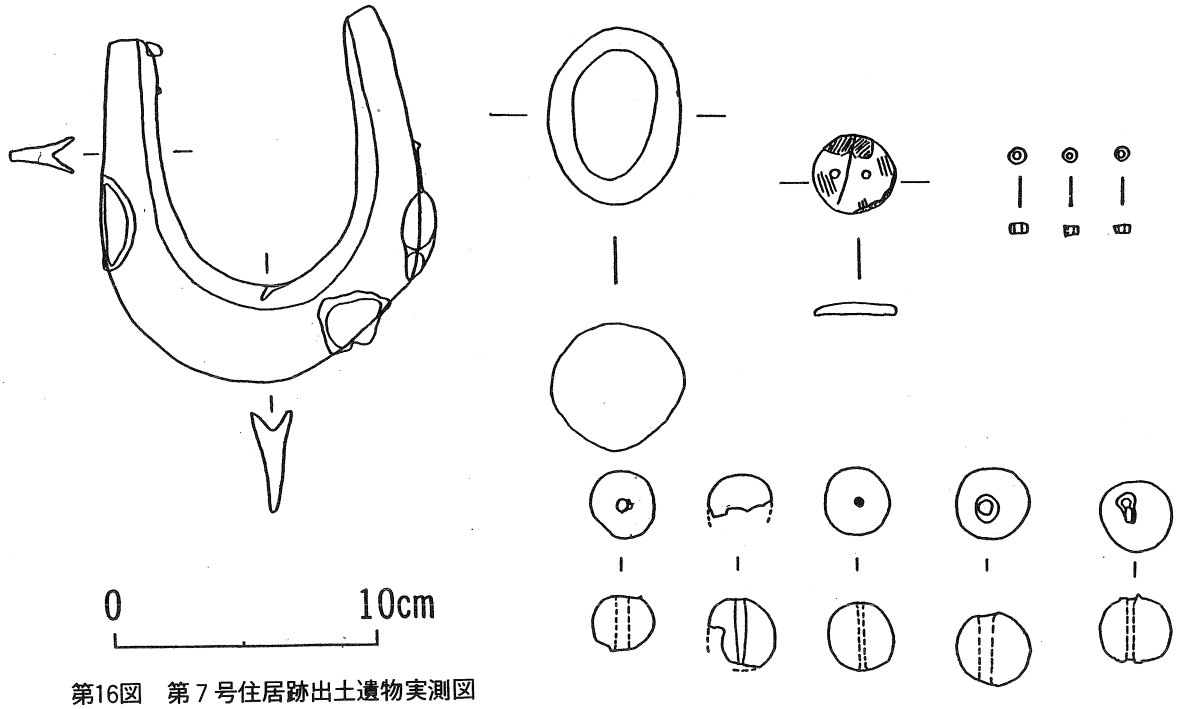
第15図　第7号住居跡実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 7.0 口径 16.0	丸底。体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ちあがり口縁部は外反する。口縁部内面に稜を持つ。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	内・外面に赤彩。体部上位に焼成前の穿孔あり。覆土
2	土師坏	器高 4.4 口径 (13.6) 底径 (2.5)	平底。口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	黄褐色	砂粒	普通	東コーナー付近壁際床面
3	土師坏	器高 5.4 口径 12.9 底径 4.4	平底。口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	東コーナー付近床面
4	土師坏	器高 4.4 口径 13.4 底径 4.7	上げ底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部ヘラ削り。全体的に粗雑な仕上げ。	黒褐色	砂粒	普通	東コーナー貯蔵穴内底部
5	土師坏	器高 5.3 口径 14.9	丸底。体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内ソギ状でやや外傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部内・外面ヘラ磨き。	明褐色	砂粒	良好	覆土
6	土師坏	器高 5.9 口径 13.8	丸底気味。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに内傾する。体部及び底部ヘラ削り、口縁部内・外面横ナデ。	灰褐色	砂粒	普通	南東部床面
7	土師塊	器高 6.8 口径 11.6 底径 3.5	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に沈線を持ち、内面には弱い稜を持つ。体部ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	南東部床面
8	土師塊	器高 14.5 口径 (16.1)	胴部中位から口縁部の一部欠損。平底の底部に単孔を穿ち、深鉢状を呈して立ち上がる。胴部外面縦方向にナデ内面はヘラ削り。	赤褐色	砂粒	普通	南東部床面
9	土師高坏	口径 16.6	坏部破片。坏部外面下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。坏部内・外面ヘラ磨き。	暗褐色	砂粒	普通	東コーナー付近壁際床面
10	土師高坏	口径 16.1	坏部破片。坏部外面下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。坏部内・外面ヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	普通	北西部床面
11	土師高坏	口径 23.1	坏部破片。坏部外面に稜を持ち、外傾して開く。坏部内・外面ヘラ磨き。	黄褐色	砂粒	普通	東コーナー付近床面
12	土師高坏	口径 21.5	坏部破片。坏部外面の中位と下位にそれぞれ稜を持つ。坏部内・外面ヘラ磨き。ていねいなつくりである。	黄褐色	砂粒	良好	東コーナー付近床面

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
13	土師甕	器高 22.6 口径 15.6 底径 5.0	平底。体部中位に最大径を持ち、頸部はゆるく外反する。口縁部内・外面ハケ目調整。体部内・外面ヘラナデ。	暗褐色	砂粒	普通	体部外面に煤付着。東コーナー壁際床面
14	土師壺	器高 32.0 口径 14.4 底径 8.0	平底。体部最大径を下位に持ち、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。複合口縁。口縁部内・外面及び体部外面の上位はハケ目調整。体部内面ヘラナデ。	灰褐色	砂粒	良好	体部中位下に煤付着。東コーナー壁際床面

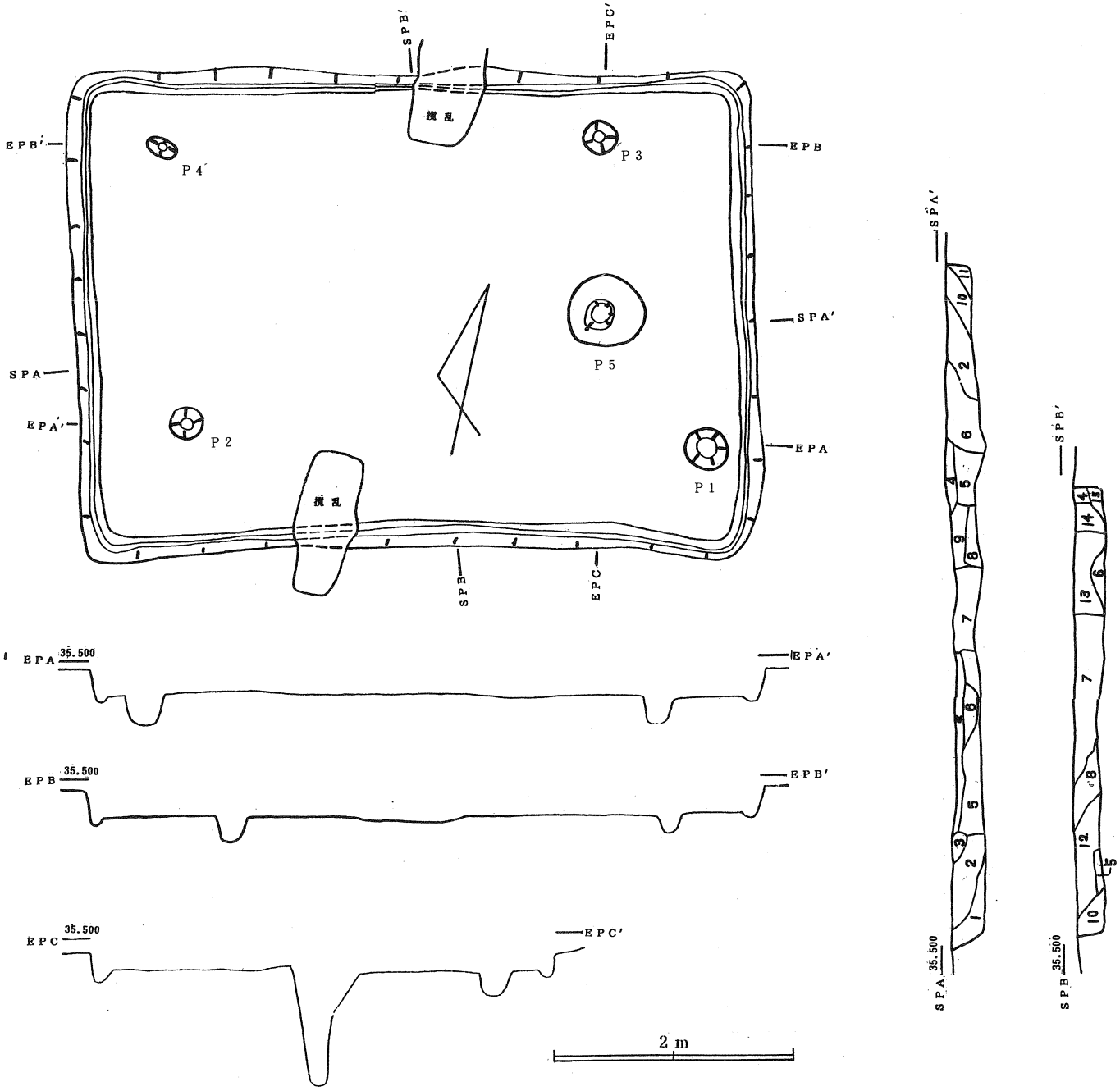




第16図　第７号住居跡出土遺物実測図

（8）第8号住居跡（第17・18図）

形　態　隅丸長方形状を呈する。**主軸方位**　N－106°－W（N－74°－E）。**規　模**　中軸線上東西5.55m、南北3.94mを測る。**柱　穴**　対角線上に4本（P1～4）と、P1の北西側にP5を確認している。P1東西径0.37m、南北径0.32m、深さ0.25m、P2東西径0.27m、南北径0.26m、深さ0.24m、P3東西径0.29m、南北径0.24m、深さ0.22m、P4東西径0.25m、南北径0.16m、深さ0.16m、P5東西径0.55m、南北径0.60m、深さ1.00mを計測する。**壁　溝**　全周しており、幅0.08m、深さ0.11程を測る。**床　面**　全体的に堅くしまる貼り床。**貯蔵穴**　無し。**遺　物**　土師器　坏・埦・壷・甕・甑・坩、滑石製品有孔円板・勾玉、石製品　砥石などが検出されている。



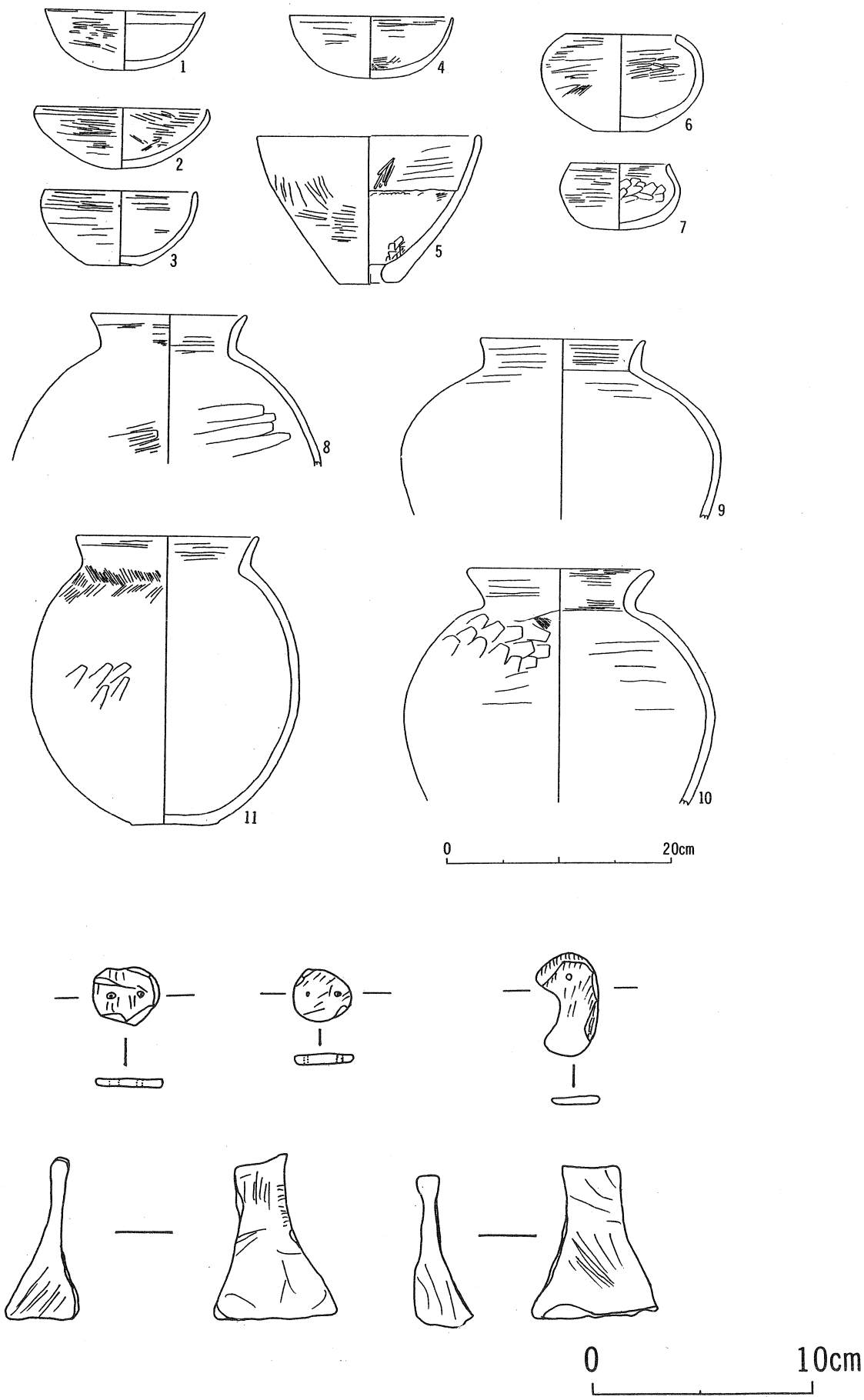
土層凡例
1黄褐色（ローム小ブロック・黒色小ブロックを少量含み、ローム粒とローム粒子を多く含む。しまりは普通。）
2黒褐色（黒色大中ブロックを若干、ローム小ブロック・黒色小ブロック・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
3暗褐色（ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
4暗褐色（焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
5明褐色（ローム中ブロック・黒色小ブロックを若干、ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
6暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒を若干含む。しまりは普通。）
7黒褐色（ローム小ブロックを若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
8黄褐色（ローム中ブロック・ローム粒を多く、ローム粒子を少量、黒色小ブロックを若干含む。しまりは良い。）
9明褐色（ローム小ブロック・焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
10黒　色（ローム中小ブロックを若干含む。しまりは普通。）
11暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
12暗褐色（炭粒・焼土粒子を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
13黄褐色（焼土粒を若干、ローム中小ブロック・ローム粒を多く含む。しまりは普通。）
14明褐色（焼土粒を若干、ローム中小ブロック・ローム粒を少量含む。しまりは普通。）
15暗褐色（焼土粒を若干、ローム粒を少量含む。しまりは普通。）

第17図　第8号住居跡実測図

第8号住居跡出遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 5.5 口径 14.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内ソギ状で外傾する。口縁部内・外面及び体部ナデ。	黄褐色	砂粒	良好	北西コーナー付近床面
2	土師坏	器高 5.4 口径 15.1 底径 3.2	上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外ツギ状でほぼ直立する。内・外面及び体部内・外面とも横ナデ。	赤褐色	砂粒 雲母	良好	北部床面
3	土師坏	器高 7.0 口径 13.8 底径	上げ底。器体の2分の1程欠損。体部は内彎して立ちあがり、端部にいたる。口縁部内・外面横ナデ体部外面ヘラナデ。底部はヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	
4	土師坏	器高 5.9 口径 14.9	丸底。口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	南西コーナー付近覆土下層
5	土師甑	器高 13.7 口径 20.2 底径 5.3	平底。底部中央に単孔を穿つ。器形は深鉢状に開き端部にいたる。内・外面ともヘラ削り。総じてつくりは粗雑である。	黄褐色	砂粒	普通	北部床面
6	土師坩	器高 4.9	口縁部欠損。上げ底気味。体部は内彎して立ち上がる。内・外面ともナデ。	黄褐色	砂粒	普通	体部外面煤付着北壁際床面
7	土師塊	器高 6.1 口径 9.0	丸底。口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がる。体部内・外面ヘラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	中央部床面
8	土師壷	口径 14.3	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁は外反する。口縁部にゆがみがあり、内・外面ハケ目。胴部内・外面ナデ。	黄褐色	砂粒 雲母	普通	（二次焼成）西部床面
9	土師壷	口径 14.9	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。口縁部はゆがみがあり、内・外面ハケ目。胴部・外面ナデ。	淡褐色	砂粒 雲母	普通	北部床面
10	土師壷	口径 16.4	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。胴部内・外面横ナデ。口縁部内・外面ハケ目。	黄褐色	砂粒	普通	北面コーナー付近床面
11	土師甕	器高 26.3 口径 16.4 底径 7.9	平底。胴部の張りはやや弱く、口縁部は外反する。体部及び肩部、口縁部内・外面はハケ目調整。体部外面下位はナデ。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	体部外面煤付着北部床面

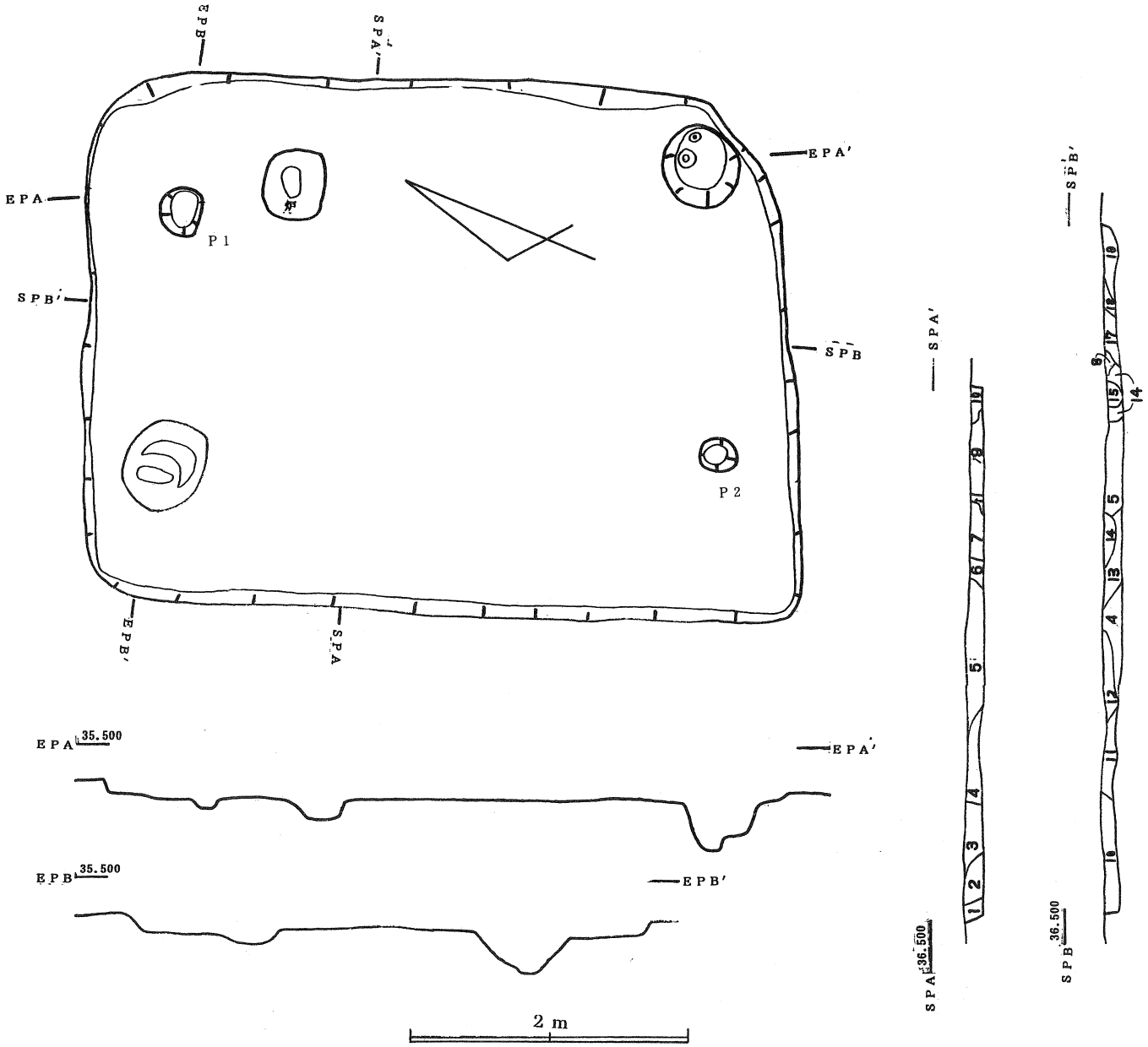
番号	品種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
12	有孔円板	3.1	2.6	0.4	3.0	6.0	100	南部覆土下層	滑石
13	有孔円板	2.4	2.7	0.5	1.5	6.5	100	中央部覆土中層	〃
14	勾玉	4.7	2.8	0.4	2.0	8.0	100	南部覆土中層	〃
15	砥石	7.1	6.1	3.4	…	106.0	…	西部床着	4面使用



第18図　第８号住居跡出土遺物実測図

（9）第9号住居跡（第19・20図）

形　態　やや隅丸長方形状を呈している。**主軸方位**　N－23°－W。**規　模**　中軸線上東西3.96m、南北5.22mを測る。**柱　穴**　P1とP2の2本を確認しているが、P2については、輪郭を捉えていても深さが不明瞭である。P1東西径0.30m、南北径0.35m、深さ0.07m、P2東西径0.27m、南北径0.29mを測る。**壁　溝**　無し。**床　面**　しっかりした貼り床であるが、凹凸が著しい。中央部の東北側に東西径0.52m、南北径0.39m、深さ0.17mを測る炉跡が確認されており、その周辺は堅く焼けている。**貯蔵穴**　2か所に所在する。東南部コーナーに位置する貯蔵穴は楕円形状を呈し、長軸0.60m、短軸0.45m、深さ0.36mを測り、西南部コーナーの東側に位置するのはほぼ円形を呈し、東西径0.57m、南北0.55m、深さ0.10mを測る。**遺　物**　土師器　坏・高坏・壷・小型壷・甕などが検出されている。



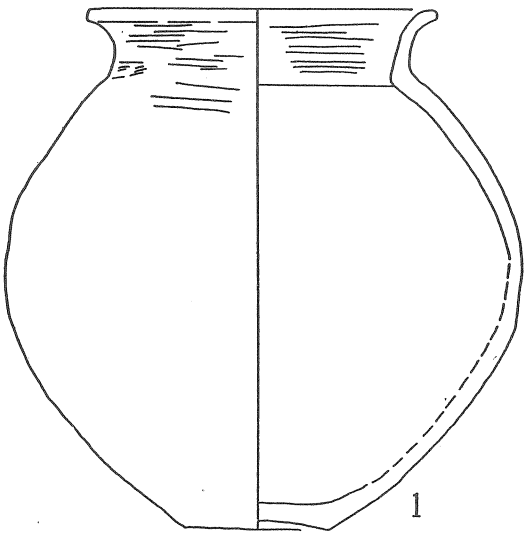
土層凡例

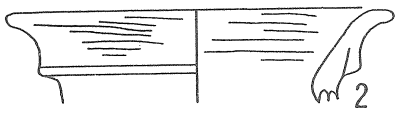
1暗褐色（ローム粒子をやや多く含む。しまりは普通。）
2暗褐色（黒色粒を若干、ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
3黒褐色（ローム小ブロック・ローム粒・炭粒を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
4暗褐色（ローム粒・炭小ブロックを若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
5黒褐色（ローム小ブロック・焼土粒を若干、ローム粒とローム粒子を少量含む。炭粒も多少含む。しまりは普通。）
6黒褐色（炭小ブロック・焼土粒・ローム粒・焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
7黒褐色（炭粒・ローム粒子・焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
8黒褐色（焼土小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を若干含む。しまりはやや良い。）
9黒褐色（ローム中ブロックを若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
10明褐色（ローム中ブロックを多く含み、黒色粒も若干含む。しまりは普通。）
11暗褐色（ローム粒・焼土粒・黒色粒を若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
12暗褐色（炭粒を若干含み、ローム粒・ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
13明褐色（ローム粒を若干、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
14明褐色（ローム粒・ローム粒子を多く含む。しまりは普通。）
15黒褐色（ローム粒子を若干、焼土粒を少量含む。しまりは普通。）
16明褐色（ローム粒子を多く含み、焼土中ブロック・焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
17黒褐色（炭小ブロック・炭粒を若干、ローム粒子・焼土粒子も少量含む。しまりは普通。）
18黄褐色（ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
19黄褐色（ローム粒子の中に焼土粒・黒色粒が若干含む。しまりは普通。）

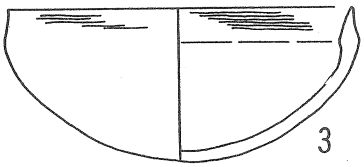
第19図　第９号住居跡実測図

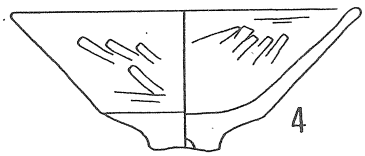
第９号住居跡出土遺物観察表

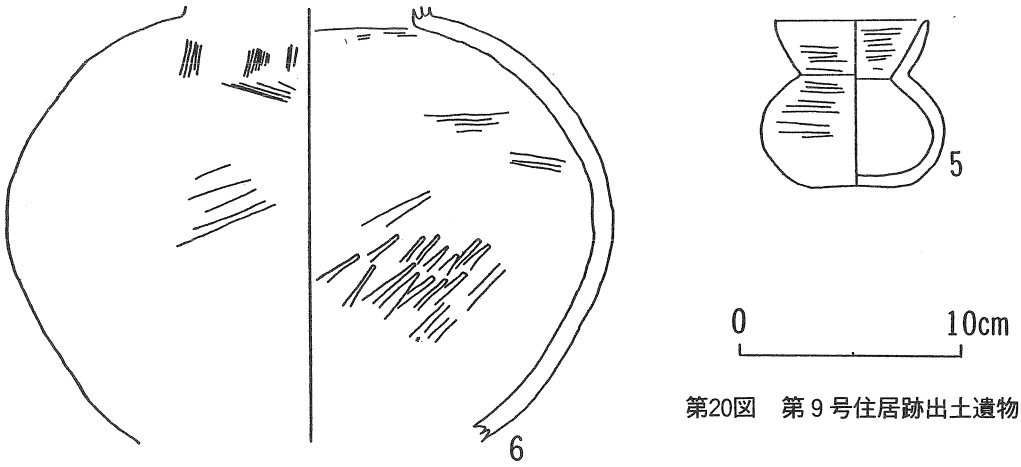
番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師甕	器高 23.4 口径 16.0 底径 6.5	平低。器形は球形状を呈し、体部中位に最大径を持つ。体部外面から口縁部の内面にかけてハケ目調整。体部内面ヘラナデ。	灰褐色	砂粒	普通	北西コーナー貯蔵穴内覆土中層
2	土師壺	口径 17.0	複合口縁で、口縁下部の体部は欠損。口縁は外反し、下位に突起状の稜を持つ。全体的に粗雑なつくりである。	暗褐色	砂粒 雲母	粗雑	口縁部外面全体に煤付着 中央部床面
3	土師坏	器高 6.9 口径 15.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外上方に開く。体部はヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	中央部覆土下層
4	土師高坏	口径 15.8	脚部欠損。坏部はゆるやかに開き、内・外面はヘラ磨き。	黄褐色	砂粒	普通	炉内底部
5	土師小型坩	器高 7.6 口径 7.0	平底。器形は球形に近く、口縁部は外傾して立ち上がる。体部及び口縁部の内・外面は、ともに磨きに近いていねいなナデ。	赤褐色	砂粒	良好	体部中位に煤付着。中央部床面
6	土師壺	胴部大径 (27.9)	胴部の破片。肩部はかなり丸みを持つことから、器形は球形に近い形態が考えられる。内・外面とも横ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	南東コーナー付近床面







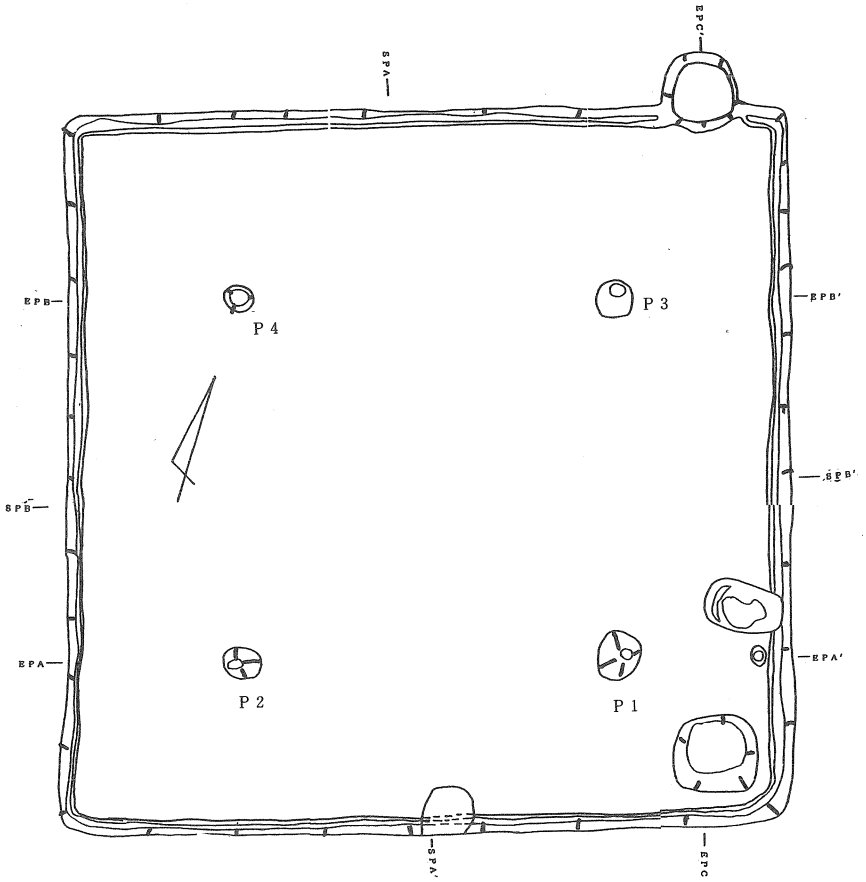


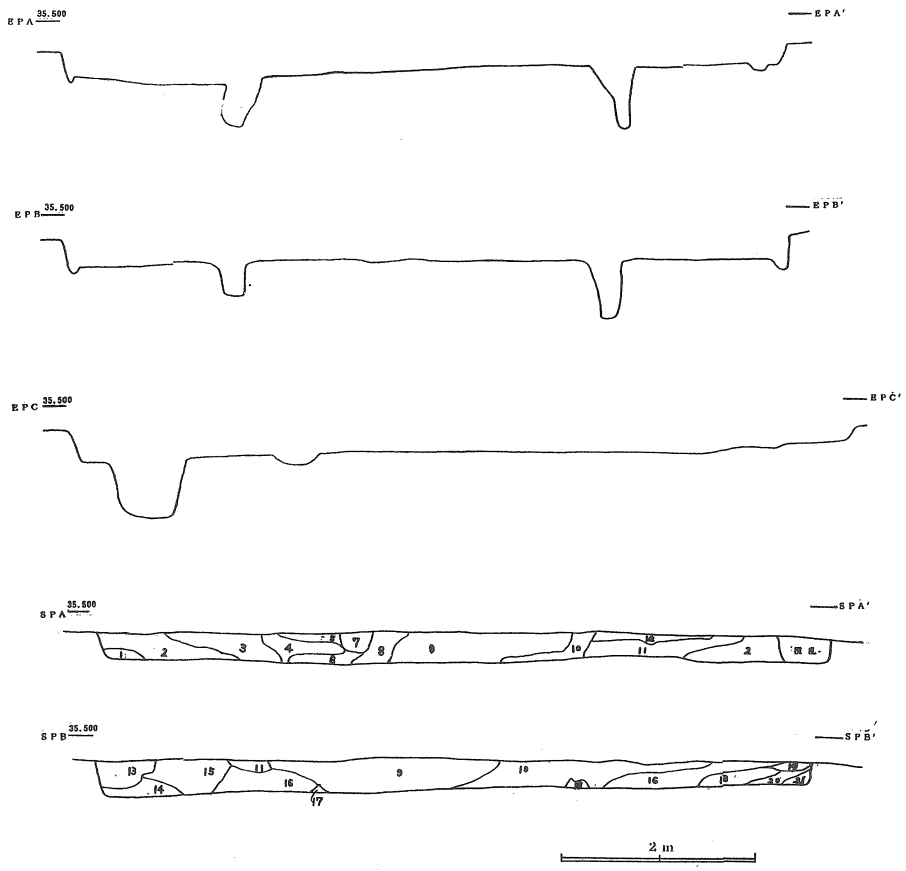


第20図　第９号住居跡出土遺物実測図

(10) **第10号住居跡**（第21・22図）

形　態　ほぼ正方形をなしている。**主軸方位**　N－20°－W。**規　模**　中軸線上東西7.55ｍ、南北7.52ｍを測る。**柱　穴**　対角線上の４本（Ｐ１～４）は、主柱として適正な配置といえる。Ｐ１東西径0.43m、南北径0.53m、深さ0.50m、Ｐ２東西径0.38m、南北径0.34m、深さ0.66m、Ｐ３東西径0.40m、南北径0.38m、深さ0.36m、Ｐ４東西径0.30m、南北径0.26mを測る。**壁　溝**　全周しており、幅0.15ｍ、深さ0.07ｍ程度を測る。**床　面**　全体的にしっかりした貼り床である。貯蔵穴北側に長軸0.80ｍ、短い軸0.52ｍ、深さ0.52ｍ程の切り込み状の遺構が位置するが、性格などは不明。**貯蔵穴**　東南部コーナーに位置し、東西径0.91ｍ、南北径0.85ｍ、深さ0.63ｍを計測する。**遺　物**　土師器　坏・高坏・壷、須恵器　破片、滑石製品　臼玉（35点）、有孔円板・剣形品、石製品　砥石、鉄製品　刀子などが検出されている。





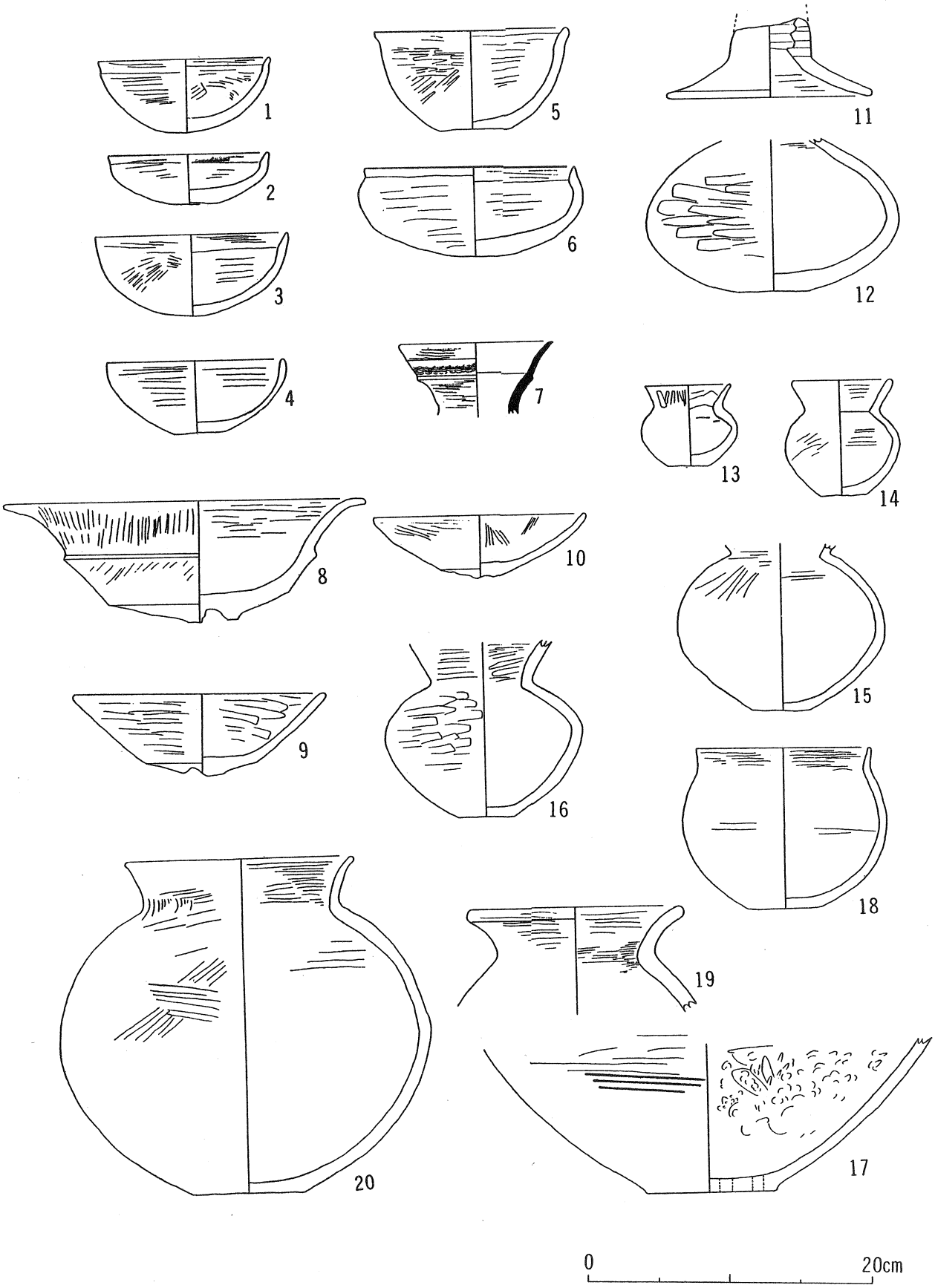
土層凡例
1 暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
2 暗褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
3 暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは良い。）
4 暗褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含み、炭小ブロックや焼土粒を若干含む。しまりは普通。）
5 黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
6 黒褐色（ローム粒と焼土粒子を若干含み、しまりは普通。）
7 暗褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、炭粒も若干含む。しまりは良い。）
8 暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは良い。）
9 暗褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含み、炭粒子も若干含む。しまりは普通。）
10暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは良い。）
11暗褐色（ローム粒子を少量含み、炭粒と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
12明褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。）
13黒褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
14暗褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
15暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒子と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
16黒褐色（ローム粒・ローム粒子・焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
17黄褐色（ローム粒とローム粒子を多く含む。しまりはやや柔らかい。）
18黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは良い。）
19黒　色（ローム粒を若干含み、しまりは普通。）
20黒褐色（ローム・ローム粒子・炭粒子を若干含み、しまりは普通。）
21暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）

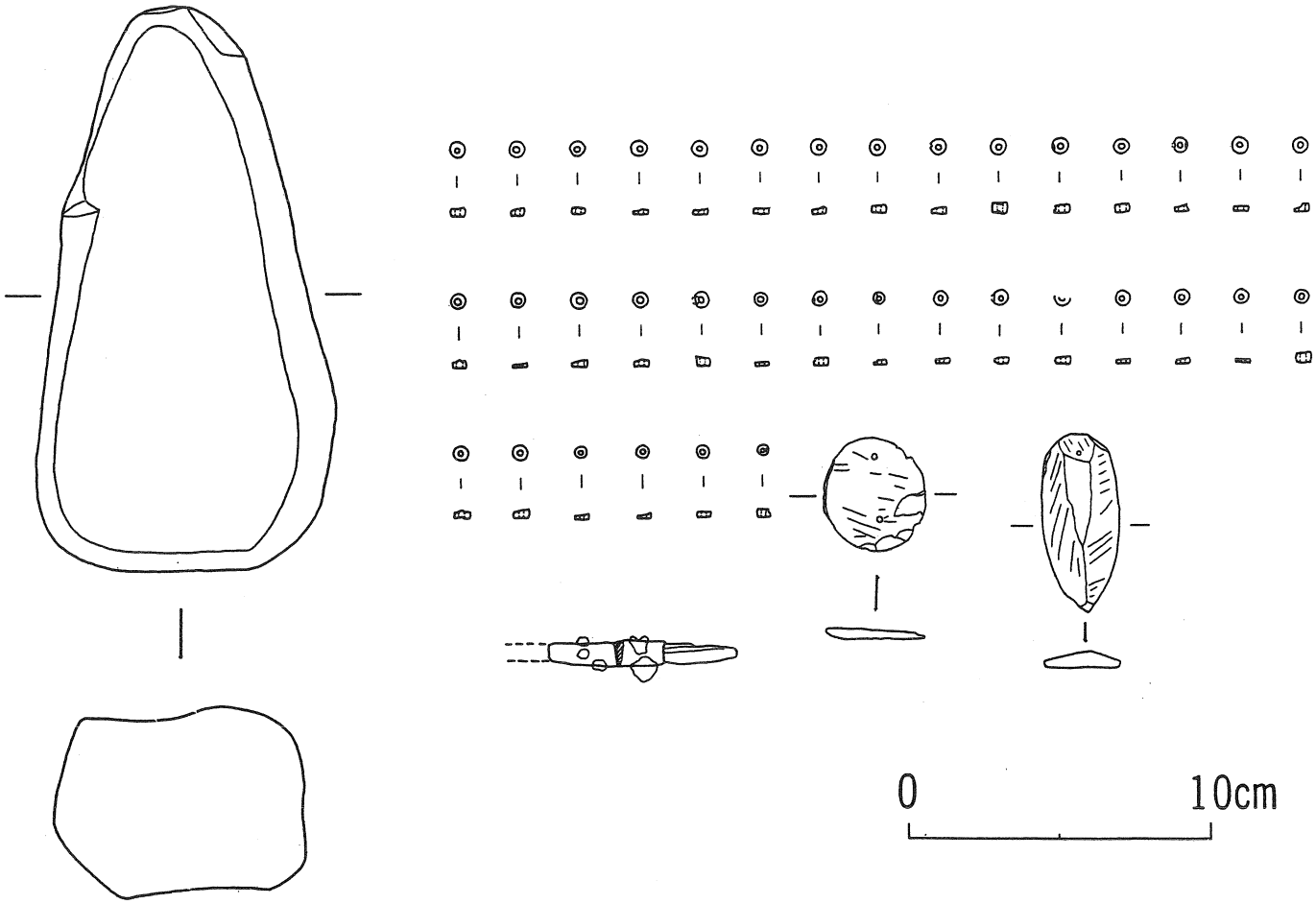
第21図　第10号住居跡実測図

第10号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 5.3 口径 12.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はゆるく外傾し、内・外面はヘラ磨き。	褐色	砂粒	良好	北コーナー壁際床面
2	土師坏	器高 3.9 口径 11.3 底径 3.3	上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	北西壁際床面
3	土師坏	器高 5.6 口径 13.7	丸底気味。口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、内面の口縁部との境に稜を持つ。体部下位ヘラ磨き上位はヘラ削り。口縁部内・外面ナデ。	淡褐色	砂粒 雲母	良好	体部上位から口縁部にかけて煤付着 北西壁際床面
4	土師坏	器高 5.5 口径 12.6 底径 3.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でゆるく内傾する。体部内面ヘラ磨き、外面はナデ。口縁部内・外面ヘラ磨き。	褐色	砂粒	良好	北西壁際床面
5	土師坏	器高 6.0 口径 13.5 底径 4.9	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でゆるく外反する。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	淡褐色	砂粒	普通	北西壁際床面
6	土師坏	器高 6.7 口径 14.9	丸底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部はほぼ直立する。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	内・外面に煤付着 中央部覆土下層
7	須恵口辺部	口径 10.7	口辺部破片。口辺部は外傾して立ち上がり、中位で強い稜をつくり、内彎して外上方に開く。稜の上位に8条の櫛描波状文を付す。内・外面横ナデ。	灰色	長石 小礫	良好	南コーナー付近 覆土下層
8	土師高坏	口径 (25.8)	大型高坏の坏部破片。坏部外面の中及び下位に稜を持つ。口縁部は大きく外に開く。坏部内面は横ナデ、外面ヘラ削り。	黒褐色	砂粒	普通	南コーナー付近 覆土下層
9	土師高坏	口径 18.0	坏部破片。坏部外面下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。内面横ナデ。外面ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	良好	(二次焼成) 体部外面に煤付着 北西壁際床面
10	土師高坏	口径 15.1	坏部破片。坏部外面下位に弱い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。内・外面ヘラ磨き。	淡褐色	砂粒	普通	覆土
11	土師高坏	口径(14.5)	脚部破片。脚部はラッパ状に開き、外面弱いヘラ磨き、内面ナデ。	淡褐色	砂粒	普通	中央部覆土中層
12	土師壺	底径 5.1	平底。口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径を持つ。内・外面横ナデ。総じてていねいなつくりである。	黄褐色	砂粒	良好	中央部覆土中層
13	土師小型壺	器高 6.0 口径 6.2 底径 2.9	平底。口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面横ナデ、外面ナデ。体部外面縦ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	ミニチュア 西コーナー付近床面
14	土師小型壺	器高 7.5 口径 6.8 底径 2.3	平底。体部から口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内・外面ハケ目。体部外面ナデ。	褐色	砂粒	普通	ミニチュア 覆土
15	土師壺	底径 4.0	平底。口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径を持つ。体部外面ヘラ磨き、下位横ナデ。	淡褐色	砂粒	普通	中央部覆土中層
16	土師壺	底径 3.9	平底。口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、器厚を増して口縁部にいたる。口縁部は外反する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部ヘラナデ。	赤褐色	砂粒 雲母	普通	北西壁付近床面
17	土師壺	底径 9.2	平底。低部から体部下位にかけての破片。低部に2か所の穿孔を施す。体部内面の器肌の荒れが著しい。外面ヘラ削りの後、ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	南北壁付近床面
18	土師甕	器高 11.5 口径 12.4 底径 4.8	平底。大部と口縁部の一部欠損。大部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。体部内・外面横ナデ。口縁部内・外面ハケ目。	灰褐色	砂粒	普通	体部外面下位に煤付着。北東壁付近覆土下層
19	土師甕	底径 15.0	口縁部後方。口縁部は「く」の字状に外反する。器内は厚い。体部内・外面横ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	北東壁付近覆土下層
20	土師甕	器高 23.8 口径 16.0 底径 8.0	平底。体部中位に最大径を持ち、口縁部は直立して外側に屈曲する。体部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。。	暗褐色	砂粒	普通	体部外面に煤付着。中央部床面

番号	品種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
21	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	北西壁際床着	滑石
22	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
23	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
24	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
25	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
26	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
27	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
28	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
29	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
30	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
31	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
32	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
33	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
34	臼玉	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
35	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
36	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
37	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	〃	〃
38	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
39	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
40	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
41	臼玉	0.4	0.4	0.1	2.0	0.1	100	南東部床着	〃
42	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
43	臼玉	0.4	0.4	0.1	1.5	0.1	100	〃	〃
44	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
45	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
46	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
47	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	〃	〃
48	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
49	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	〃	〃
50	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
51	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	北西壁際床着	〃
52	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	覆土	〃
53	臼玉	0.4	0.4	0.2	1.5	0.1	100	〃	〃
54	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
55	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
56	臼玉	0.4	0.4	0.3	1.5	0.1	100	覆土	滑石
57	有孔円板	3.7	3.4	0.4	2.0	7.0	100	北西部覆上下層	〃
58	剣形品	5.9	2.5	0.4	1.5	12.0	100	南西部床着	〃
59	砥石	18.8	9.8	6.7	…	1591.0	100	東コーナー壁際上下層	2面使用
60	刀子	6.1	0.9	0.3	…	2.0	…	北西壁付近覆土中層	

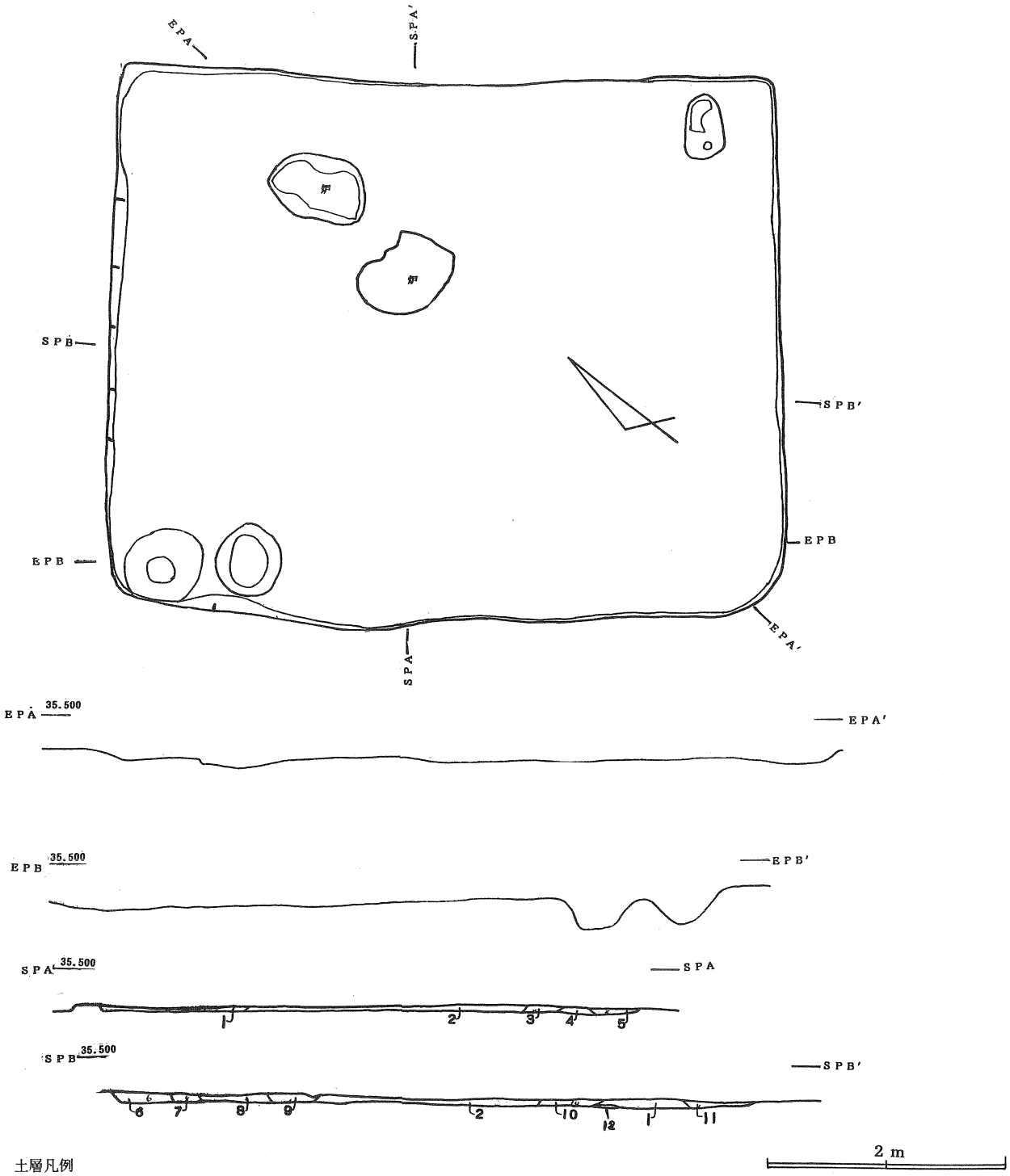

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
0
20cm



第22図　第10号住居跡出土遺物実測図

(11) **第11号住居跡**（第23・24図）

形　態　隅丸長方形状を呈する。**主軸方位**　N－37°－W。**規　模**　中軸線上東西5.56m、南北4.57mを測る。**柱　穴**　無し。**壁　溝**　壁は全体的に低く、溝は認められない。**床　面**　柔らかな貼り床で、凹凸が目立つ。東壁の中央から南壁の中央にかけては、壁高の観測が不可能であり、床面は地山と同一レベルとなる。中央部に炉跡が位置し、その周辺から多量の炭化材を検出する。**貯蔵穴**　北西部コーナー(1)と、その南側(2)とに接続の状態で掘り込められた2個の貯蔵穴が遺存する。大きさはほぼ同一で、形状は円形を呈する。1東西径0.57m、南北径0.56m深さ0.34m、2東西径0.57m、南北径0.64m、深さ0.30mを測る。**遺　物**　土師器　坏・高坏・甑、滑石製品　臼玉（11点）などが検出されている。



土層凡例

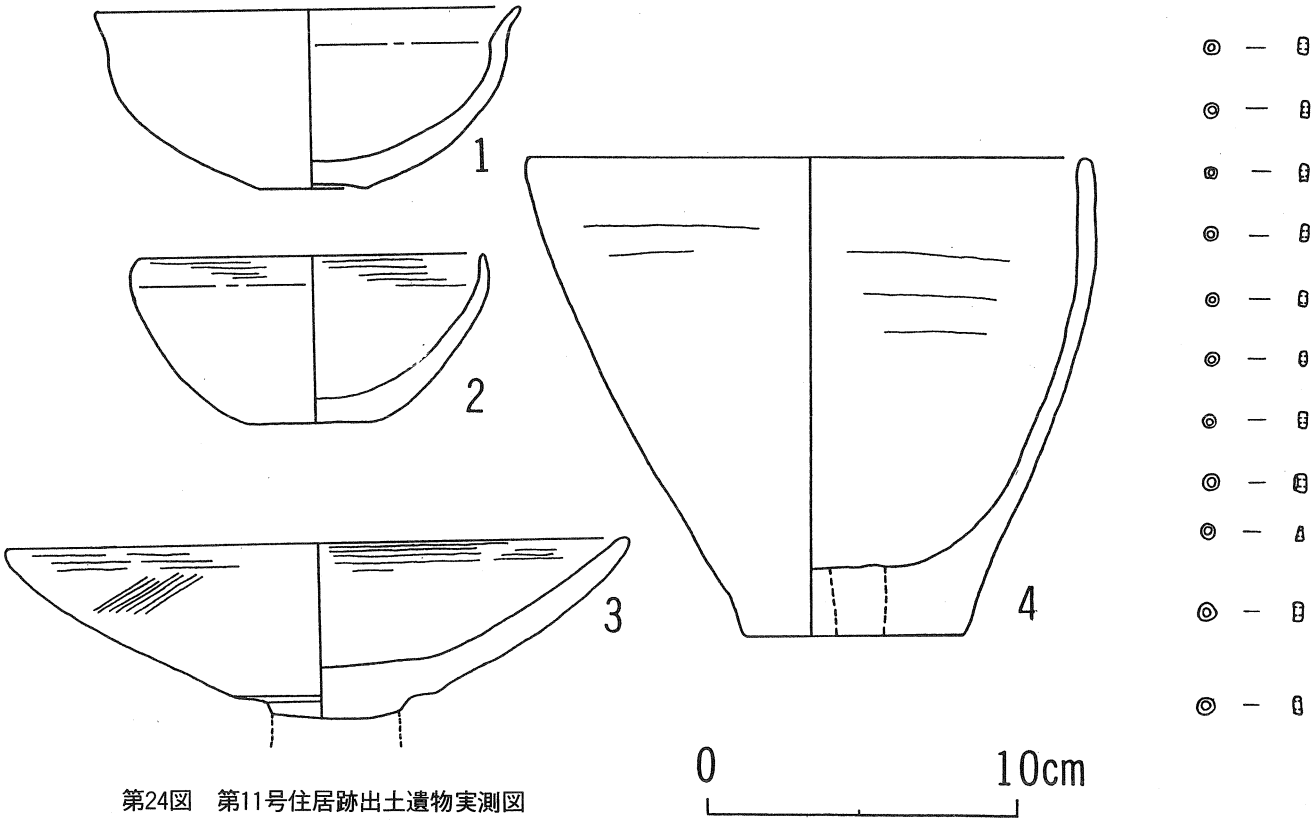
1 黒褐色（炭粒とローム粒子を少量含み、しまりは良い。）
2 黒褐色（炭中ブロックとローム小ブロックを少量含み、焼土粒も若干含む。しまりは普通。）
3 暗褐色（ローム粒子を少量含み、焼土粒も若干含む。しまりは普通。）
4 黒褐色（ローム粒を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
5 暗褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
6 暗褐色（ローム粒子を少量含み、しまりは良い。）
7 明褐色（ローム中ブロックを若干含み、ローム粒子を多く含む。しまりは良い。）
8 黒褐色（ローム粒とローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
9 暗褐色（ローム小ブロック・炭粒・焼土粒子を若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
10暗褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含み、炭粒子も若干含む。しまりは良い。）
11暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは良い。）
12黄褐色（ローム粒子のみ。しまりは普通。）

第23図　第11号住居跡実測図

第11号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 5.9 口径 13.6 底径 3.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、体部内面で口縁部との境に弱い稜を持つ。体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	赤褐色	砂粒	良好	北西壁覆土下層
2	土師坏	器高 5.4 口径 11.2 底径 3.9	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。底部から体部にかけてヘラ削り。口縁部内・外面及び体部内面ナデ。	黄褐色	砂粒 雲母	良好	体部外面煤付着。西コーナー貯蔵穴1内底部
3	土師高坏	口径 19.9	坏部破片。坏部は外面に稜を持ち外傾して開く。坏部内・外面ハケ目調整。	暗褐色	砂粒	良好	西コーナー貯蔵穴1,2内底部
4	土師甑	器高 15.4 口径 18.0 底径 6.1	平底。底部中央に孔を穿つ。深鉢状を呈して立ち上がり、体部内・外面は粗雑なヘラ磨き。	暗褐色	砂粒	普通	南コーナー貯蔵穴付近床面

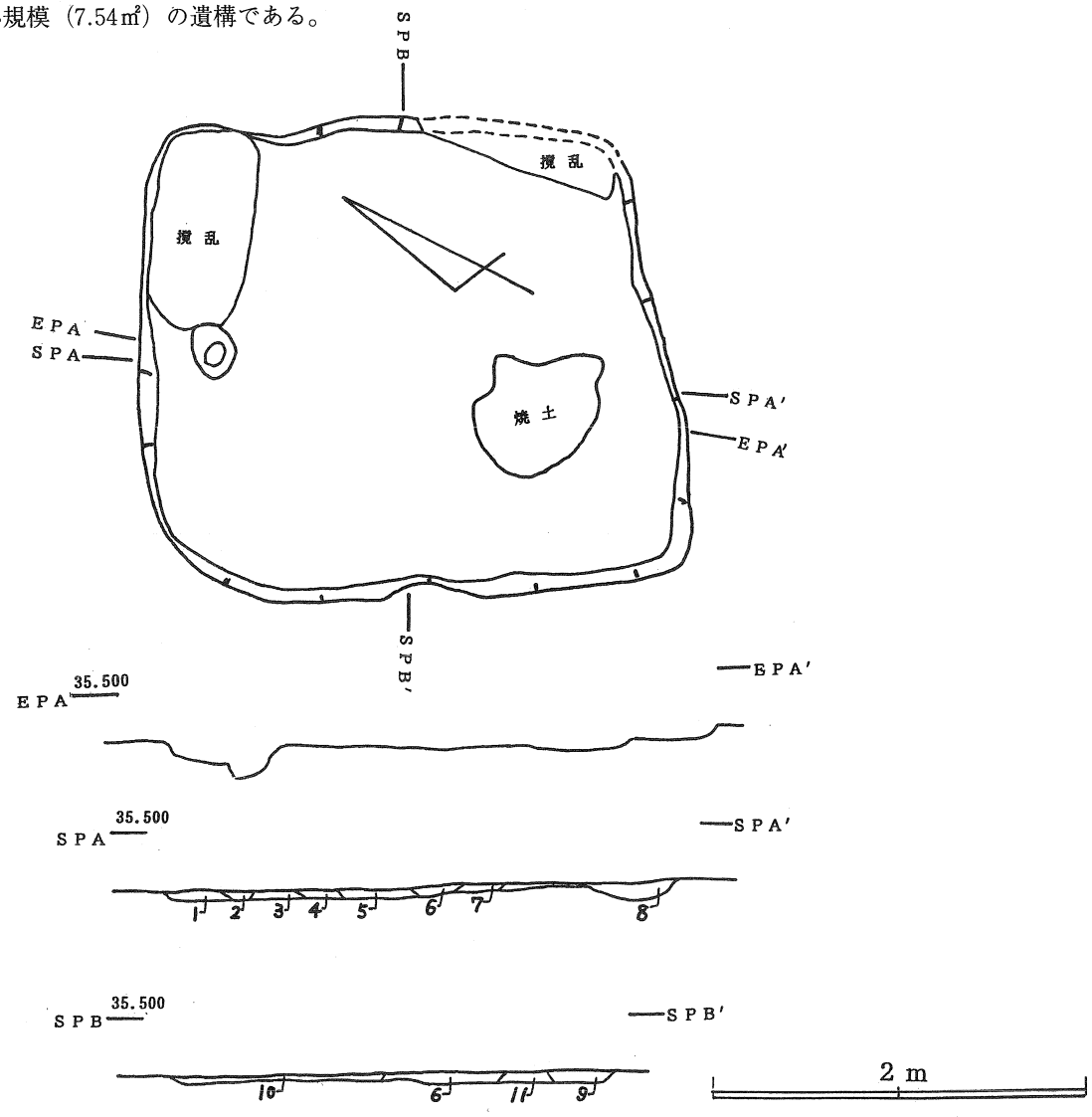
番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現在率 (%)	出土地点	備考
5	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	西コーナー貯蔵穴2内底部	滑石
6	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	西コーナー貯蔵穴2内覆土	〃
7	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
8	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
9	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
10	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
11	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
12	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
13	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
14	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
15	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃



第24図　第11号住居跡出土遺物実測図

(12) **第12号住居跡**（第25図）

形　態　隅丸長方形状をなしている。**主軸方位**　N－31°－W。**規　模**　中軸線上東西2.54ｍ、南北2.85ｍを測る。**柱　穴**　北東部コーナーを巡るようにして東西方向に長軸1.05ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.09ｍを測る撹乱杭がある。その西端に所在っする柱穴状の掘り込みの状態からは、撹乱杭の延長区の可能性が多分に考えられる。したがって、柱穴は構築当初から設けられていなかったと判断することに妥当性がある。**壁　溝**　無し。**床　面**　全体的に柔軟な貼り床である。南東部コーナー付近にも撹乱があり、中央部から南西寄りに焼土が薄く堆積する。**貯蔵穴**　無し。**遺　物**　無し。**その他**　今回調査した住居跡のうち、最小規模（7.54㎡）の遺構である。

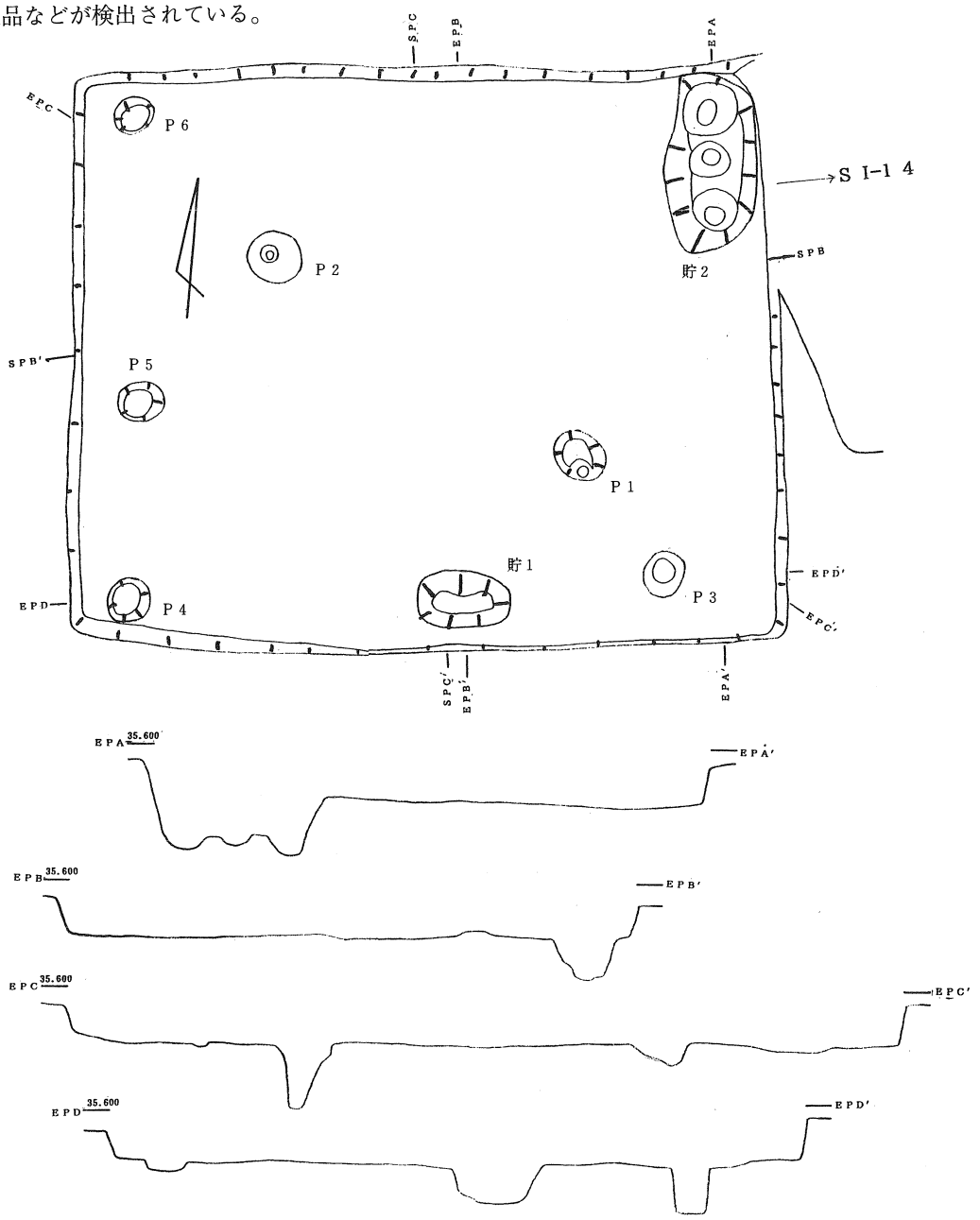


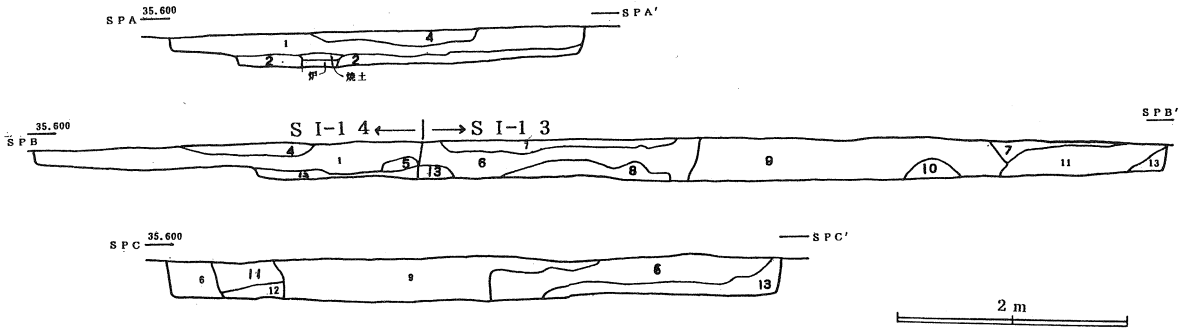
土層凡例
1 黄褐色（ローム粒子と黒色粒子を少量含み、しまりは良い。）
2 明褐色（ローム粒子と焼土粒子を少量含み、しまりは普通。）
3 黒褐色（焼土粒を少量含み、しまりは普通。）
4 暗褐色（ローム粒子をやや多く含み、焼土粒を少量含む。しまりは普通。）
5 黒　色（ローム粒子と焼土粒を若干含み、しまりは普通。）
6 黒褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
7 黒　色（ローム粒子を若干含みしまりは普通。）
8 黒　色（ローム小ブロックとローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
9 明褐色（ローム小ブロックとローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
10 黒　色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
11 黒褐色（ローム中ブロックとローム粒子・焼土粒を若干含む。しまりは普通。）

第25図　第12号住居跡実測図

(13) **第13号住居跡**（第26・27図）

形　態　隅丸長方形状をなし、東側の14号住居跡と切り合う。**主軸方位**　N－91°－W(N－89°－E)。**規　模**　中軸線上東西6.50m、南北5.45mを測る。**柱　穴**　6本（P 1～6）が相当するが極めて不規則な配置といえる。P 1東西径0.46m、南北径0.45m、深さ0.22m、P 2東西径0.51m、南北径0.50m、深さ0.62m、P 3東西径0.33m、南北径0.42m、深さ0.42m、P 4東西径0.40m、南北径0.40m、深さ0.06m、P 5東西径0.39m、南北径0.30m、深さ0.16m、P 6東西径0.36m、南北径0.33m、深さ0.11mを計測する。**壁　溝**　無し。**床　面**　堅くしまる貼り床。北西部コーナーに近い位置と、南壁の中央に沿って小範囲に薄い焼土の堆積が認められる。**貯蔵穴**　2地点で確認する。(1)は東北部コーナーの14号住居跡と切り合う線上西側に位置し、南北方向に不整楕円形状を呈し、長軸1.61m、短軸0.86m、深さ0.53mを測る。(2)は南壁に沿ってほぼ中央で東西方向に掘り込まれている。楕円形をなしており、長軸0.86m、短軸0.55m、深さ0.36mを測る。**遺　物**　土師器　坏、滑石製品　管玉（9点）・臼玉・剣形品、石製品　砥石、不明鉄製品などが検出されている。





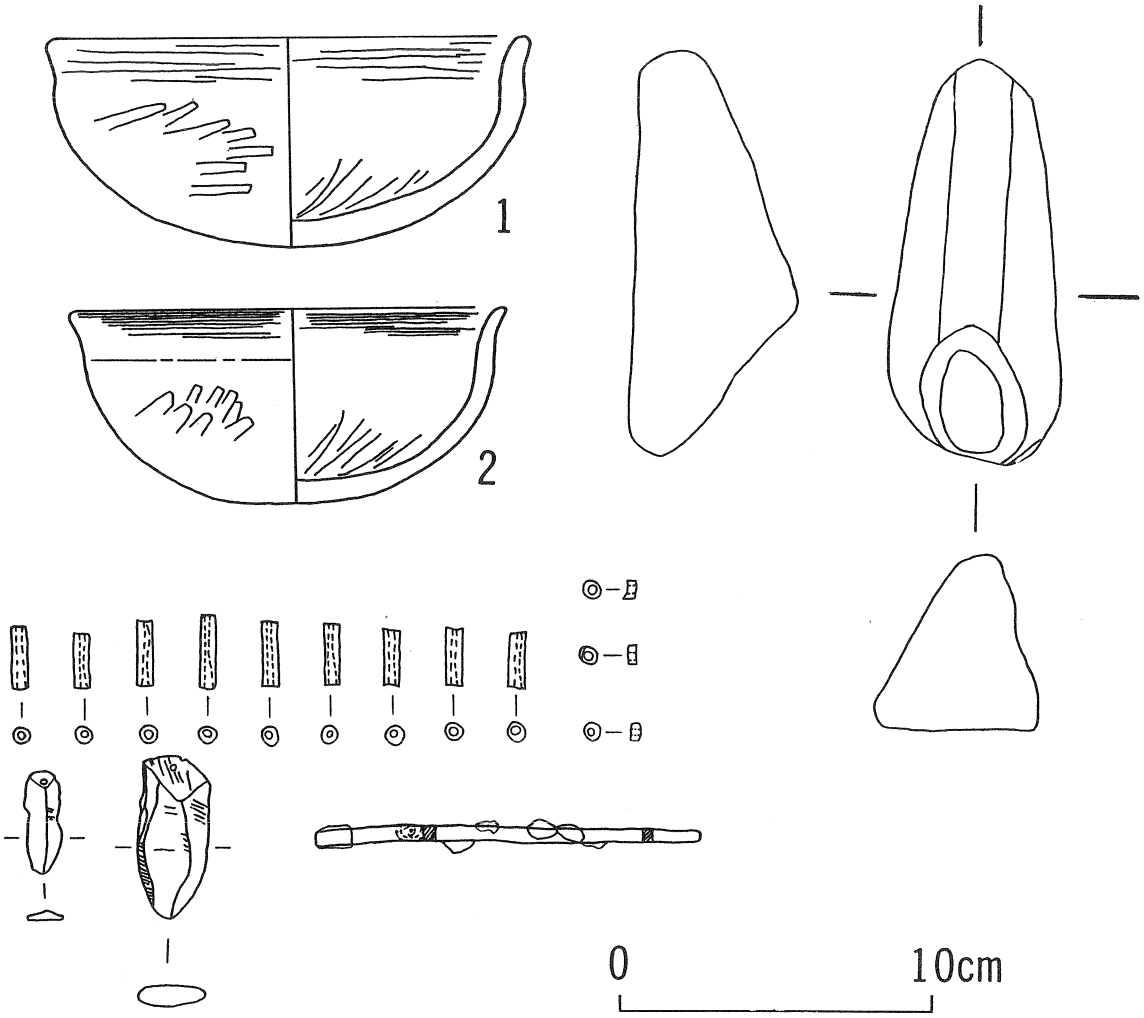
土層凡例
1黒褐色（ローム粒を若干含み、しまりはやや良い。）
2黄褐色（ローム中ブロック・ローム粒・焼土粒がやや多く、しまりは非常に良い。）
3暗褐色（ローム粒・ローム粒子・焼土粒子を若干含み、しまりは良い。）
4暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
5黒褐色（黒色粒をやや多く含み、ローム粒子も若干含む。しまりは普通。）
6黒褐色（ローム粒子をやや多く含み、焼土粒と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
7黒　色（焼土粒を若干含み、しまりは普通。）
8暗褐色（ローム粒とローム粒子をやや多く含み、しまりは普通。）
9黒褐色（ローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
10暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒・焼土粒も若干含む。しまりは普通。）
11暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒・焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
12黒　色（ローム粒を若干含み、しまりは普通。）
13暗褐色（ローム粒と黒色粒を少量含み、しまりは普通。）

第26図　第13号住居跡実測図

第13号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 7.0 口径 15.5	丸底。口縁部下位に外稜を持ち、口縁部はゆるく外反し、端部でさらに外反する。口縁部内・外面ハケ目調整。体部内・外面ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	貯蔵穴内覆土上下層
2	土師坏	器高 6.4 口径 13.9	丸底。口縁部下位に外稜を持ち、口縁部はゆるく外反し、端部でさらに外反する。口縁部内・外面ハケ目調整。体部内・外面ナデ。	赤褐色	砂粒	良好	底部外面に「＋」字状の刻みあり。南壁中央付近床面

番号	器種	法量（cm）			孔径（mm）	重量（g）	現在率（%）	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
3	管玉	2.0	0.5	…	2.0	1.1	100	南東部床着	滑石
4	管玉	1.7	0.5	…	2.0	1.0	100	〃	〃
5	管玉	2.1	0.5	…	2.0	1.1	100	〃	〃
6	管玉	2.4	0.5	…	2.0	1.2	100	〃	〃
7	管玉	2.1	0.4	…	2.0	1.1	100	〃	〃
8	管玉	2.0	0.4	…	2.0	1.1	100	〃	〃
9	管玉	1.9	0.4	…	2.0	1.1	100	〃	〃
10	管玉	1.9	0.5	…	2.0	1.1	100	〃	〃
11	管玉	1.8	0.4	…	2.0	1.1	100	〃	〃
12	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
13	臼玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
14	臼玉	0.5	0.6	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
15	剣形品	3.3	0.1	0.3	1.5	2.0	100	北東ｺｰﾅｰ付近覆土中層	〃
16	剣形品	5.4	0.3	0.6	2.0	12.0	100	西壁際覆土下層	〃
17	砥石	13.2	0.4	5.4	…	486.0	100	北東部床着	1面使用
18	不明鉄製品	12.3	0.5	0.4	…	8.5	…	南東部覆土下層	



第27図　第13号住居跡出土遺物実測図

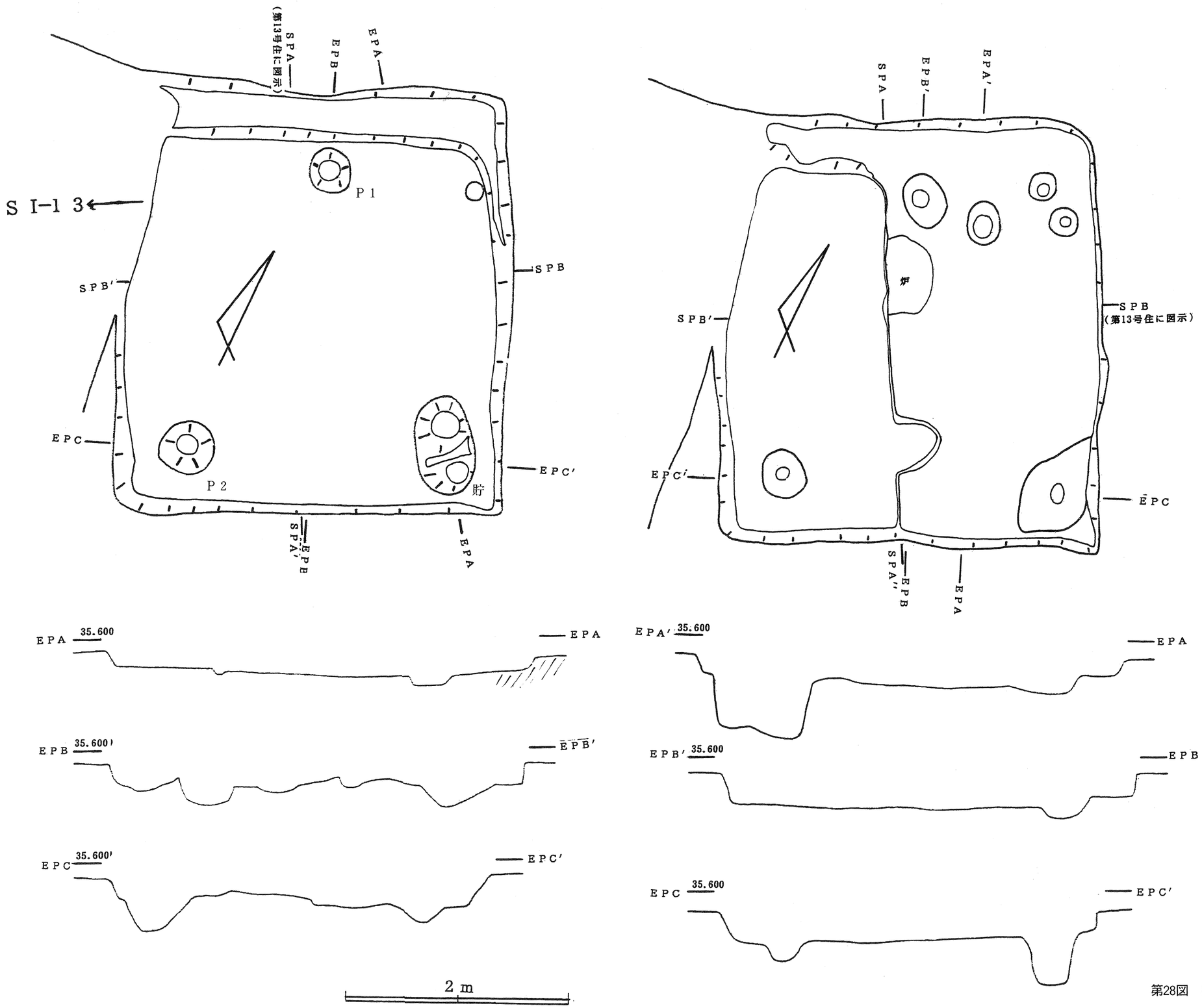
(14) **第14号住居跡**（第２次遺構）（第28・29図）

形　態　本跡は13号住居跡と切り合う状態でその東側に所在し、形状はほぼ正方形を呈するが、北壁及び床面調査の段階で、同一の位置に本跡に先行する時期の住居跡が構築されていたことを確認。この住居跡を第１次遺構とし、次頁で観察結果をあげておく。**主軸方位**　N－30°－W。**規　模**　中軸線上東西3.36m、南北3.40mを測る。**柱　穴**　Ｐ１とＰ２が相当する。Ｐ１東西径0.40m、南北径0.35m、深さ0.14m、Ｐ２東西径0.48m、南北径0.48m、深さ0.17mを測る。**壁　溝**　無し。**床　面**　柔軟な貼り床で凹凸が目立つ。**貯蔵穴**　東南部コーナーに南北方向に掘り込まれ、不整楕円形をなしている。長軸0.90m、短い軸0.50m、深さ0.47mを測る。**遺　物**　土師器　坏・甕、石製品　砥石・すり石などが検出されている。

（第１次遺構）

床面は13号住とほぼ同一レベルと思われるが、大きさにおいては南壁が北に0.35m程伸びており、北壁の長さ3.15mを加えた数値1.103㎡程が第２次遺構よりも広いことになる。第２次遺構は第１次遺構の施設を継承して築いたことが、すでに確認されている東・南・西壁の位置および計測値などから知られるとともに、遺存する柱穴Ｐ１と貯蔵穴の施設も再利用されていたことは明らかである。

第１次遺構の遺存する床面の完掘結果では、概して軟弱な貼り床の痕跡が数か所で確認され、その多くが撹乱に近い状況で観察されていることは、第２次遺構が構築される時点での作業行為がもたらした結果と理解できよう。遺物は東北部コーナー付近に集中しており、土師器　坏・壷・甕などの破片が多量に出土している。

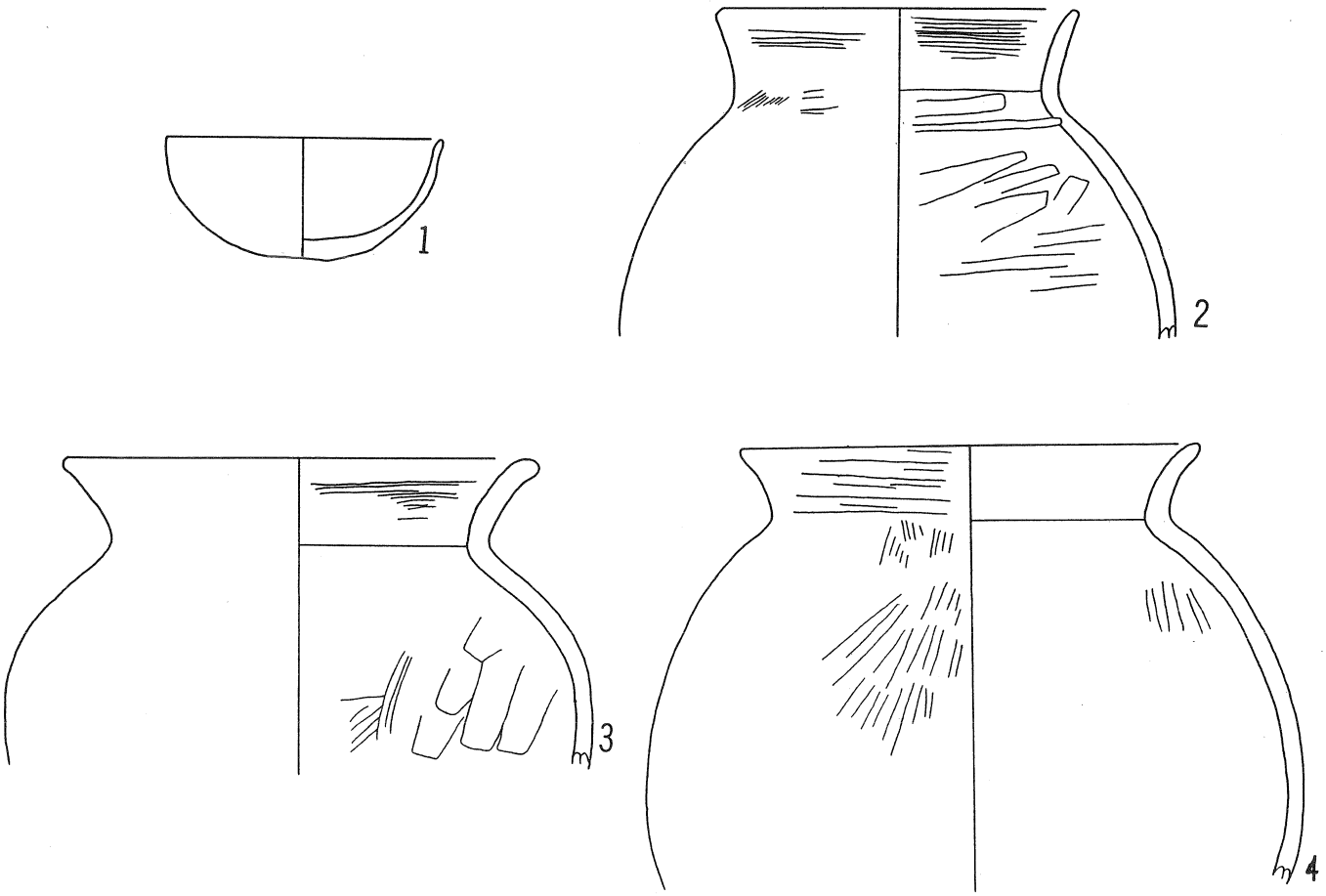


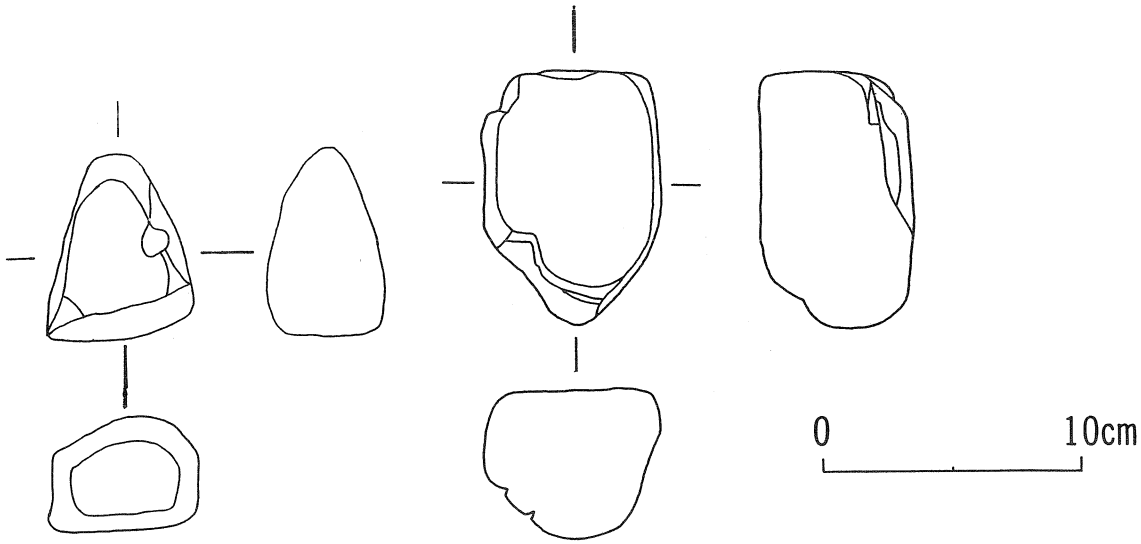
第28図　第14号住居跡実測図

第14号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 4.8 口径 11.0 底径 2.6	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。口縁部及び体部内・外面ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	(二次焼成) Ⅰ南東壁際覆土中層
2	土師甕	口径(14.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面ナデ。	赤褐色	砂粒	良好	Ⅰ北西壁際覆土下層
3	土師甕	口径 18.7	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は張りが弱く、頸部外反する。胴部内・外面及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面ハケ目調整。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	銅部外面に煤付着。 Ⅰ北西部覆土下層
4	土師甕	口径 18.2	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は張りがあり、胴部内・外面ナデ。胴部内・外面はヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	Ⅱ中央部覆土中層

番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現在率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	砥石	9.9	6.9	5.8	…	651.0	100	Ⅰ南西部覆土下層	2面使用
6	すり石	7.3	5.7	4.4	…	262.0	100	Ⅰ南東部床着	

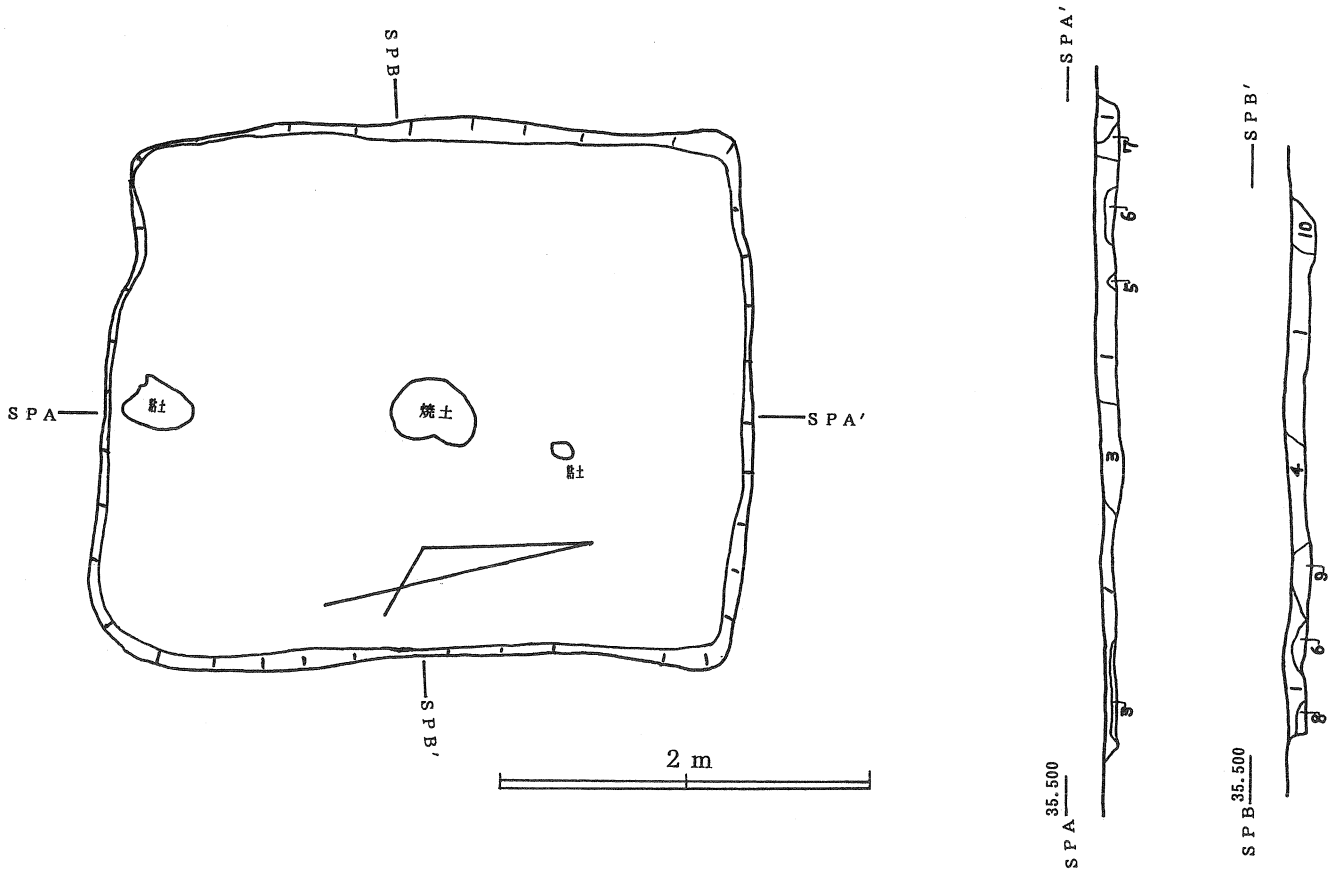




第29図　第14号住居跡出土遺物実測図

(15) 第15号住居跡（第30・31図）

形　態　隅丸長方形をなしている。**主軸方位**　N－12°－E。**規　模**　中軸線上東西2.85ｍ、南北3.47ｍを測る。**柱　穴**　無し。**壁　溝**　無し。**床　面**　軟弱な貼り床で、凹凸が著しい。ほぼ中央部の小範囲で焼土の堆積が認められる。おそらく炉跡と思われる。**貯蔵穴**　無し。**遺　物**　土師器　坏、鉄製品　鎌先などが検出されている。



土層凡例
1黒褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
2茶灰色（粘土。しまりは良い。）
3暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。）
4黒褐色（ローム粒と焼土粒を若干含み、しまりは普通。）
5黄褐色（ローム大ブロック。しまりは非常に良い。）
6暗褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
7黄褐色（ローム粒とローム粒子の中に黒色粒・黒色粒子を少量含む。しまりは普通。）
8黄褐色（ローム粒の中に黒色粒を若干風味、しまりはやや柔らかい。）
9明褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
10暗褐色（黒色粒を若干含み、しまりは普通。）

第30図　第15号住居跡実測図

第15号　住居跡出土遺物観察表

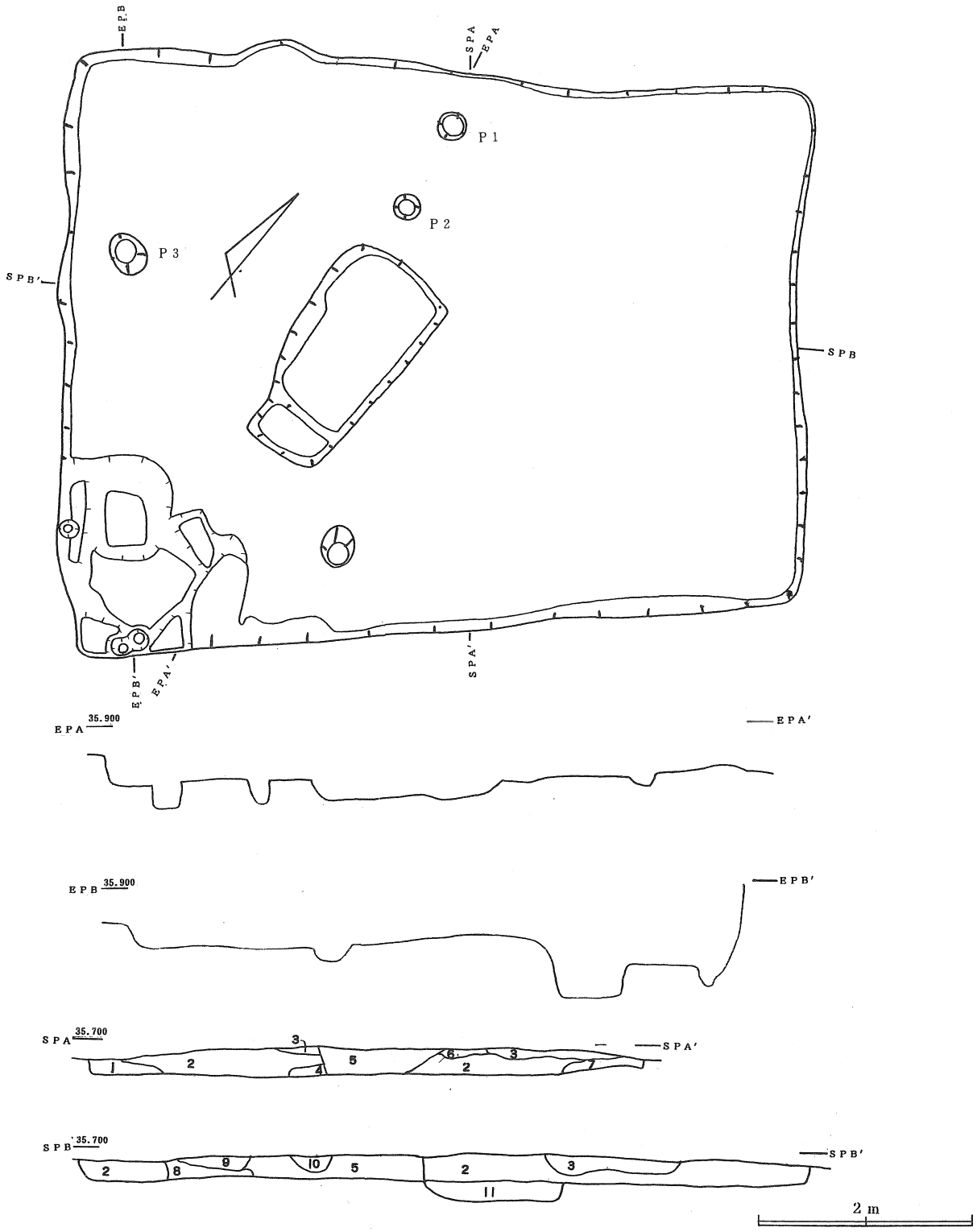
番号	器種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 6.4 口径 15.3	丸底。体部から口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	褐色	砂粒	良好	中央部覆土下層

番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
2	鎌	11.6	2.3	0.3	…	28.0	98	中央部床着	

第31図　第15号住居跡出土遺物実測図

(16) 第16号住居跡（第32・33図）

形　態　隅丸長方形状をなしている。本跡の70％余は調査区域外に所在していたが、当該部分は既に公有化されていたので完掘することができた。**主軸方位**　N－130°－W（N－50°－E）。**規　模**　中軸線上東西6.85m、南北5.42mを測る。**柱　穴**　配置は極めて不規則であるが、3本（P1～3）が相当する。P1東西径0.28m、南北径0.28m、深さ0.25m、P2東西径0.27m、南北径0.24m、深さ0.22m、P3東西径0.40m、南北径0.33m、深さ0.20mを計測する。**壁　溝**　無し。**床　面**　柔軟な貼り床で凹凸が著しい。中央部のやや西側で南北方向に2.16m×1.10m程の長方形状の掘方が所在するが、本跡との直接的な関係はないようである。焼土の堆積は6か所で確認されており、うち2か所からは焼けたローム塊が検出されていることから、炉跡の可能性もある。なお、東壁沿い中央付近から少量のベンガラも出土している。**貯蔵穴**　南西部コーナーの北寄りに掘り込まれており、東西径0.80m、南北径0.97m、深さ0.52mを測る。底部からは焼土塊が確認されている。**遺　物**　土師器　坏・高坏・椀、滑石製品　勾玉・臼玉（14点）などが検出されている。



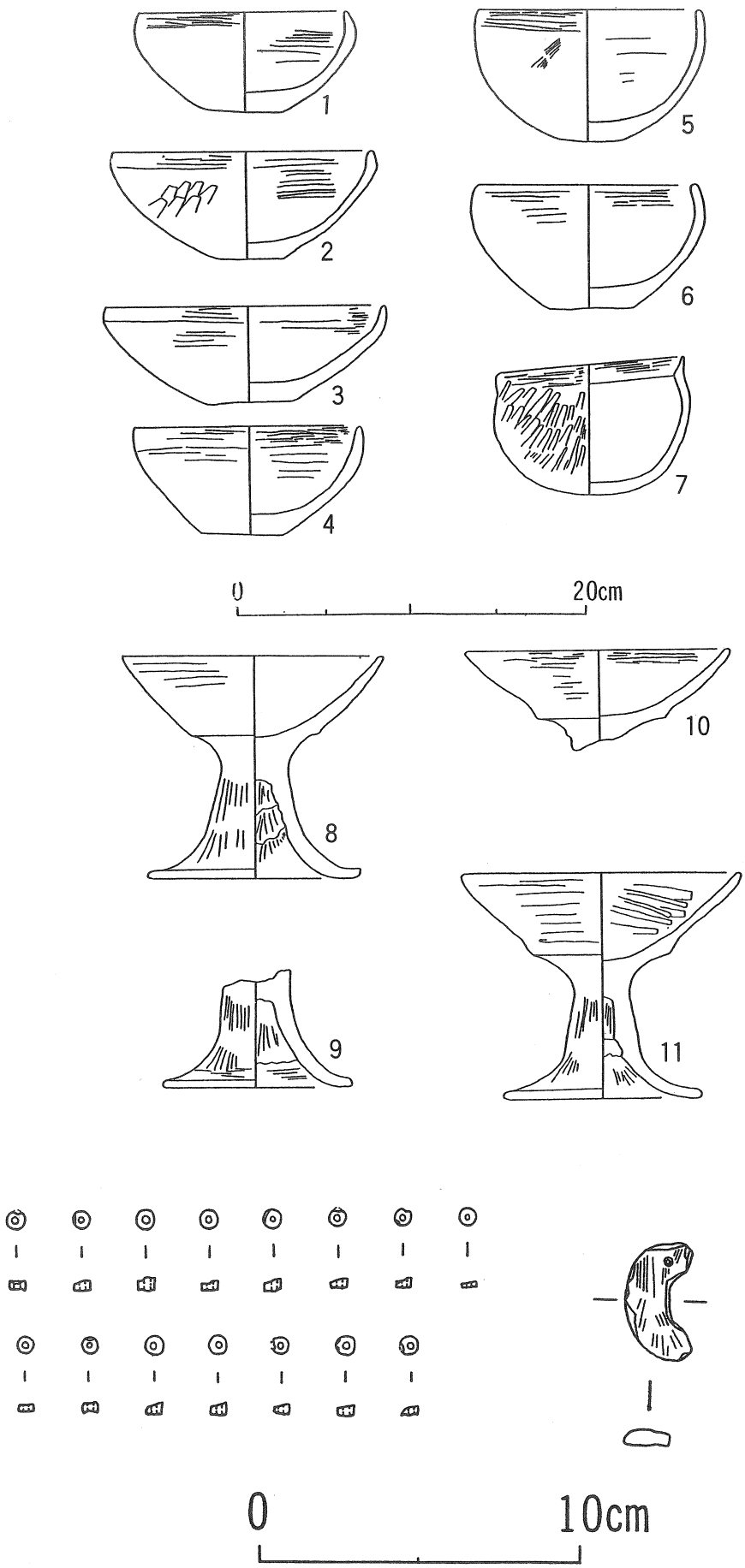
土層凡例
1暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。）
2黒褐色（ローム粒・炭粒・焼土粒子を若干含み、しまりは普通。）
3黒褐色（焼土を若干含み、しまりは普通。）
4黒褐色（炭粒と焼土粒子を若干含み、しまりは普通。）
5黒褐色（ローム粒と炭粒子を少量含み、しまりは普通。）
6暗褐色（ローム粒と炭粒を少量含み、しまりは普通。）
7黒褐色（ローム小ブロックとローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
8黒褐色（ローム粒を少量と炭粒子を若干含む。しまりややや柔らかい。）
9暗褐色（ローム粒子を少量と焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
10暗赤褐色（焼土粒子が多く炭粒も若干含む。しまりは普通。）
11黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）

第32図　第16号住居跡実測図

第16号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師坏	器高 5.7 口径 12.1 底径 3.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。体部外面及び底部ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	黄褐色	砂粒	良好	北コーナー壁際床面
2	土師坏	器高 6.4 口径 14.8 底径 3.6	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は弱く内傾する。口縁部内。外面横ナデ。体部ヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	普通	中央部覆土下層
3	土師坏	器高 5.6 口径 15.9 底径 5.0	上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面及び底部ヘラナデ。	赤褐色	砂粒	普通	体部外面に煤付着 北西部床面
4	土師甕	器高 6.2 口径 13.1 底径 4.8	口縁部の一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は弱く内傾する。口縁部内・外面ナデ。体部ヘラ磨き。内・外面赤彩。	赤褐色	砂粒	普通	西コーナー付近覆土下層
5	土師甕	器高 7.5 口径 12.8	丸底気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は弱く内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位及び底部ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	南コーナー付近覆土下層
6	土師甕	器高 7.2 口径 12.7 底径 5.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒 雲母	良好	(二次焼成)
7	土師甕	器高 7.5 口径 10.9	丸底。口縁部の一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内面に稜を持ち、わずかに外反する。底部から体部にかけてヘラけずり。口縁部内・外面横ナデ。	暗褐色	砂粒	粗雑	南コーナー付近覆土下層
8	土師高坏	器高 13.9 口径 14.9 底径 12.3	脚部はラッパ状に開き、坏部は外面下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。脚部外面縦方向にヘラ磨き。坏部内・外面横方向にヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	普通	坏部内面に煤付着。北西部炉(第1炉)内
9	土師高坏	底径 10.9	脚部破片。脚部はラッパ状に開く。脚部外面弱いヘラ磨き。内面はていねいなナデ。	赤褐色	砂粒	普通	(二次焼成) 北西部炉(第1炉)内
10	土師高坏	口径 15.4	坏部破片。坏部は外面下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。内・外面横方向にヘラ磨き。	暗褐色	砂粒	普通	北西部炉(第1炉)内
11	土師高坏	器高 13.1 口径 15.3 底径 11.6	脚部はラッパ状に開き、外面下位に稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。脚部外面縦方向にヘラ磨き。坏部内・外面方向にヘラ磨き。	赤褐色	砂粒	普通	杯部内面に煤付着。北西部炉(第1炉)内

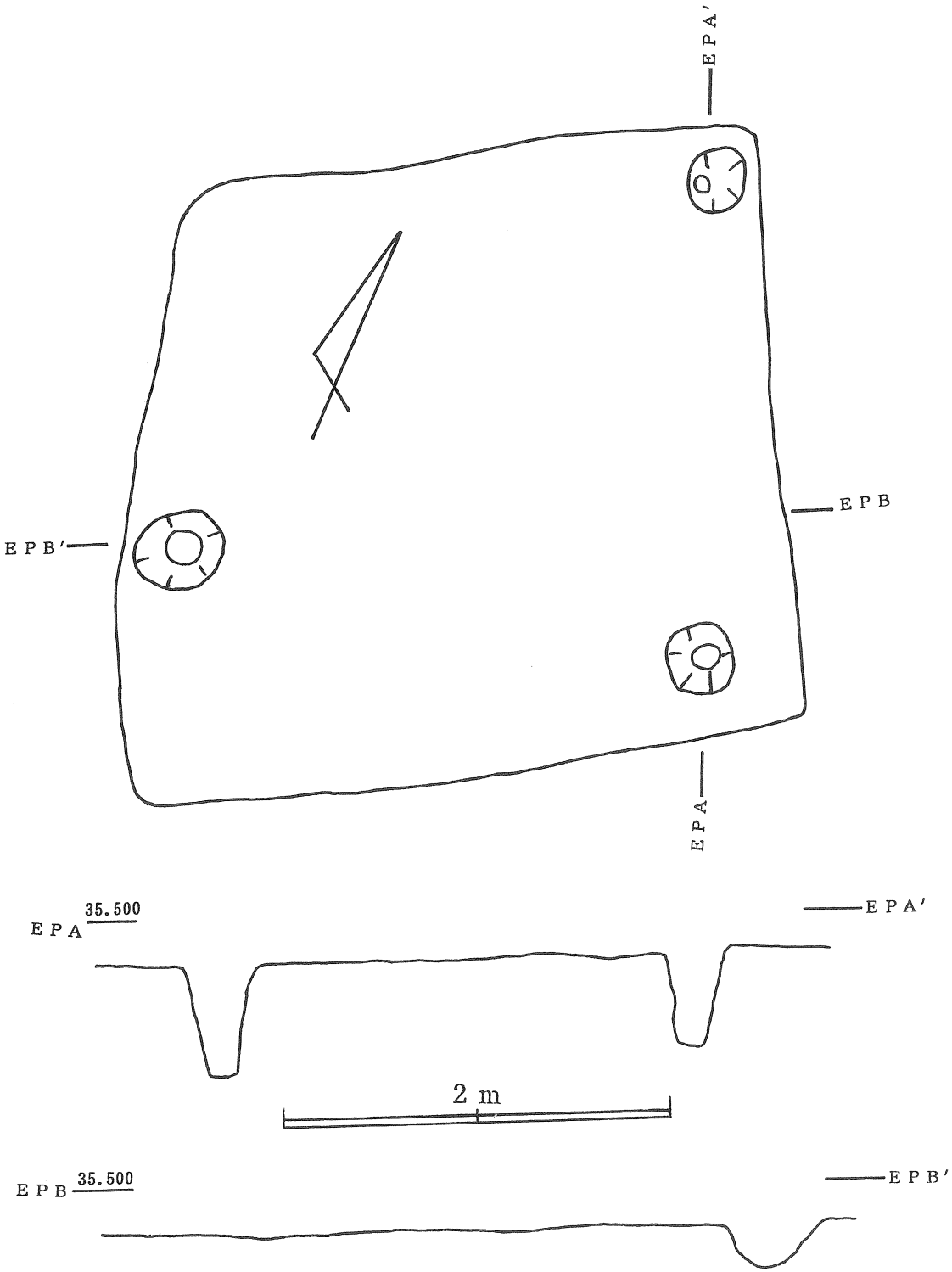
番号	器種	法量 (cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
12	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	中央部覆土下層	滑石
13	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	南西部覆土下層	〃
14	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	南東壁際覆土下層	〃
15	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
16	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
17	臼玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
18	臼玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
19	臼玉	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
20	臼玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
21	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
22	臼玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
23	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
24	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
25	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100		〃
26	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	南東壁際床下	〃
27	勾玉	3.6	1.4	0.5	1.5	6.5	100	北西部覆土下層	〃



第33図　第16号住居跡出土遺物実測図

(17) **第17号住居跡**（第34・35図）

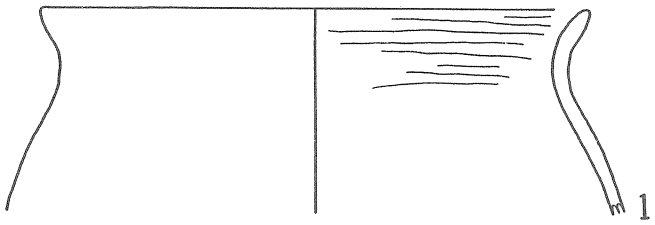
形　態　北西部コーナー周辺が詰まる変則的方形状を呈するといえるが、壁を確認し難く輪郭が判然としない。**主軸方位**　N－26°－W。**規　模**　東西3.40m、南北　3.17mを測る。**柱　穴**　3本（P1～P3）が相当する。P1東西経0.38m、南北経0.37m、深さ0.58m、P2東西経0.30m、南北経0.36m、深さ0.54m、P3東西経0.43m、南北経0.43m、深さ0.27mを測る。**壁　溝**　無し。**床　面**　軟弱な張り床。**貯蔵穴**　無し。**遺　物**　土師器　甕、その他　鉄滓が数点検出されている。



第34図　第17号住居跡実測図

第17号 住居跡出土遺物観察表

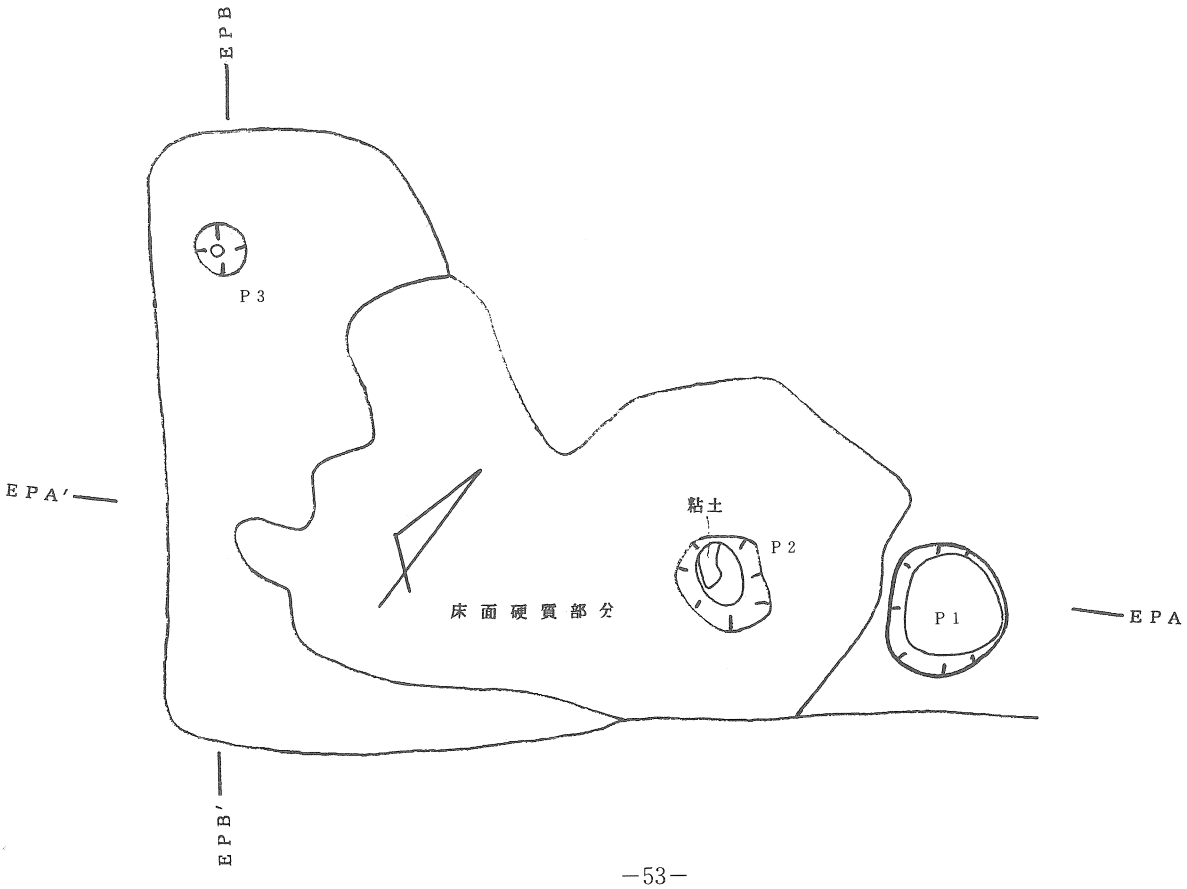
番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師 甕	口径 (24.3)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部はゆるく内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部及び胴部の内面ナデ、外面はヘラ削り。	褐色	砂粒	良好	外面全体に煤付着 北部中央床面

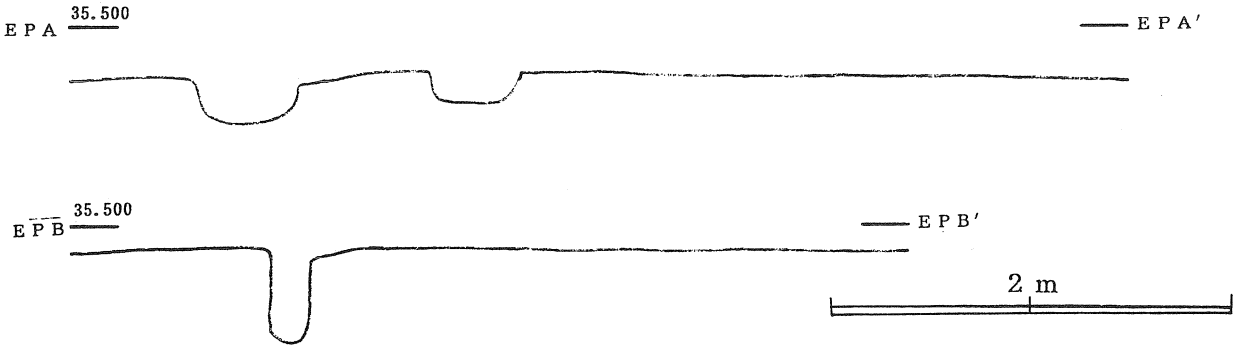


第35図 第17号住居跡出土遺物実測図 0 10cm

(18) 第18号住居跡（第36図）

形 態 隅長方形状をなしている。主軸方位 N－129°－W（N－51°－E）。規 模 東壁と北壁の大半が欠失している現状から、図面上の復原数値となるが、概ね東西4.30m、南北3.00m程の大きさになる。柱 穴 3本が相当する。P1東西経0.65m、南北経0.65m、深さ0.25m、P2東西経0.55m、南北経0.42m、深さ0.18m、P3東西経0.27m、南北経0.22m、深さ0.47mを測る。壁 溝 無し。床 面 堅くしまった貼り床であるが、西側が顕著に遺存する。柱穴P2の底部に白色粘土が充填されていた。貯蔵穴 遺存面からの確認はできなかったが、柱穴P1の位置と規模からは貯蔵穴として機能していた可能性もあり得る。遺 物 無し。

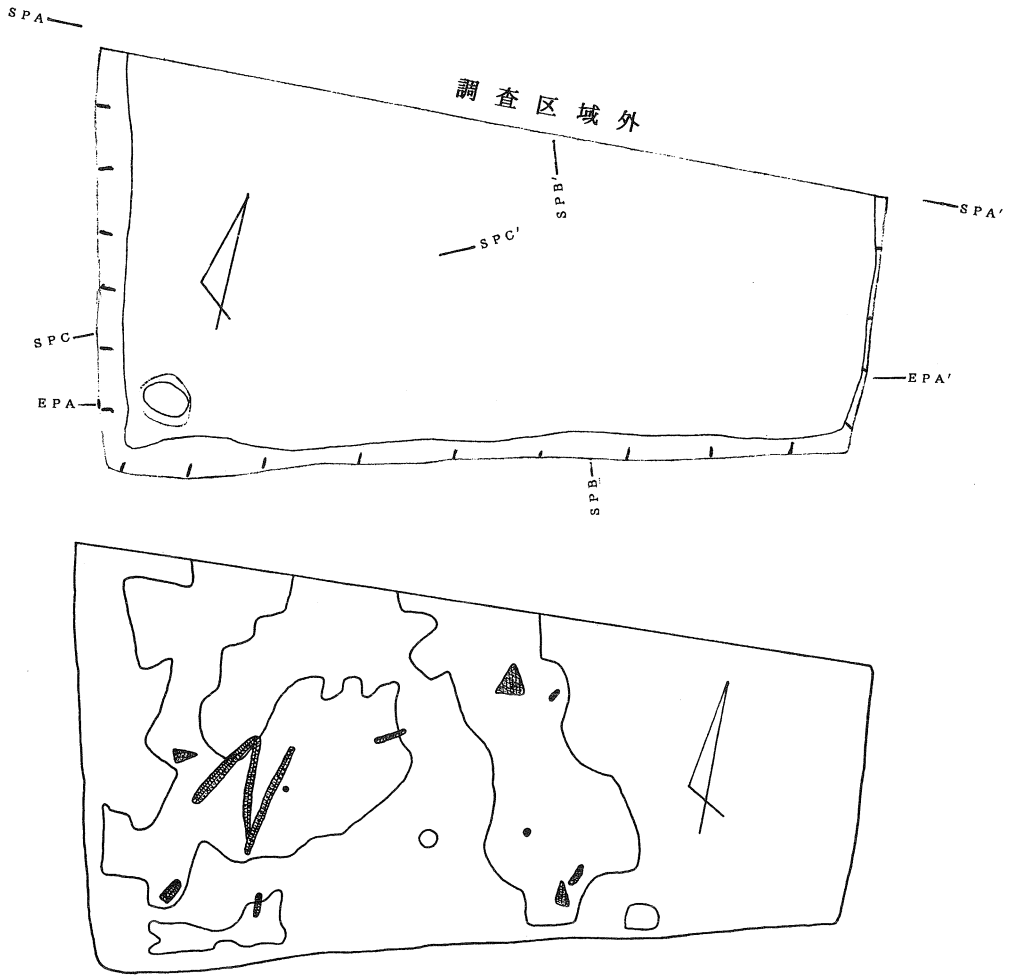


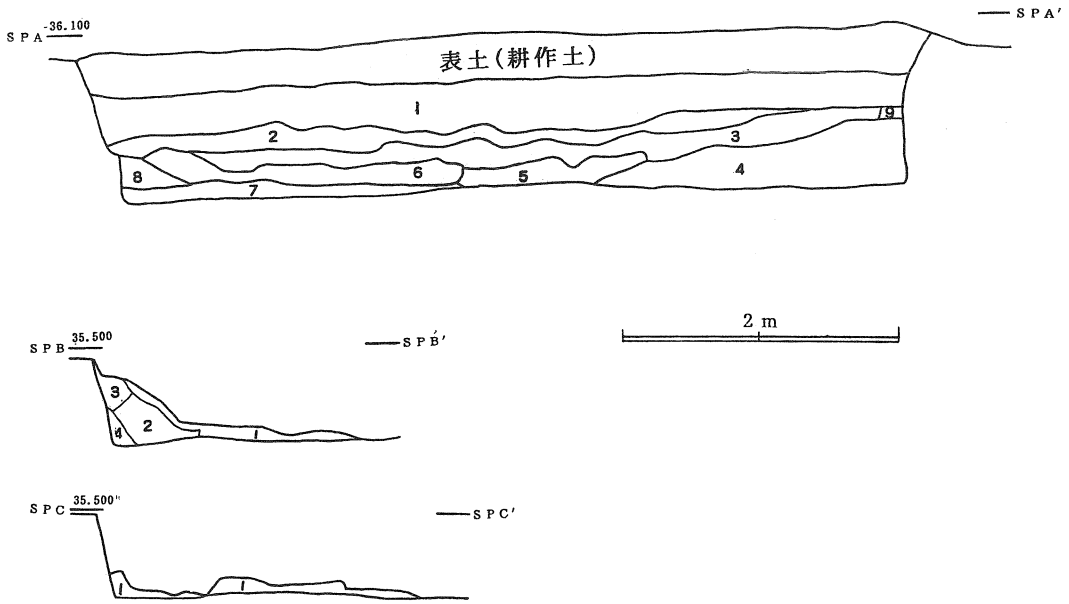


第36図　第18号住居跡実測図

(19) **第19号住居跡**（第37・38図）

形　態　本跡の北部直上には公道（農道）が敷設されている関係で調査を断念する。遺存する遺構の状況から推測して、正方形若しくは長方形を呈するものと思考する。**主軸方位**　N－18°－W。**規　模**　南北は不明瞭であるが、東西は5.65mを測る。**壁　溝**　明確性を欠いており、遺存面で僅かに認められる。**床面**　遺存面での観察では、鹿沼土を多用する柔軟な貼り床であるが、柱穴の痕跡確認までには至らなかった。床面のほぼ全域から多量の焼土が確認されている。**貯蔵穴**　遺存域からは確認されていない。**遺　物**　滑石製品　有孔円板、土製品　土玉などが出土している。





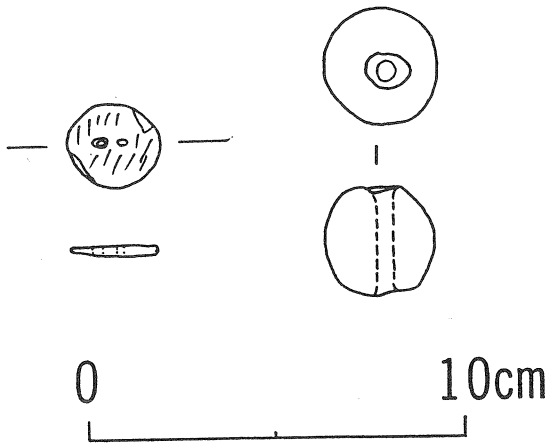
土層凡例
1黒　色（ローム粒とローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
2黒褐色（ローム粒・ローム粒子を少量と炭粒を若干含む。しまりは普通。）
3暗褐色（炭粒・ローム粒・ローム粒子を少量含み、焼土粒も若干含む。しまりはやや良い。）
4明褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子が多く、黒色粒と焼土粒も若干含む。しまりは良い。）
5明褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、黒色粒も少量含む。しまりは良い。）
6暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を少量含む。しまりは普通。）
7暗褐色（炭粒と焼土粒を若干含む。しまりは普通。）
8暗褐色（ローム粒を若干含む。しまりはやや柔らかい。）
9暗褐色（ローム粒を若干含む。しまりは普通。）

ＳＰＢ～ＳＰＢ′のライン
1赤褐色（焼土。しまりは良い。）
2暗褐色（ローム粒・ローム粒子・焼土粒を若干含む。しまりは普通。）
3暗褐色（ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
4黒褐色（ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）

第37図　第19号住居跡実測図

第19号　住　居　跡　出　土　遺　物　観　察　表

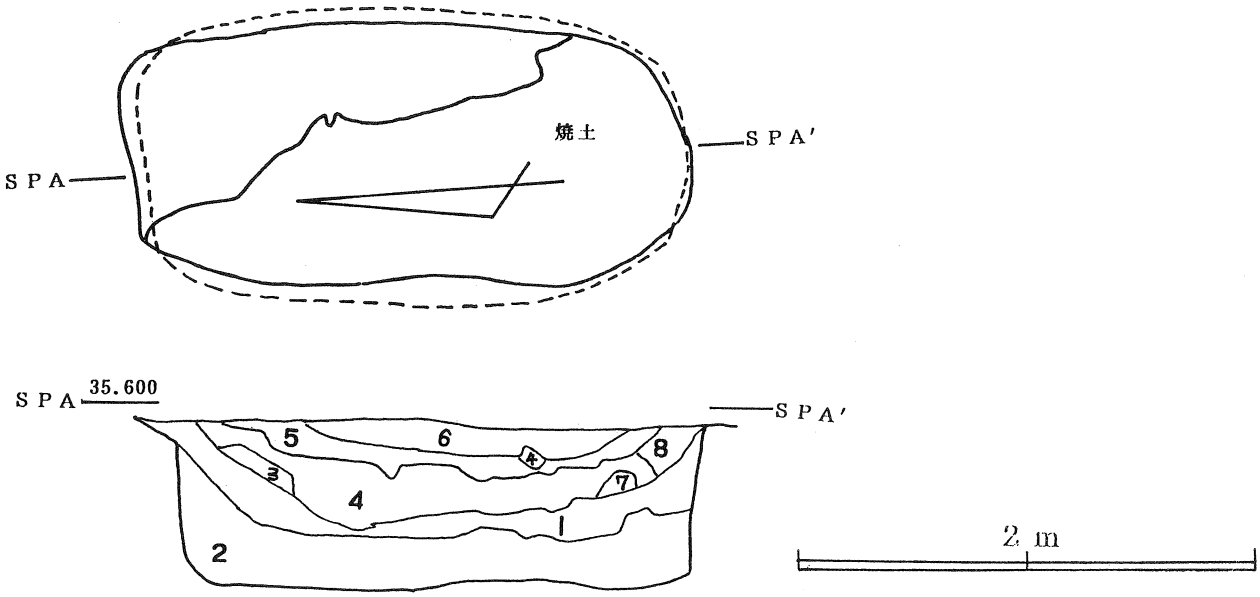
番　号	器　　種	法　量（cm）			孔　径	重　量	現存率	出　土　地　点	備　　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
1	有孔円板	2.4	2.5	0.3	1.5	1.5	100	西部覆土下層	滑　石
2	土　玉	2.9	3.0	…	5.0	21.0	100	覆　土	



第38図　第19号住居跡出土遺物実測図

(20) 第１号土　坑（第39図）

４号住東南隅から東に5.20ｍ程離れた位置で、南北方向に向いて所在する。形態は楕円形状を呈し、長軸2.25ｍ、短軸1.30ｍ、深さ0.80ｍを測る。表土から0.30ｍ程の深さまでは焼土粒と炭粒が混在する堆積層が確認されている。底部は概ね平坦で、遺物は検出されていない。

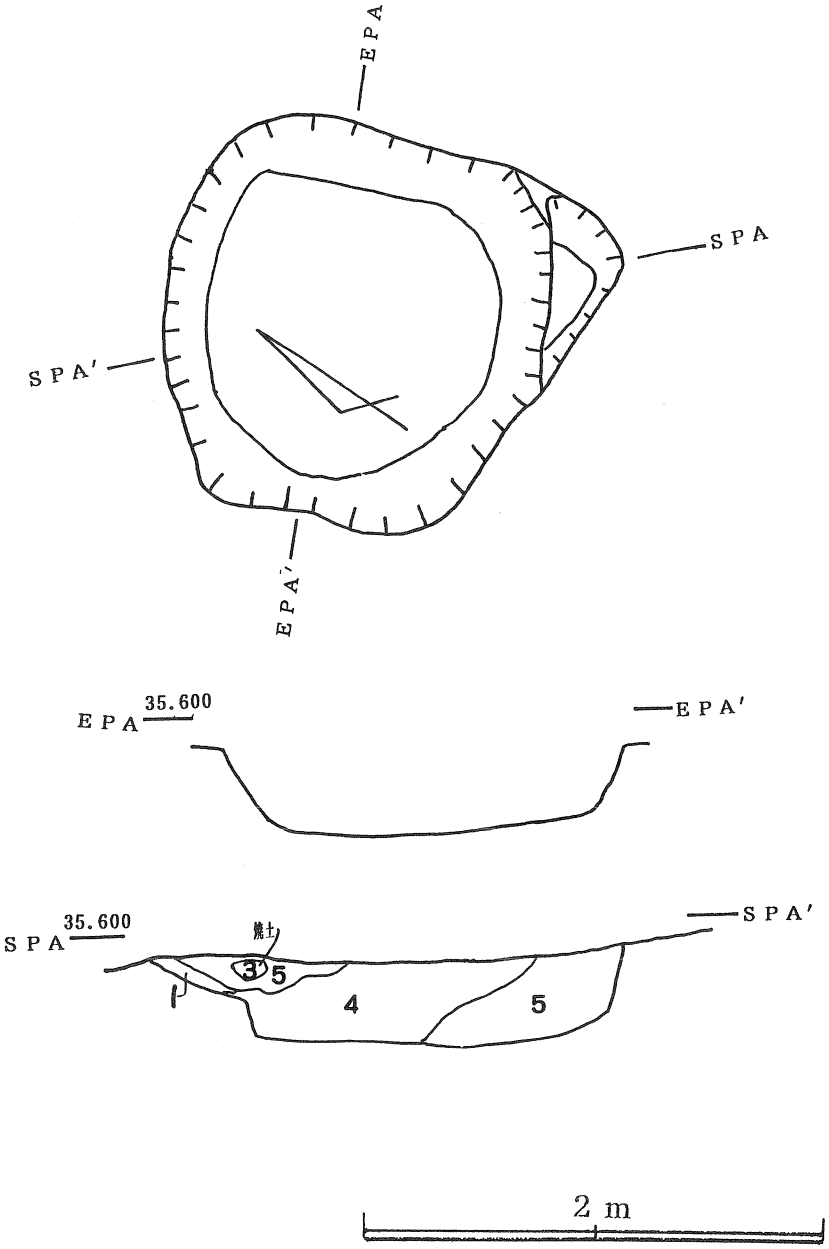


土層凡例
１黒褐色（ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
２暗褐色（ローム粒とローム粒子をやや多く含む。しまりは普通。）
３黒　色（焼土粒子を少量含む。しまりは普通。）
４赤褐色（焼土粒と焼土粒子の中に黒色粒・炭粒子を少量含む。しまりは普通。）
５黒褐色（炭粒と焼土粒子を少量含む。しまりは普通。）
６黒褐色（炭粒と焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
７黒褐色（炭粒を多く含み、焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
８暗褐色（焼土粒と焼土粒を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。）

第39図　第１号土坑実測図

(21) 第２号土　坑（第40図）

４号住西南隅から南側に0.10ｍ程の位置に所在する。形態は歪んだ円形を呈し、東西0.95ｍ、南北1.70ｍ、深さ0.36ｍを測る。上層部に比較的多くの焼土粒や炭粒が混在しているが、混在の度合いに多少の差はありながら底部にまで及んでいる。底部は概ね平坦で、遺物は皆無である。

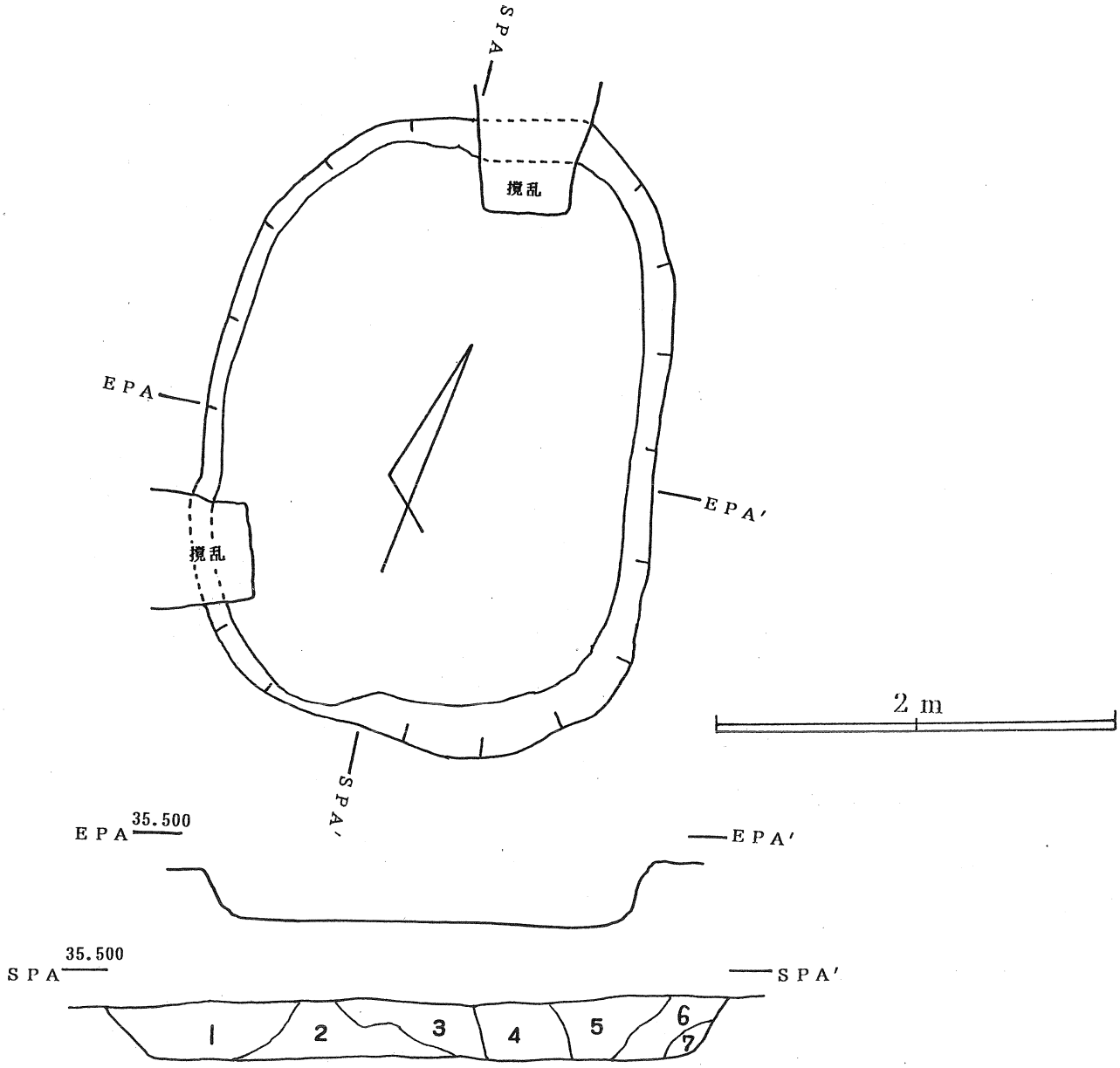


土層凡例
１明褐色（黒色粒・黒色粒子・焼土粒子を含む。しまりは良い。）
２赤褐色（焼土ブロックと焼土粒子をやや多く、炭粒も若干含む。しまりは普通。）
３赤褐色（焼土のみ。しまりは非常に良い。）
４暗褐色（ローム粒と炭粒を少量含む。しまりは普通。）
５黒　色（ローム粒子を少量含む。しまりは良い。）

第40図　第２号土坑実測図

(22) 第3号土　坑（第41・42図）

8号住南壁の西寄りに接して、ほぼ南北の方向で所在する。形態は楕円形を呈し、長軸3.22m、短軸2.29m、深さ0.26mを測る。堆積土には焼土粒が全体的に含まれている。底部のしまりは普通であり、その中央部付近の直上から有孔円板（2点）と椀が検出されている。



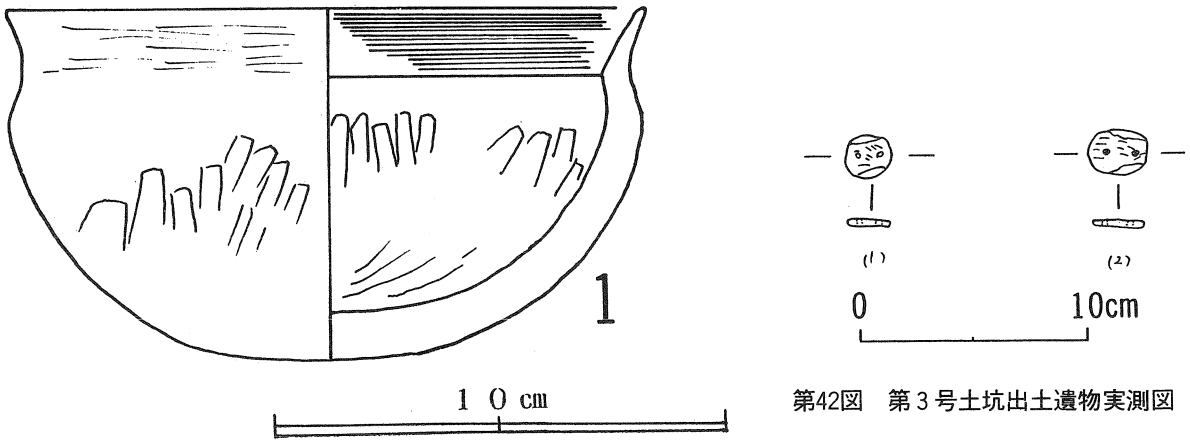
土層凡例
1褐　色（ローム小ブロックとローム粒を少量含み、ローム粒を少量、黒色粒も若干含む。しまりは普通。）
2暗褐色（ローム中ブロックと焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子も少量含む。しまりは普通。）
3黒褐色（ローム小ブロックを若干含み、ローム粒を少量含む。しまりは普通。）
4暗褐色（ローム小ブロック・焼土粒・ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。）
5暗褐色（ローム小ブロックとローム粒を少量含み、黒色粒も若干含む。しまりは良い。）
6黒褐色（ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは良い。）
7黒　色（ローム大ブロックを若干含む。しまりは良い。）

第41図　第3号土坑実測図

第３号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形・成整形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師 碗	器高 7.8 口径 13.9	丸底気味。体部上位から口縁部の一部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り。	黒褐色	砂粒	良好	外面全体に煤付着 北部中央床面

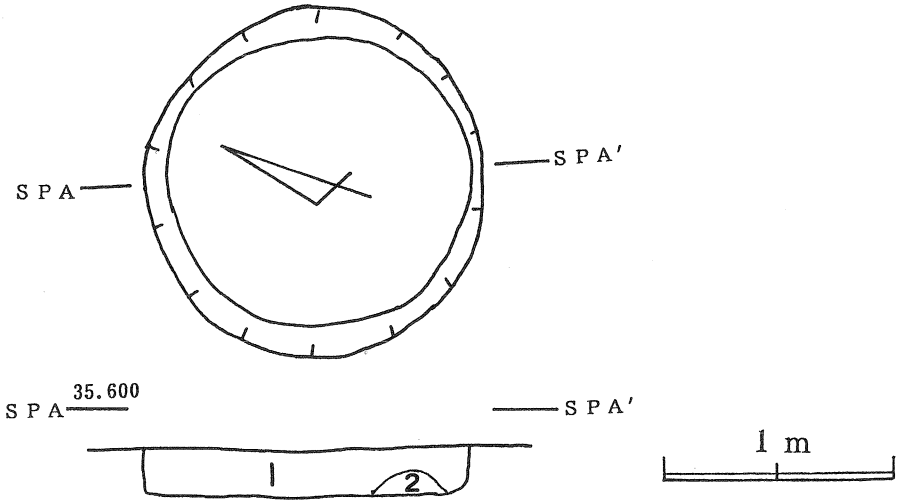
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
2	有孔円板	1.8	2.1	0.3	1.5	1.5	100	中央部覆土上層	滑石
3	有孔円板	2.0	2.5	0.3	2.0	2.0	100	中央部覆土中層	〃



第42図　第３号土坑出土遺物実測図

(23) 第４号土　坑（第43図）

７号住北壁の中央から北西方向に1.50m程離れた位置に所在する。形態は概ね円形を呈し、東西径1.54m、南北径1.53m、深さ0.21mを測る。底部は平坦であり、遺物は皆無である。

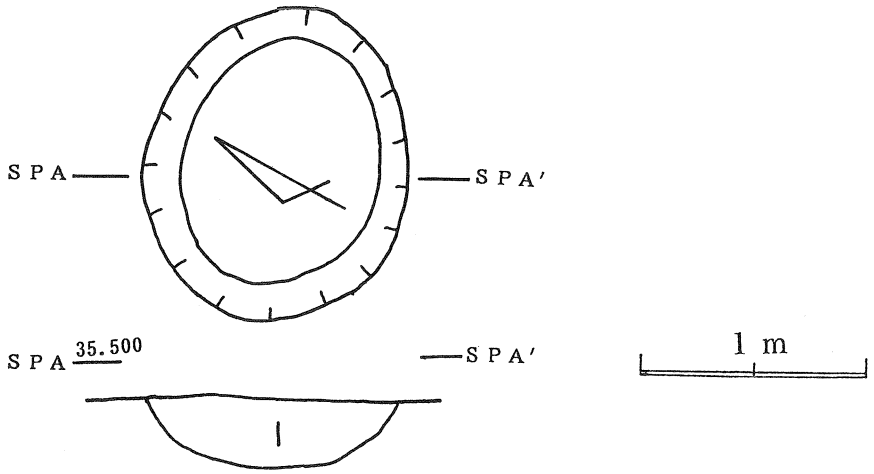


土層凡例
1黒褐色（ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を少量含む。しまりは普通。）
2暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を少量含み、黒色粒も若干含む。しまりは普通。）

第43図　第４号土坑実測図

(24) 第５号土　坑（第44図）

８号住北壁の中央から北西方向に0.35ｍ程離れた位置に所在する。形態は概ね楕円形を呈し、東西径1.39ｍ、南北径1.18ｍ、深さ0.30ｍを測る。底部は壁上に向かって彎曲しており、遺物は皆無である。

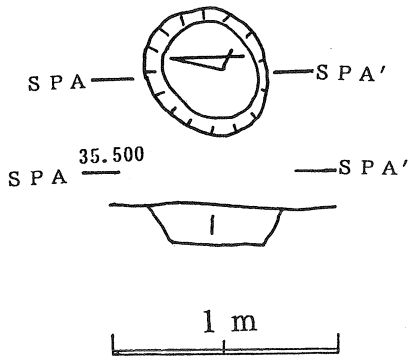


土層凡例
１黒　色（ローム粒とローム粒子を若干含む。しまりは良い。）

第44図　第５号土坑実測図

(25) 第６号土　坑（第45図）

８号住北西隅から北西方向に2.00ｍ程離れた位置に所在する小規模遺構である。形態はほぼ円形を呈し、東西径0.50ｍ、南北径0.55ｍ、深さ0.16ｍを測る。遺物無し。

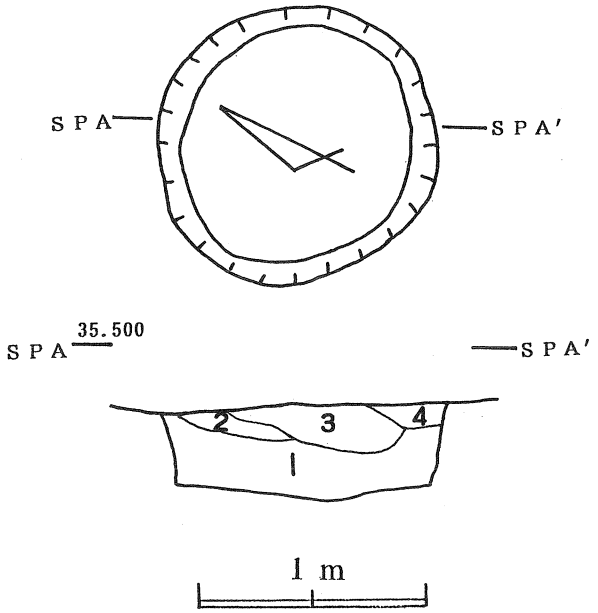


土層凡例
１黒　色（ローム粒を若干含む。しまりは普通。）

第45図　第６号土坑実測図

(26) 第７号土　坑（第46・47図）

10号住北壁から北に0.45ｍ程離れた位置に所在する。形態はほぼ円形を呈し、東西径1.28ｍ、南北径1.26ｍ、深さ0.39ｍを測る。底部はほぼ平坦で、中央部の東側において白色粘土塊が認められ、その西からは臼玉（１点）が検出されている。

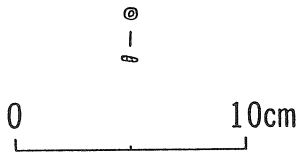


土層凡例
１暗褐色（ローム粒・ローム粒子・炭粒を少量含む。しまりはやや良い。）
２暗褐色（ローム粒を若干含む。しまりは普通。）
３黒　色（ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
４暗褐色（ローム粒子と黒色粒を若干含む。しまりは普通。）

第46図　第７号土坑実測図

第７号土坑出土遺物観察表

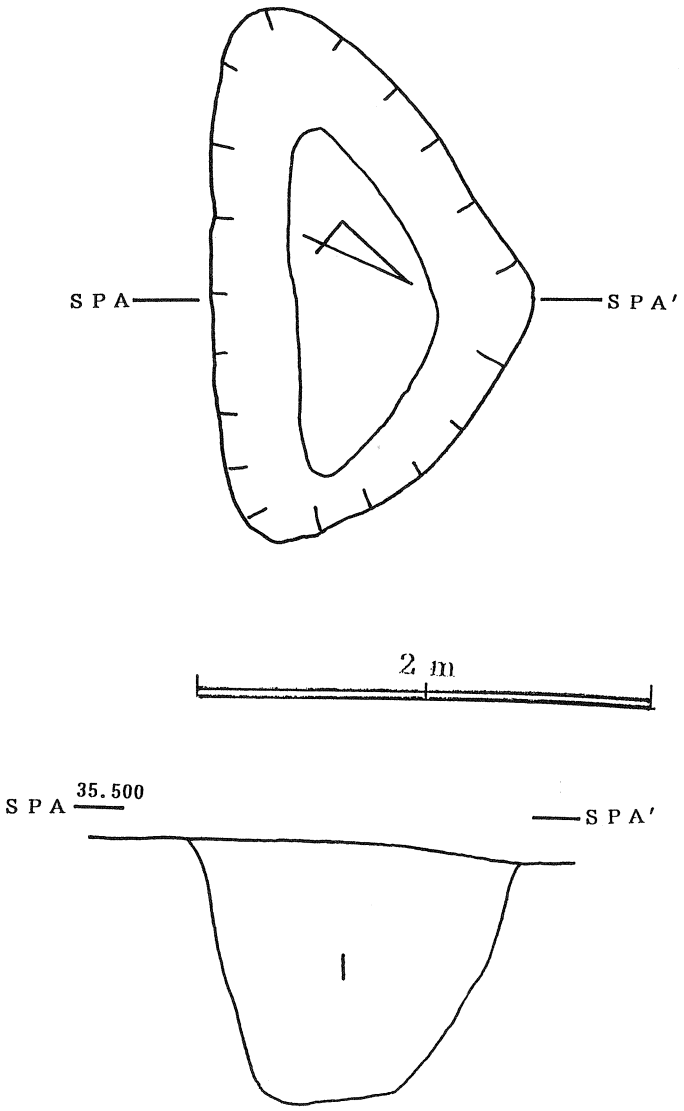
番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
1	臼玉	0.6	0.6	0.2	2.0	0.1	100	中央部覆土中層	滑石



第47図　第７号土坑跡出土遺物実測図

(27) 第8号土　坑（第48図）

6号住の西側及び3号土坑の南側の位置に所在する。形態は不整隅丸三角形状を呈しており、東西径2.30m、南北径1.44m、深さ1.14mを測る。底部はほぼ平坦で、遺物は皆無である。



土層凡例
1黒　色（ローム粒とローム粒子を若干含む。しまりは普通。）

第48図　第8号土坑実測図

(28) **その他**（第49図）

今回の調査において、遺構の確認作業のために取り出した土砂の主たる放棄場所として、搬出の利便と効率を考慮のうえ、調査区外に隣接する東・西の両地区を設定した。とくに16号住の周辺部に集中的に多量の土砂を搬出した。ここに収録した表採及び土捨て場からの採集遺物のうち、ほぼ90％は東地区から得たものである。

種別及び数量は次のとうりである（計43点）。

滑石製品　有孔円板（２点）臼玉（39点）

石 製 品　砥石（１点）

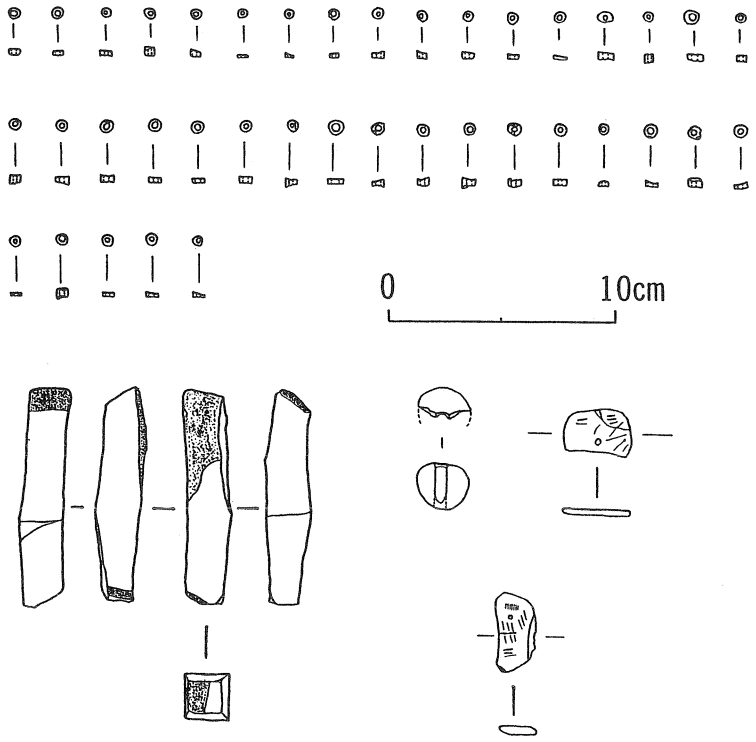
土 製 品　土玉（１点）

表採及び土捨場から得た遺物の観察表（1）

番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
1	有孔円板	2.1	3.0	0.3	2.0	3.0	60	C－5地区	滑石
2	〃	3.5	1.8	0.4	1.5	4.5	40	D－3地区	〃
3	臼玉	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	土捨場	〃
4	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
5	〃	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
6	〃	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
7	〃	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
8	〃	0.4	0.4	0.1	2.0	0.1	100	〃	〃
9	〃	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
10	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
11	〃	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
12	〃	0.4	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
13	〃	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
14	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
15	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
16	〃	0.7	0.5	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
17	〃	0.4	0.4	0.5	2.0	0.1	100	〃	〃
18	〃	0.7	0.6	0.4	2.0	0.2	100	〃	〃
19	〃	0.4	0.4	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
20	〃	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
21	〃	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
22	〃	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
23	〃	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
24	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
25	〃	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
26	〃	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
27	〃	0.6	0.6	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
28	〃	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
29	〃	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
30	〃	0.5	0.5	0.5	2.0	0.1	100	〃	〃
31	〃	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
32	〃	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃
33	〃	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
34	〃	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	〃	〃

表採及び土捨場から得た遺物の観察表（2）

番号	器種	法量（cm）			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
35	臼玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	土捨場	滑石
36	〃	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
37	〃	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	〃	〃
38	〃	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	〃	〃
39	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
40	〃	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
41	〃	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	〃	〃
42	砥石	9.5	2.0	1.9	…	53.0	…	C－3地区	4面使用
43	土玉	2.0	2.4	…	(5.0)	3.5	40	B－4地区	〃



第49図　表採及び土捨場から得た遺物実測図

4　おわりに

今回の野殿深作遺跡の発掘調査で確認した遺構としては、いわゆる和泉期の範疇に属する土器を主体にする竪穴住居跡19棟と土坑８基である。

遺跡は、小貝川の右岸に大きく展開する沖積低地の西寄りに南北の方向で延びる標高30ｍほどを示す段丘上と、その縁辺部に拡がる平坦地を構成区画として、５世紀中葉のころに機能していたと考えられる小規模集落跡である。

発掘調査も後半を迎えたころからである。いくつかの住居跡の貯蔵穴底部から、人為的と判断できる破砕状態の甕や壷類などの検出例をはじめ、４号住居跡では貯蔵穴に小型壷（ミニチュア）が、白色粘土塊で意図的に被覆されたと思われる出土例。大部分の高坏の出土状況が、その坏部と脚部との接合部分から人為的に破砕されていることが明らかに認め得られること。また６号住居跡の如くは、床面から側壁上部までの覆土の堆積層序の中に含まれる出土遺物の検出位置の状況把握をとうして、覆土の堆積が明瞭に作為的である事実を確認でき得たことに加え、その堆積の過程で層別に各種の遺物が遺棄されていたことが窺えること。さらには多くの祭祀関連遺物（有孔円板・無孔円板・勾玉・管玉・臼玉・剣・小型壷など）は（別表参照）、本集落跡において、実際に祭祀儀式が執行されていたことを示唆する遺物なのであろうか。など、調査をとうして得られたいくつかの疑問に留意するとともに、出土資料の相互関係を検討しつつ、本遺跡の性格や特徴などを考えるに至ったのである。

遺跡をめぐる生活環境は極めて恵まれている。たとえば生活用水に関する点に触れると、遺跡が立地する台地の縁辺部からは、緩傾斜をもって鬼怒川（絹川）から小貝川（蚕養川）へ通じる流水路として開削された大谷川（大井口用水）の岸辺へと達し、傾斜地の下部からはいまもなお枯渇することのない豊かな地下水が湧き出て大谷川に注いでいる。この湧水は、遺跡が機能していたころも集落の経営に欠かせない資源であったことが窺われるのである。

集落構成の必須条件には地理的環境をはじめとして、風・水害や食料対策などに加え飲料用水の確保もあげられようが、当該地一帯はこれらの諸条件をある程度満たしていたと思われる。しかし、今回の調査結果からは、和泉期の100年にも満たない短期間の生活文化をとどめる集落であったことは明瞭であり、いわゆる短期廃絶型集落跡とも呼ばれる様相を示す典型例と言える遺跡であろう。

遺跡の東北方に接して大谷川左岸の沖積地に鎌田集落が存在する。先年、鎌田地区の水田を対象に大規模な基盤整備事業が実施された際、工事に伴っておびただしい量の土器が発見されている。たまたま蒐集されていた出土品を実見する機会を得たが、ほとんど壷や甕類の破片で占められており、その具体的な出土状況や遺跡の範囲などはまったく把握できなかった。しかし、地元民の談話などを整理してみると、明らかに微高地に営まれていた五領期の範疇に含まれる集落跡であった可能性が想定できるのである。だとすれば、本跡に先行する時期に短期間機能していたと推測される鎌田集落跡も短期廃絶型集落の範疇に属すると言える。鎌田遺跡の立地条件は本跡と基本的に異なっている。いま小貝川の流路に沿う微高地は本低地一帯によく発達し、低地の地形を特徴づけているが、かかる微高地に生活基盤をおく人々の最大の悩みは小貝川の氾濫による堤防の決壊と水害であった。『続日本紀』神護景雲２年（768）８月庚申條の記録によると、班田農民が国司の命で口分田の荒廃を防ぐために毛野川（鬼怒川）の改修工事を行っている。この記録は日本最古の本格的な土木工事として知られるが、東国における河川管理の実態は、この資料からも窺えるように、奈良時代から遥かに溯る古墳時代においても無策に等しい状態におかれていたことが想像できる。鎌田遺跡が短期間で廃絶に至る最大の

理由は、低地帯での農耕生活を維持することの厳しさから逃避せざるを得なかった苦渋の選択があげられよう。治水対策がなおざりであった当時、たびたびの水害の影響による耕地の荒廃に、新たな安住の地を求めていた住民の心情が十分に理解できるのである。

昭和61年８月の台風10号の影響（下館地方の降雨量381ミリメートル）による大洪水のあと、小貝川流域の低地帯の住民に対する建設省の「河川激甚災害特別緊急事業」の施策によって５集落が集団移転し、109戸から構成される素晴らしい「旭ケ丘団地」が誕生している。それは千年余に及ぶ地域住民の悲願が結実したものと言えるのである。その後、この事業はさらに発展し、河川空間を水害防止と自然環境の保護などを前提とする活用が計画的に推進され、川の一里塚・サイクリングロード・桜づつみ・フラワーベルトなど、小貝川流域の各所にその成果を見ることができるのである。人間存在の根本的な意味が20世紀の後半に至ってようやく開花したと言えそうである。

以下、調査結果をふまえながら、野殿深作東遺跡の性格や特徴などを求めていきたい。

今回の調査による平面発掘面積は3,000㎡（60ｍ×50ｍ）であり、確認し得た住居跡や土坑跡など各遺構の配置状況は、特定の場所に偏ることもなく調査区の全域で平均的に確認されている。複合する遺構は調査区の北西端の近くで検出された13号及び14号住居跡の１ケ所のみで、その他の遺構は単独で確認されている。

住居跡の平面プラン・規模及び方向性について概観すると、表示したように18棟（完掘を果たせなかった19号を除く）のプランは方形と長方形にほぼ２分されている。方形を呈するのは１号・４号・５号・６号・７号・９号・10号・14号及び17号の９住居跡であり、長方形は２号・３号・８号・11号・12号・13号・15号・16号及び18号の各住居跡である。規模については、床面積が100㎡（約30坪）を超える際立って大型に属する遺構は認められなかったが、本跡では65㎡（約20坪）を超す４号と７号住居跡の２棟が最大規模に属し、以下50㎡（約15坪）クラスは10号住居跡。次いで33㎡（約10坪）クラスでは３号・13号及び16号住居跡であり、25㎡（約８坪）クラスになると１号・５号・６号及び11号住居跡があげられ、２号・８号及び９号はかなり縮小さ

住居跡別のプラン及び規模

住居No.	プラン	面積（㎡）	坪数	備考
1	方形	28.08	8.5	⑦
2	長方形	23.32	7.1	⑪
3	長方形	40.15	12.2	④
4	方形	68.88	20.9	②
5	方形	25.00	7.1	⑨
6	方形	25.00	7.1	⑨
7	方形	73.92	22.4	①
8	長方形	22.40	6.8	⑫
9	方形	21.20	6.4	⑬
10	方形	57.76	17.5	③
11	長方形	25.76	7.8	⑧
12	長方形	7.54	2.3	
13	長方形	35.75	10.8	⑥
14	方形	11.56	3.5	
15	長方形	9.80	3.0	
16	長方形	37.26	11.3	⑤
17	方形	10.88	3.3	
18	長方形	12.90	3.9	
19	方形？	31.92	9.7	東西辺を5.65ｍとして推計

備考の丸付け数字は床面積順位（3.3㎡＝１坪）

遺構別の滑石製品等出土数

遺構	円板	剣	勾玉	管玉	臼玉	計	ミニチュア土器
1住					11	11	
2住							
3住	3					3	
4住	5	2			1	8	1
5住	4	2				6	
6住	6	2				8	
7住	1				3	4	
8住	2		1			3	
9住							1
10住	1	1			36	38	3
11住					11	11	
12住							
13住		2		9	3	14	
14住							
15住							
16住			1		20	21	
17住							
18住							
19住	1					1	
3土	2					2	
7土					1	1	
土捨場等					39	39	
計	25	9	2	9	125	170	5

れて20㎡（約６～７坪）クラスの住居跡となる。14号・17号及び18号住居跡にあっては10㎡（約３坪）ほどの床面積を維持しているが、12号・15号に加えて17号住居跡などは、その所在が確認された時点から住居遺構として扱っていたものの、小規模であり、柱穴の痕跡もなく、かつ立上りの浅い側壁など、極めて粗雑な構造からは一般的な住居の機能を果たし得ていたとは言い難い。むしろ小屋組的な構造の屋外作業施設として供用されていた可能性が高い（面積を実感的に捉えるために、あえて坪を併記した）。一方、方向性については８号・13号・15号及び16号住居跡を除く15棟の長軸は概ね北西方向に偏し、除かれる４棟は東方及び北東の方向を指し、総じて一定の方向性を示していると言える。これらの住居跡にあっては規模や構造面、あるいは方向性に多少の相違があるとしても、基本的な面においては類似点も多く、かつ遺存状態も比較的良好であり、いずれもこの時期に一般的に見られる竪穴住居跡に共通する様相を示していると言える。屋内施設にあっても貯蔵穴を設備した例も比較的多く、また７号住居跡の如くは北壁に幅１ｍほどの入口設備が付設され、本跡における唯一の入口設備の例と言える。総じて規模や構造面からは特記すべき点は見あたらないが、理解に苦慮した点は、６号住居跡の側壁立ち上がりの平均値が70㎝を測るため、その高さから一般的な常識をもって、入口施設が付設するものと期待したものの、痕跡はまったく認められなかった。したがって、当該遺構は常時使用する必要性のなかった構築物だったのか、あるいは梯子的な工作物を充てて出入りの便を図ったものか、それとも必要時にのみ仮設していたのか、などが推測されたが、いずれにしろいくつかの疑問点を投げかけられ、検討課題として残されている。

ここで、住居跡の配置をめぐる特徴などをあげておきたい。

発掘調査の完了後、今後に予定される開発計画の参考資料を得る目的のもとに本遺跡の範囲確認調査を実施した。すでに公有化が図られている調査区外の東部から南部にかけて、広範な面積を対象にローム上層面まで表土の削平作業を行い、遺構の有無の確認に努めた。北部では東西に延びる農道と、その北側に拡がる耕作地は用途外にある関係から除かれた。その結果、南部では遺構と判断できる土層の変化はなく、東部には３か所ほど住居跡と断定するのにやや明瞭を欠く点もあったが、概ね方形状を呈し黒色土が露呈する区画を確認した。

いま調査区東部での３か所にはそれぞれ住居跡が存在するものと一応仮定し、また調査区の西部で所在が明らかな野殿深作遺跡は、すでに平成５年夏に茨城県教育財団が発掘調査を実施し、和泉期に比定できる４棟の竪穴住居跡が検出されているので、これらの確認例を加えて集落跡の拡がりと遺構の配置状況などを考えていくと、野殿字深作地内の一帯で和泉期において形成された集落の中心域は、今回の発掘調査区に求められるとしても大きな誤りはないように思われる。さらに調査区内で検出し得た19棟の住居跡には、多分に意図的な配置であることが推測できるのである。それは、調査区の南端近くで検出されている７号住居跡を概ね集落の南端として位置付け、調査区の東部と西部に配する住居跡から北端に所在する19号住居跡に連なる配置状況を観察する限り、あたかも、環状を呈することが理解されると同時にバランスを考慮した意図的な配置であることが指摘できる。このような配置状況からは、少なくとも事前に集落地の選定をはじめ、集落の全体的構成計画が緻密に立てられ、それに基づく集落形成が図られていた可能性が考えられるのである。ただこの場合、13号住居跡は14号住居跡と複合関係にあり、また１号・３号・５号及び16号住居跡に囲まれる状況で遺存する２号住居跡は、４棟との位置関係に隔たりがなく接近しすぎる向きが指摘できるために、この13号及び２号住居跡の２棟は他の住居跡よりも多少遅れて構築されたものと想像できる。

ところで発掘調査区で検出された石製模造品131点のすべては12棟（１号・３号・４号・５号・６号・７号・８号・10号・11号・13号・16号・19号）の住居跡と；２基（３号・７号）の土坑跡から伴出したものであり、土製模造品（ミニチュア土器）５点も３棟（４号・９号・10号）の住居跡から検出されたものであって、遺構

外からの発見はまったくなかった。

これらの石製模造品や土製模造品については、すでに弥生時代のころから信仰に伴う祭器類として用いられるようになり、それが4世紀の末ごろに至り、祭祀儀式の斎場として機能していたことを示唆する遺跡の特徴的な伴出遺物となるが、これが5世紀から6世紀代にはいわゆる祭祀遺跡として全国的に分布するようになる。このような現象は、遺跡や遺物の内容までも画一的となり、短期間のうちに等質的な遺跡が各地で営まれるようになる。その歴史的背景には、前方後円墳の地方への普及にも見られるように大和朝廷の勢力伸長と切り離しては考えられないという。古代における神への認識は、現代の我々には理解しにくい点が多い。つまり、生活に密接に関係する草木・池泉湖沼から巨樹・巨石・山塊・海洋島嶼などに対する神霊の存在を強く意識し、これらの自然現象に畏敬の念を抱くとともに信仰の対象とし、そこに依る神は霊能を発揮するものとして堅く信じていたようである。神に祈願する内容は、農耕の豊穣をはじめ生活全般にわたっていたことは言うまでもない。

いま祭祀遺跡として本集落を特定するにあたって、その祭祀が屋外において行われていたことが推測できる遺構や遺物は発見されてないことから、主たる祭祀の斎場は住居内と推察せざるを得ない。それにしても住居跡内部から祭祀に関わると思考される施設も見当たらない。したがって、祭祀の対象が何であったのかを明確にし難いために、以下、遺構・遺物などの検出状況をとうして屋内祭祀の根拠などをさぐっていきたい。

① 1号住・焼失家屋であり、焼土が床面に充満するわりには残存炭化材が極めて少量であることは、完全に焼却されたのであろうか。炭化米検出。

② 3号住・炉跡直上に坏を置き、その上に砥石を置くなど、あまり例のない出土状況と言える。

③ 4号住・南壁沿いのピット内部に埋置された白色粘土塊の下部から小型壷（ミニチュア）が、その西側からは砥石が検出される。また北東コーナーの床直上から出土している高坏は脚部を失っており、その坏部の破砕面に力を加えたと思われる痕跡が残る。

④ 5号住・北西コーナーの床直上から高坏2点出土。いずれも脚部が破砕され、それぞれの坏部は接近して遺存していた。ともに優美な造りの土器であるが、極めて不自然な出土例と言える。

⑤ 6号住・焼失家屋であり、炭化材が良好に遺存。側壁の立上りが高く、覆土は人為的に埋め戻していたことが観察できるとともに、その過程において円板・剣などの石製模造品を遺棄していることが窺える。刀子片・焼成前底部穿孔土器片も出土する。

⑥ 7号住・U字型の鉄製鍬先出土。北壁に出入口を付設。床直上から鉄滓検出。東南コーナー付近の床直上から甕2点、高坏3点、坏1点が出土しているが、いずれも破砕状態。うち甕の2点はやや大型の甕の中に小型の甕が納められる特殊な出土例。また脚部を欠く高坏の坏部が2点と坏1点の3個が重ねられた状態で出土する。土玉7点、鉄滓12点は他の住居跡に比べ量的に多い。

⑦ 8号住・石製模造品の勾玉1点出土。床直上から完形の壷・坏とともに鉢型を呈する単孔の甑及び砥石などが出土する。

⑧ 9号住・脚部と坏部の切断面が磨かれた如く痕跡を残す高坏と、北西コーナーの貯蔵穴底部から破砕状態の甕1固体分が、また床直上から内・外面ともに赤彩を施す小型壷（ミニチュア）1点が出土する。

⑨ 10号住・北壁沿いから壷・坏・高坏などの完形品が数個出土。また東南コーナー付近からも臼玉が36点出土しており、床直上からも小型壷（ミニチュア）3点が出土する。

⑩ 11号住・柱穴なく、側壁の立上りは浅い。とくに東南辺に沿う床面は地山と同一レベルを示し、ほとんど側壁の痕跡は認められない。床中央部に炉を設ける。北西コーナーの北と南に付設される貯蔵穴底部からそ

れぞれ破砕状態の高坏が検出されているが、これは同一固体の高坏を意図的に二分割して貯蔵穴内に遺棄されたものである。また、南側の貯蔵穴からは臼玉４点が出土する。

⑪　12号住・小規模ながら床中央部に炉が設けられ、その付近から鉄滓が出土する。

⑫　13号住・床直上から管玉９点が一括出土する。

⑬　14号住・13号住に切られる複合住居跡で建て替えが行われている。一次住居の床レベルは13号住と同一。二次住居の床面積は一次のそれよりも若干広くなっており、床中央部から北東コーナーにかけて相当量の砕かれた土器片が集中して出土する。

⑭　15号住・床中央部に炉を設ける。鎌先が出土する。

⑮　16号住・覆土から高坏の脚部が２点出土。南西コーナーに付設される方形状の貯蔵穴底部に焼土塊が見られる。床中央部に長方形状の掘方があり、その北側の２か所に炉が設けられ、炉の内部から１固体分の高坏が脚部と坏部に砕かれた状態で出土する。遺構のほぼ全域から臼玉20点が検出される。

⑯　17号住・側壁の立上りはほとんど認められず、床面は地山のレベルと同一。西側に貼床が顕著に残り、その直上から鉄滓が数点出土する。

⑰　18号住・17号住とほぼ同じ構造で床面の輪郭を３か所のピットから想定する。ビットには白色粘土が詰められ、床は貼床を呈する。

⑱　19号住・調査区の北端に位置し、農道との関係で部分調査にとどまる。鹿沼土を敷き詰めて貼床とした手法が窺える。焼失家屋で炭化材が良好に遺存する。白色粘土塊が南壁の中央から北に大きく拡がり延びる。

⑲　土坑跡のうち、４号・５号・６号及び８号については用途不明である。

⑳　１号及び２号土坑跡・焼土粒と炭粒が混在する堆積層が観察される。

㉑　３号土坑跡・全体的に焼土粒が堆積。底部直上から有孔円板２点と埦片が出土する。

㉒　７号土坑跡・底部中央部で白色粘土塊が認められ、その付近で臼玉１点を検出する。

ここに主たる遺物・遺構などの出土状況と観察結果を整理してみたが、さらに、石製及び土製模造品を除く他の遺物について検討してみると、一般の住居跡では得られないいくつかの特殊な問題点がある。とくに高坏に関しては極めて不可解な扱いが注目されるのである。たとえば２個の貯蔵穴に同一固体を分割のうえそれぞれ遺棄されているばかりか、相当数の高坏が坏部と脚部とが意図的に破砕されており、その要因は明らかに祭祀行為との関連で考えざるを得ないし、かつ高坏は祭祀を行う際に多用された主要な祭具であった可能性が容易に想像できる。また破砕状態の壷や甕などが、石製模造品の臼玉など玉類を多量に収納していた出土例がすでに報じられていることから、これらの土器も祭祀儀式には不可欠の祭具であったかも知れない。さらに単純口縁で単孔の鉢形を呈する完形の甑底部片14点が出土している。甑の本来的な用途は壷や甕と組み合わせて炊飯具として用いられたもので、それとの関連でカマドの問題が浮上してくるが、東日本においてカマドが住居内に常置され一般化するのは６世紀以降であり、それよりも先行する時期に営まれている本跡の住居跡内には、カマドの付設はまったくなく、19号住居跡の如く多量の粘土の出土状況をもって粘土組のつくりつけカマドの遺存とは認められない。したがって、甑もまた壷や甕と同様に祭具類として供用されていたものと思われる。

このように、主として土器類の遺棄の実態をとうして推測されることは、土器類が祭祀儀式を行う際に、つねづね使用されていたと仮定しても、その量的面と極めて粗雑な破砕遺棄の状態からは、各住居跡において、僅かな回数の祭祀儀式だった可能性が容易に想像できるのである。

なお、鹿沼土を敷き詰め床面を固定させている19号住居跡の如くは、鹿沼土で埋葬主体部を構築し、県域における出現期古墳のひとつにあげられる岩瀬町・狐塚古墳の例との関連から、古墳時代の前半のころは、県西

地方において鹿沼土に対する呪術的な特殊な扱いが一般化していたのかも知れない。してみれば、住居の構築前に、すでに祭祀を前提とする意図が見え隠れしていることも十分に窺うことができるのであり、当該集落跡の特殊な性格の一面を覗かせているとも言えるのである。

以上、発掘調査の結果からは、古墳時代中期前葉のころに機能していた小貝川右岸台地上の一集落が、和泉期という短期間の経営をもって廃絶されたばかりか、意外にも祭祀儀礼に携わっていた専業集団であることに加えて、遺棄された数々の祭具類の出土状況などをとうして、集落跡の性格を知り得たわけである。

最後に触れておきたいのは祭祀儀礼の対象である。遺跡の立地と生活環境から考えられることは、この地方が古くから水に関わってきたことを物語る、いわゆる精神的文化財とも言うべき「水神」を祀る小祠が小貝川流域の低地帯にいくつも建っている。治水対策もなく、かつ、水路が固定された川筋もなかったと判断できる当時にあっては、低地帯に生産基盤をおく住民はたえず洪水の危険に脅かされていたことは容易に想像できる。したがって、野殿台地から望まれる広大な低湿地のさらなる安穏を祈願して、おそらく「水神」を奉祀していたと推測しても不自然ではあるまい。集落をあげて神の霊威にすべてを託していたように思われてならないのである。

おわりにあたり、意をつくせなかった面も多分にあり、かつ、独断と即断で記した点も少なくないと思われる。それはすべて浅学非才のなせるところであり、お許しを願いたい。

参考文献

考古学資料刊行会『番清水遺跡調査概報』昭和43年

西宮一男『常陸狐塚』昭和44年

大場磐雄『祭祀遺跡（神道考古学の基礎的研究）』昭和45年

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地名表』昭和45年

船橋市教育委員会『外原』昭和47年

下館市教育委員会『外塚遺跡』昭和60年

筑波大学歴史・人類学系『古墳測量調査報告書１（茨城県南部古代地域史研究）』平成３年

建設省『鬼怒川・小貝川（自然文化歴史）』平成５年

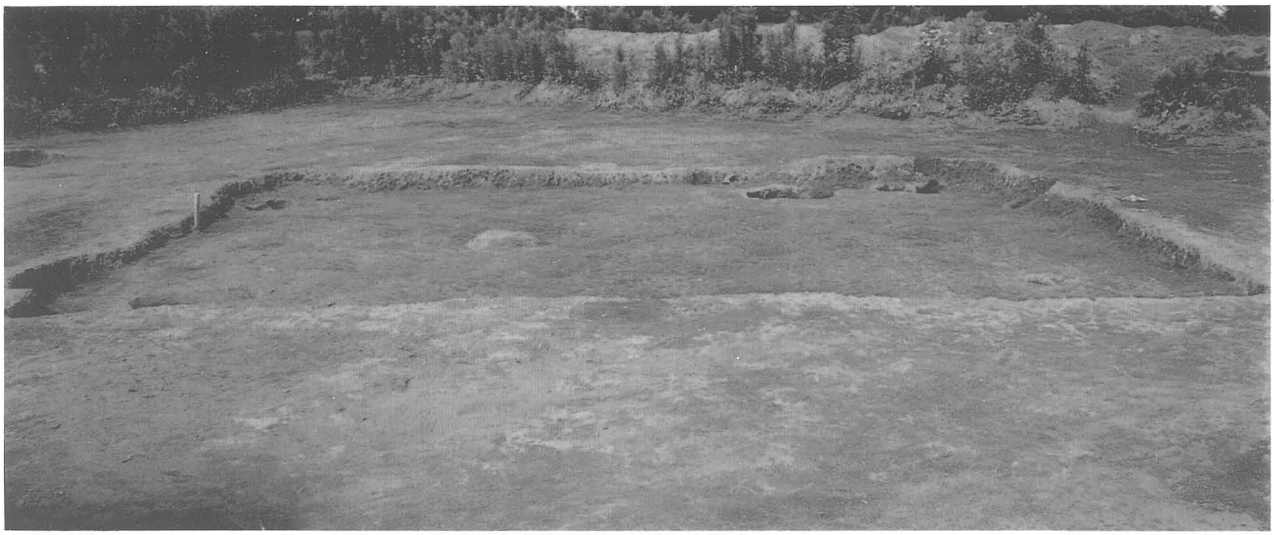
茨城県教育財団『野殿深作遺跡』平成６年

写　真　図　版

遺跡から筑波・足尾・加波の山並みを望む

遺　跡　全　景

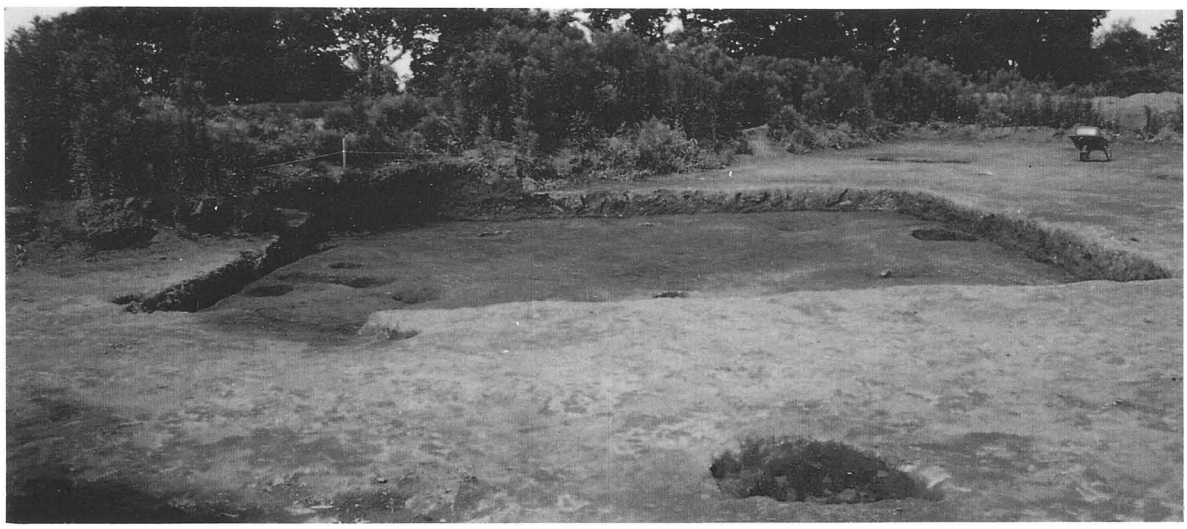
現場テントの下で団欒のひととき



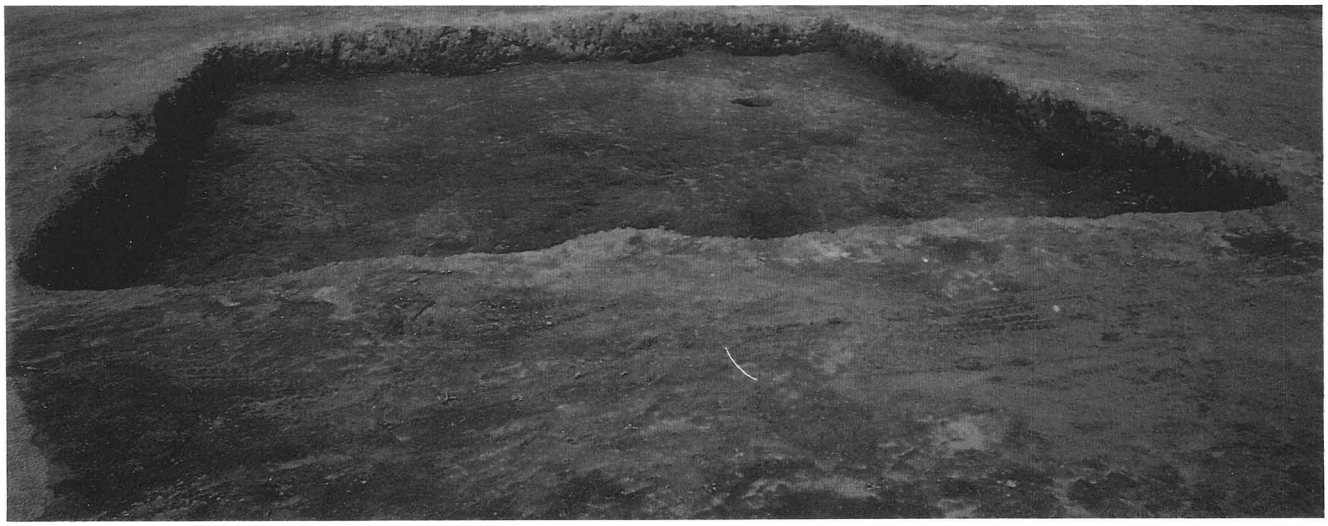
第 1 号住居跡

第 2 号住居跡

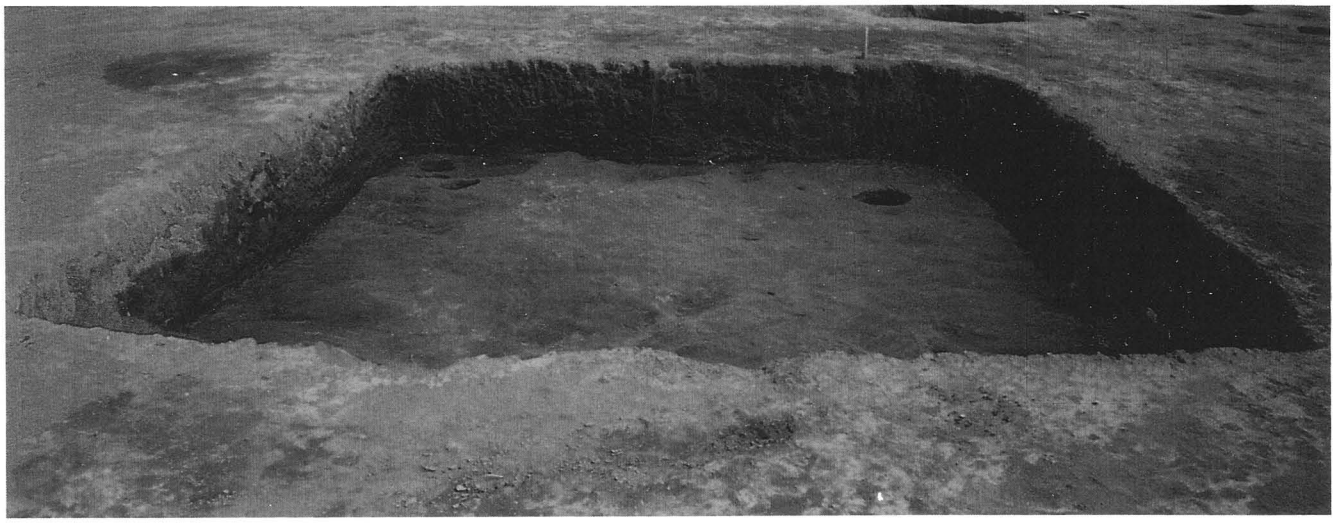
第 3 号住居跡



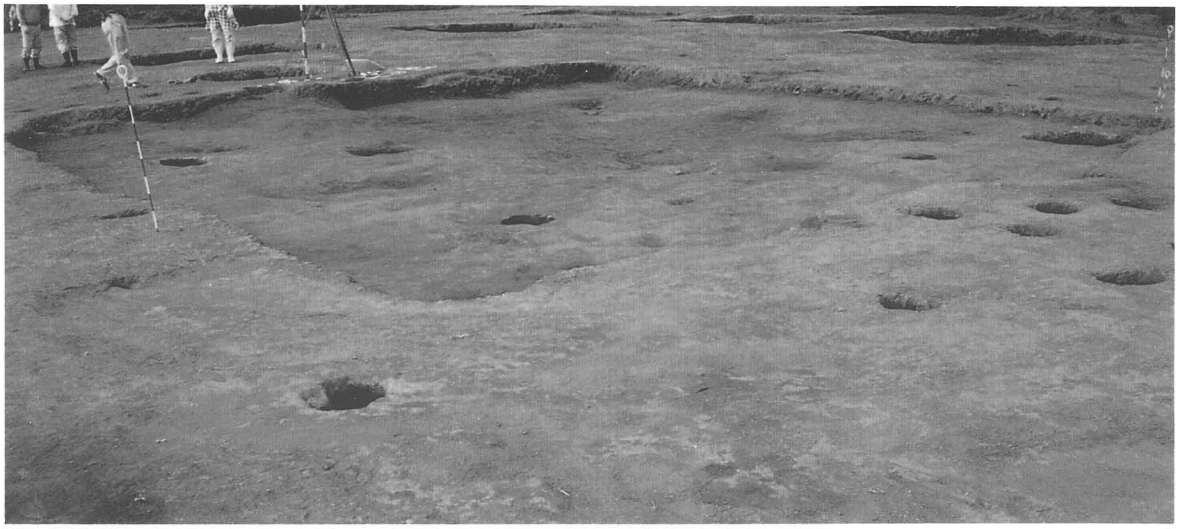
第 4 号 住 居 跡



第 5 号 住 居 跡



第 6 号 住 居 跡



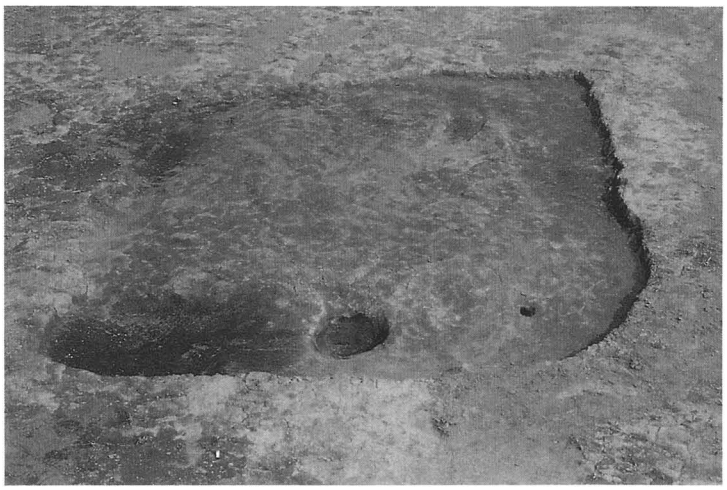
第 7 号住居跡

第 8 号住居跡

第 9 号住居跡

第 10 号 住 居 跡

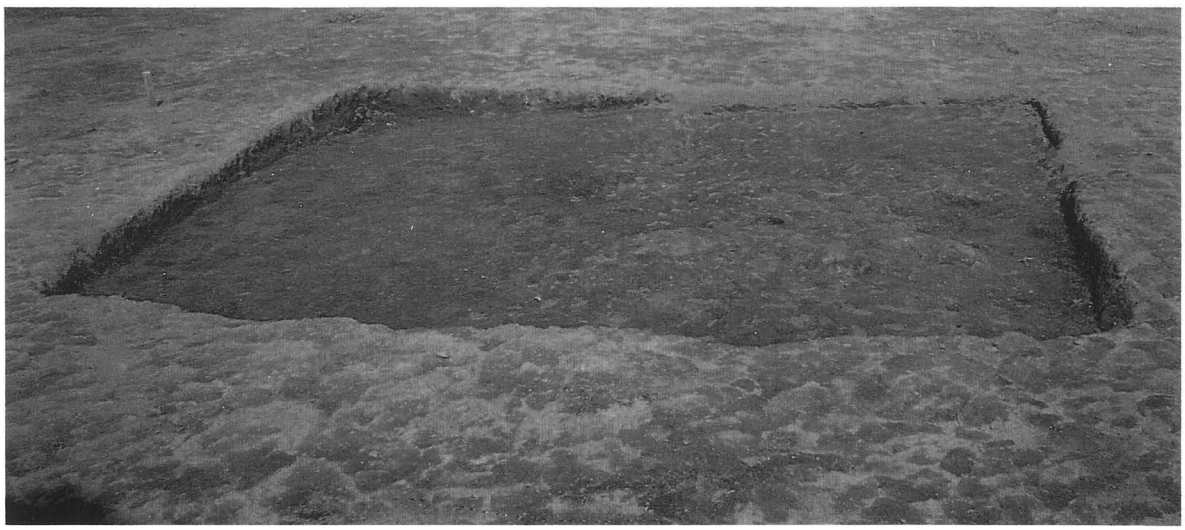
第 11 号 住 居 跡



第 12 号 住 居 跡

第13号住居跡

第14号住居跡



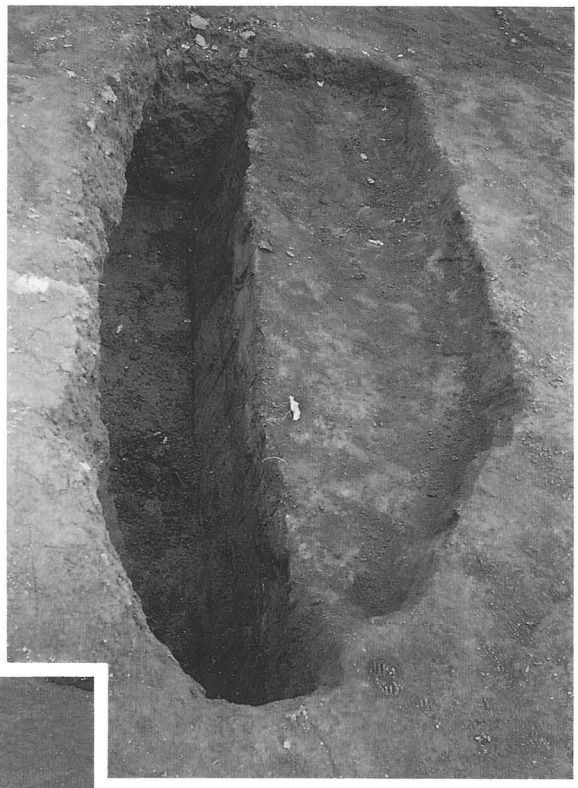
第15号住居跡

第16号住居跡

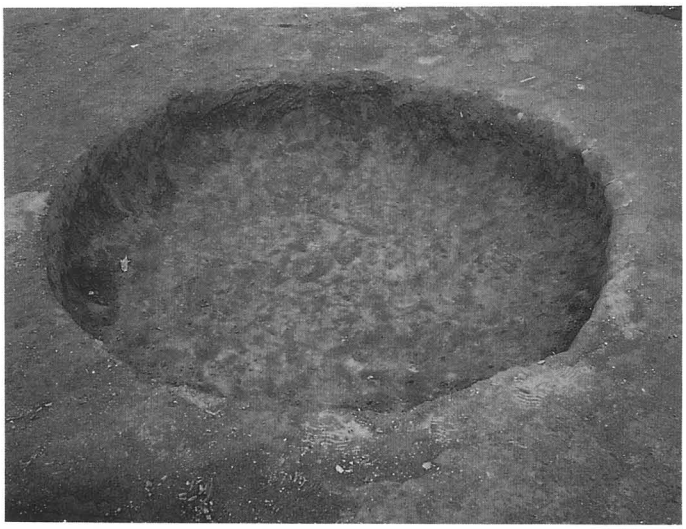
第17号住居跡

第18号住居跡

第19号住居跡

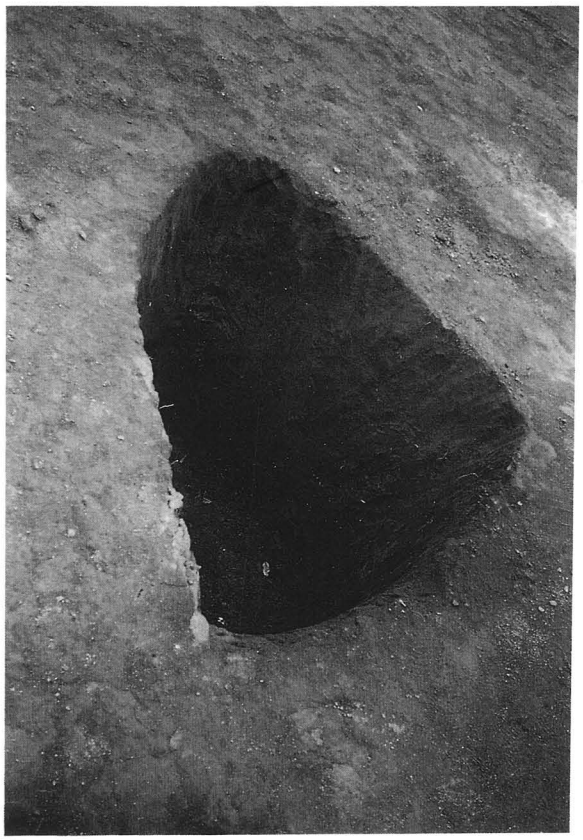


第1号土坑



第2号土坑

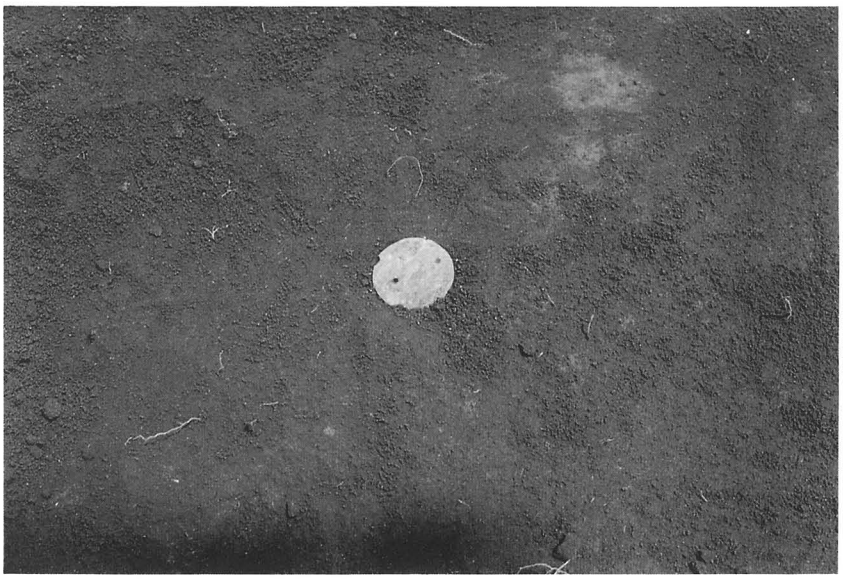
第 3 号 土 坑



第 8 号 土 坑

第３号住居跡・砥石・坏の出土状況

第４号住居跡・貯蔵穴内白色粘土下部の小型壷出土状況



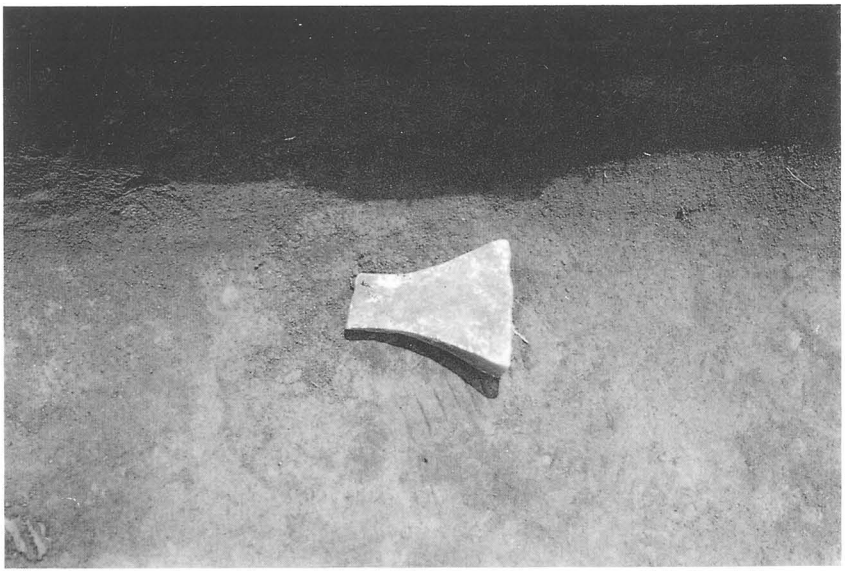
第４号住居跡・有孔円板の出土状況

第５号住居跡・高坏の出土状況

第７号住居跡・土器の出土状況

第７号住居跡・甑の出土状況

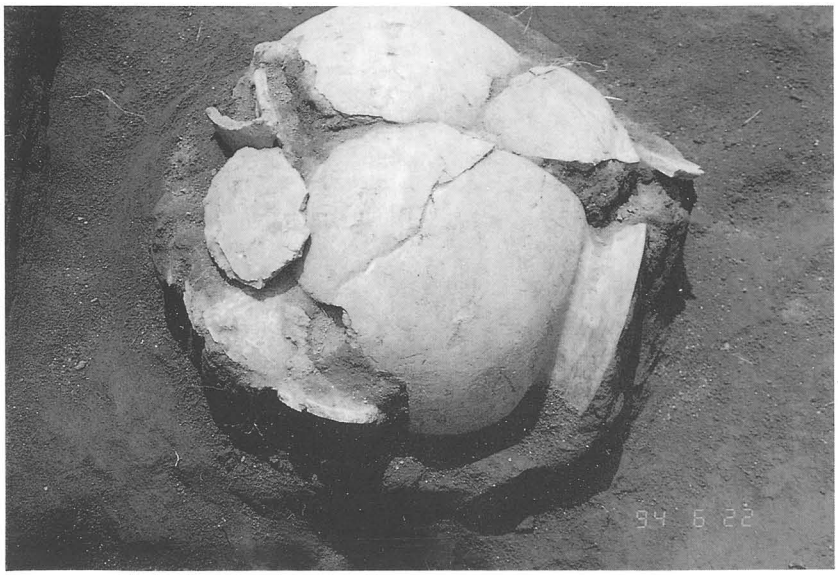
第７号住居跡・鍬先の出土状況



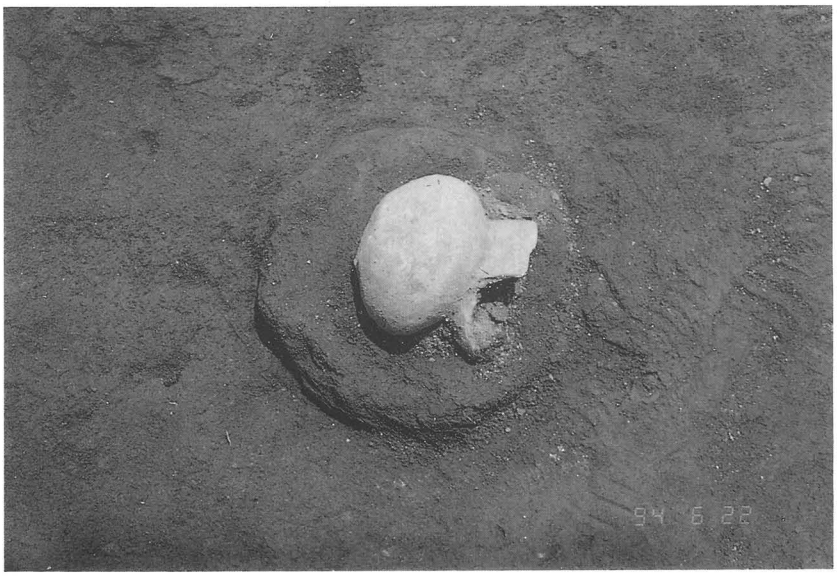
第８号住居跡・砥石の出土状況

第９号住居跡・貯蔵穴内土器の出土状況

第10号住居跡・須恵器(口辺部)の出土状況



第10号住居跡・貯蔵穴内土器の出土状況



第10号住居跡・小型壷の出土状況

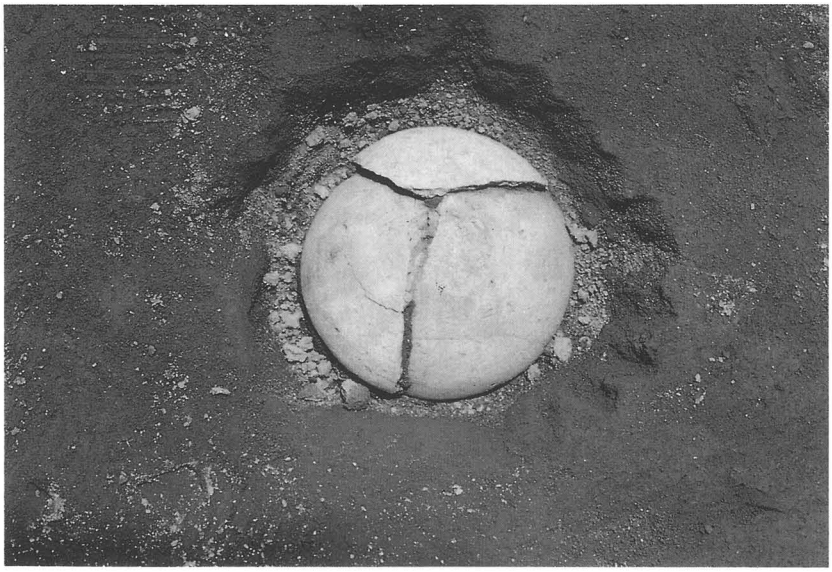
第10号住居跡・臼玉の出土状況

第10号住居跡・坏の出土状況

第12号住居跡・堅く焼きしまる床面の状況

第13号住居跡・管玉の出土状況

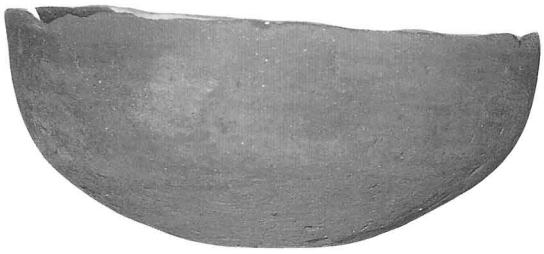
第15号住居跡・鎌先の出土状況

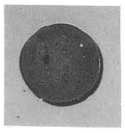


第16号住居跡・坏の出土状況

第16号住居跡・勾玉の出土状況

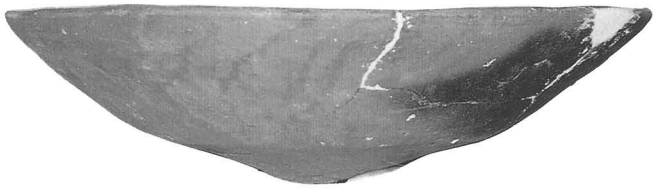
第１号住居跡出土遺物

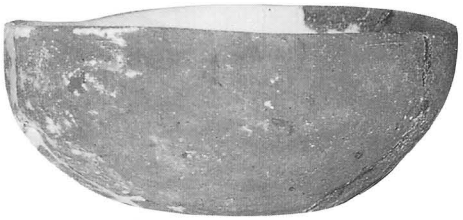


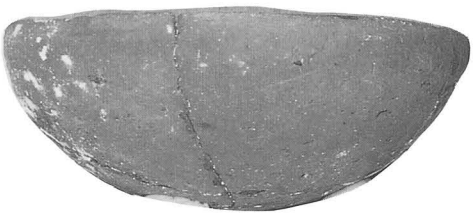


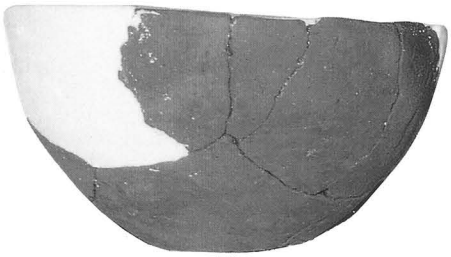
第３号住居跡出土遺物

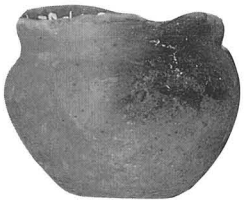
第２号住居跡出土遺物

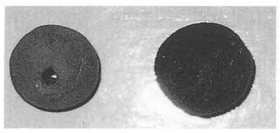








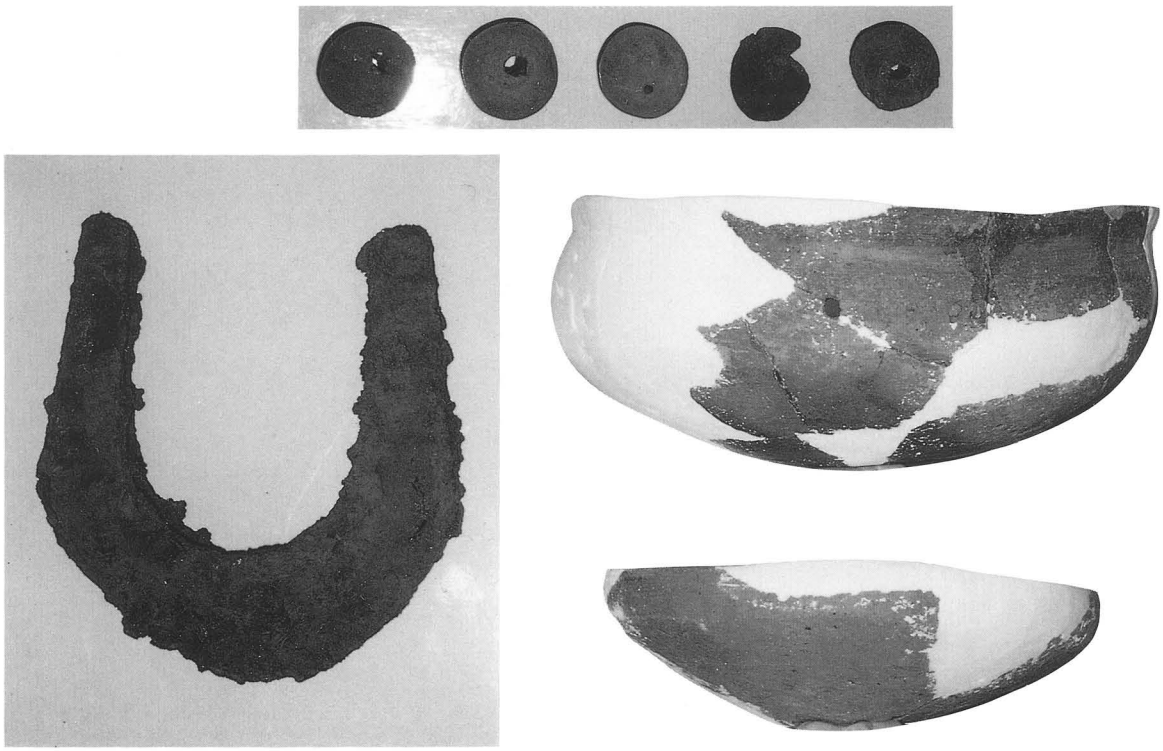




第４号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物

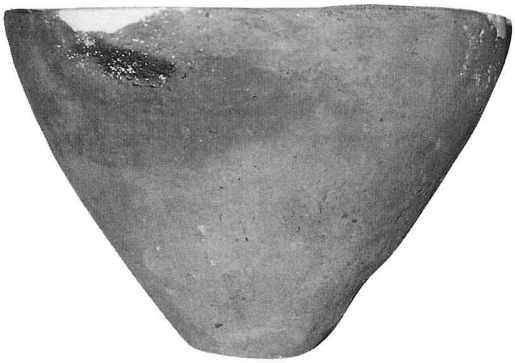
第６号住居跡出土遺物



第７号住居跡出土遺物（１）

第７号住居跡出土遺物（２）

第７号住居跡出土遺物（３）

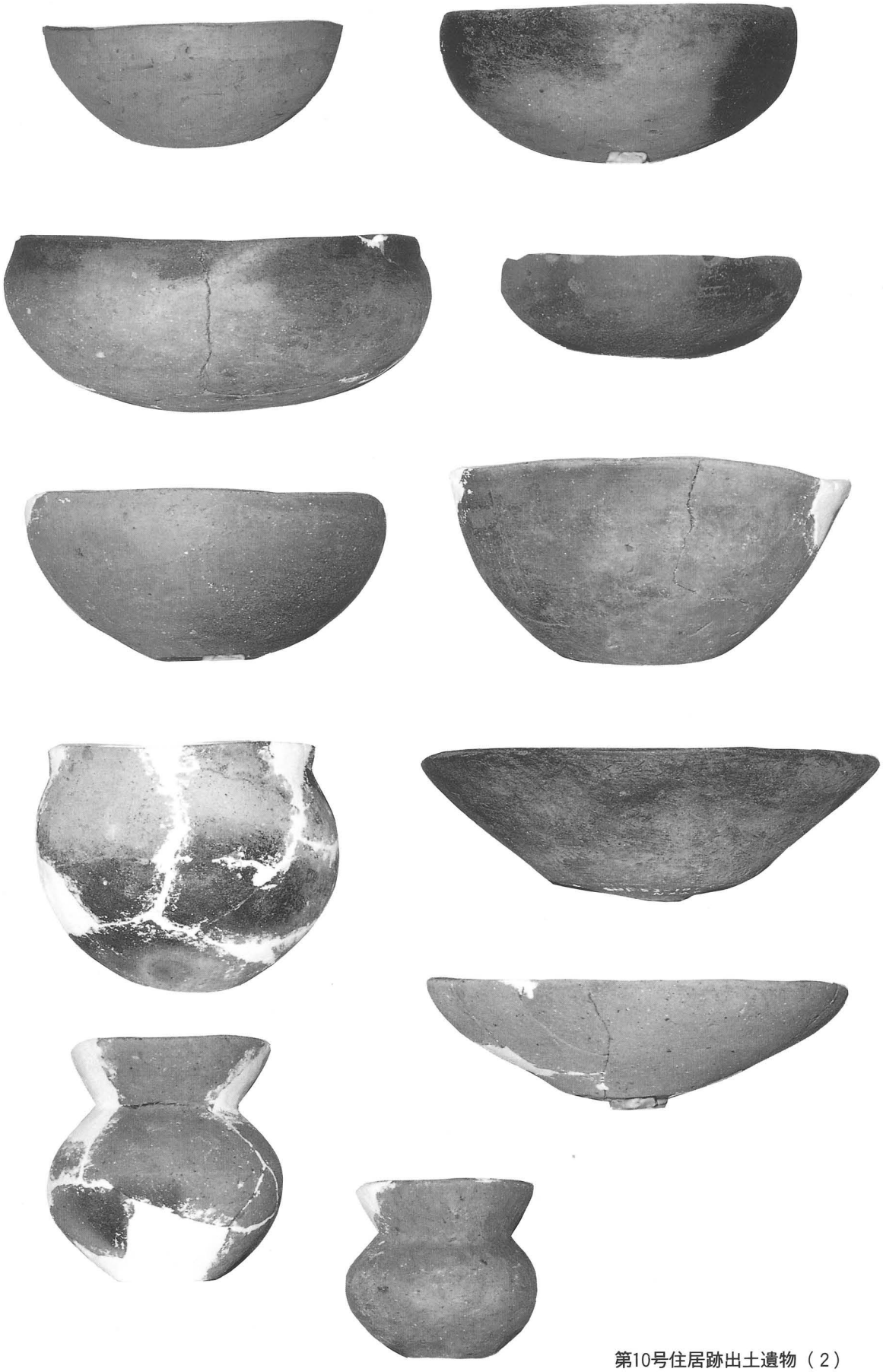


第８号住居跡出土遺物（１）

第8号住居跡出土遺物（2）

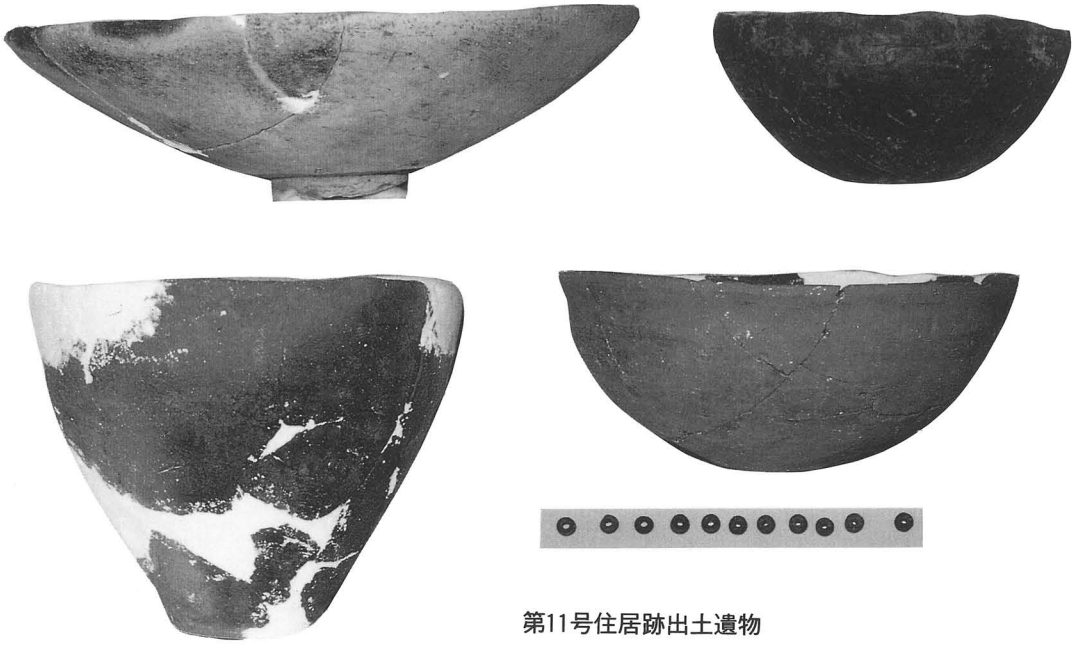
第９号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物（１）

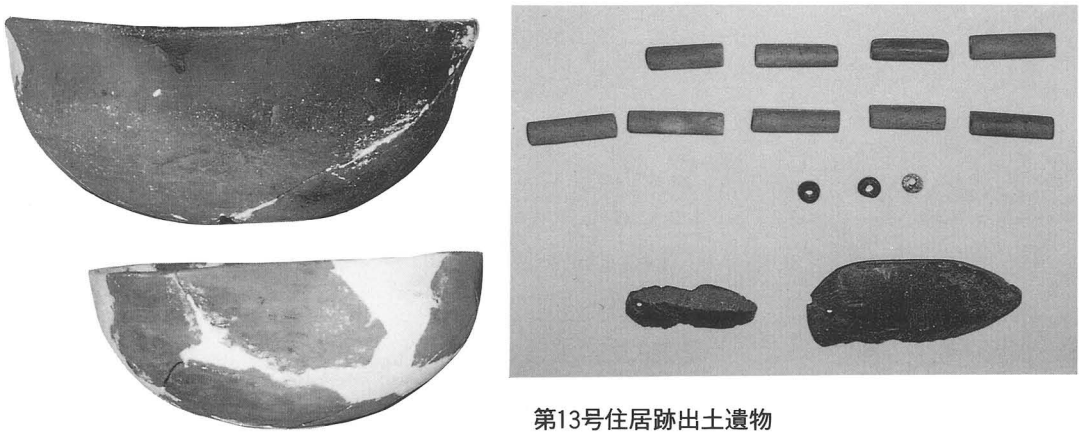


第10号住居跡出土遺物（２）

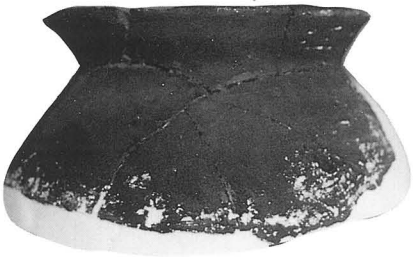
第10号住居跡出土遺物（3）



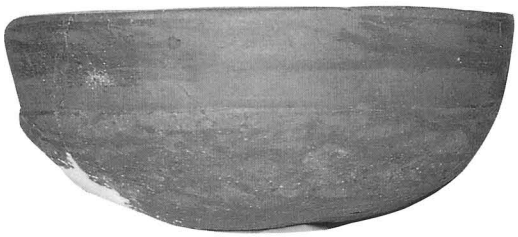
第11号住居跡出土遺物

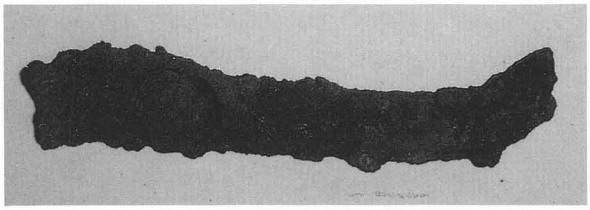


第13号住居跡出土遺物

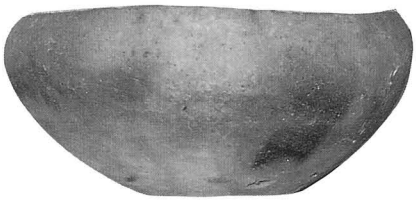


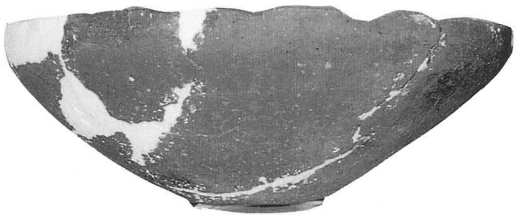
第14号住居跡出土遺物

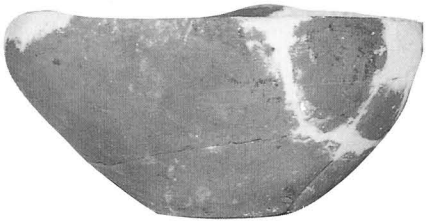




第15号住居跡出土遺物

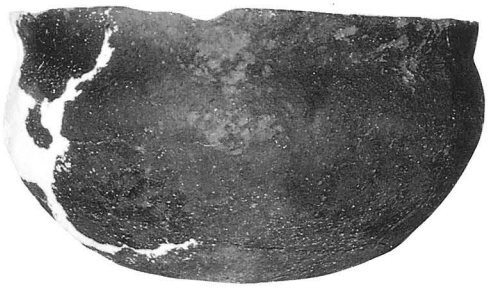






第16号住居跡出土遺物（１）

第16号住居跡出土遺物（２）



第3号土坑出土遺物

野殿深作東遺跡
（集落跡発掘調査報告書）

平成８年３月31日

発　行　下館市教育委員会
下館市下中山732の１

編　者　西　宮　一　男

印　刷　中　野　印　刷
TEL 0296（25）4737㈹